

新宿のニューカマー韓国人の ライフヒストリー記録集 4

신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집 4

新宿の韓国人100人の話プロジェクト



韓国料理店と共にタイなど各国の料理店が混在する百人町地区

2011 年 9 月 15 日

目次

ごあいさつ / 인사말	1
プロジェクトの概要 / 프로젝트 개요	3
＜インタビュー 1＞	5
キョウさん (20代・女性) 「濃密すぎる 29 年」 2011 年 4 月 19 日、ソウル出身、会社経営、日本在住 5 年 インタビュアー：渡辺幸倫	
＜インタビュー 2＞	9
CH씨 (30 代 후반・ 여성) 「外国人 전업주부로서 큰 힘이 되진 않았지만, 일본에서 행복한 가족을 이루고 살았기에, 이번에는 내가 도움을 줄 차례」 2011 年 6 月 1 日、경기도 출신、전업주부、일본체재 16 년째 인터뷰：이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어졌다)	
＜インタビュー 2(日本語訳)＞	13
CHさん (30 代後半・女性) 「外国人専業主婦だけど、日本社会で家族幸せに暮らせたので、今度は自分ができる ボランティアを」 2011 年 6 月 1 日、京畿道出身、専業主婦、日本滞在 16 年目 インタビュー担当：李 埈鉉 (インタビューは韓国語で行われた)	
＜インタビュー 3＞	17
NY 씨 (20 代/ 여성) 「꿈을 향하여 앞으로 나아갈 수 있게 해준 유학생활」 2011 年 7 月 2 日、대구출신、대학교 4 학년、일본체재 4 年 인터뷰어：오세연	
＜インタビュー 3 (日本語訳)＞	21
NY さん (20 代/女性)、「夢に向かって進めるように、勇気を与えてくれた留学生活」 2011 年 7 月 2 日、大邱 (テグ) 出身、大学 4 年生、日本滞在 4 年 インタビュアー：呉 世蓮	
＜インタビュー 4＞	25
H さん (30 代・女性) 「商売、山あり谷あり」 2011 年 7 月 7 日、テジョン出身、店舗経営、日本在住 13 年 インタビュアー：渡辺幸倫	

<インタビュー 5> 29

Cさん (40代、男性) 「日本で迎えた人生の転機」

2011年 7月23日、慶尚南道出身、会社員、日本暦17年目

インタビュアー：ソン・ウォンソク

<インタビュー 6> 32

Cさん (20代、男性) 「放射能は怖いけどチャンスを逃したくなかった」

2011年7月24日、ソウル近郊出身、学生、日本在住4カ月

インタビュアー：武田里子

<インタビュー 7> 35

Pさん (19歳、女性) 「友だち母子」

2011年7月24日、ソウル近郊出身、学生、日本在住4カ月

インタビュアー：武田里子

<インタビュー 8> 38

Bさん (20代・男性) 「10年後の新大久保の変化」

2011年8月1日、釜山出身、大学生、日本滞在歴4カ月

インタビュー担当：河合優子

<인터뷰 9> 41

D씨 (40대 중반 · 남성)

「한일간의 기술 교류로 더 강한 IT 국가로의 성장」

2011년 8월 1일, 서울 출신, 회사 경영, 일본체재 14년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

<인터뷰 10> 45

G씨 (30대 중반 · 남성)

「어머니를 따라 오게 된 일본, 이제는 이 곳이 고향같은 곳」

2011년 8월 1일, 서울 출신, 회사원, 일본체재 14년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

<インタビュー 11> 48

キムさん (20代・女性) 「就職する前に日本語を身につけたい」

2011年8月3日、盆唐(ブンダン)出身、大学生、日本滞在歴1年1カ月

インタビュー担当：河合優子

<인터뷰 11(한국어번역)> 51

김 모씨 (20대 · 여성)

「취직하기에 앞서 일본어를 익히고 싶다」

2011년 8월 3일, 경기도 분당출신, 대학생, 일본체제 1년 1개월째

인터뷰 담당자: 카와이 유우코

<인터뷰 12>	54
L 씨 (30 대 후반 · 남성)	
「한국 식품을 유통하는 업자로서 신오오쿠보에 대한 작은 바람」	
2011 년 8 월 6 일, 경기도 안양 출신, 회사원, 일본체재 13 년	
인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)	
<インタビュー 13>.....	57
H さん (20 代・女性) 「今はただ深く考えずに絵を描きたい」	
2011 年 8 月 8 日、釜山出身、アルバイト、日本滞在歴 6 カ月	
インタビュー担当：河合優子	
<인터뷰 13(한국어번역)>	60
H 씨 (20 대 · 여성)	
「지금은 단지 깊이 생각하지 않고 그림을 그리고 싶다」	
2011 년 8 월 8 일, 부산출신, 아르바이트, 일본체재 6 개월째	
인터뷰담당 : 카와이 유우코	
<インタビュー 14>.....	63
シンさん (20 代・男性) 「自分が今やりたいことをやりたい」	
2011 年 8 月 8 日、ソウル出身、大学生、日本滞在歴 5 カ月	
インタビュー担当：河合優子	
<인터뷰 15>	66
JI 씨 (30 대 후반 · 남성)	
「세번째로 일본에 와서 일본전도의 사명을 안고」	
2011 년 8 월 10 일, 전라남도 출신, 전도사, 일본체재 6 년째	
인터뷰 담당 : 이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)	
<インタビュー 15 (日本語訳) >.....	70
JI さん (30 代後半、男性)	
「三度目の来日で、日本伝道という夢の道へ」	
2011 年 8 月 10 日、全羅南道出身、伝道師、日本滞在 6 年目	
インタビュー担当：李 埈鉉 (インタビューは韓国語で行われた)	
<인터뷰 16>	74
H 씨 (20 대 중반 · 여성)	
「한국으로 돌아가기 위한 일본에서의 취업」	
2011 년 8 월 17 일, 경기도 수원 출신, 회사원, 일본체재 6 년	
인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)	

<인터뷰 16 (日本語訳)> 78

Hさん (20代中盤、女性) 「韓国に帰るための日本での就職」

2011年8月17日、京畿道水原出身、会社員、滞在歴6年

インタビュアー：李 恵美 (インタビューは韓国語で行われた)

<인터뷰 17> 81

CH씨 (20대 중반 · 여성)

「어느 곳보다 나에게 잘 맞는 일본 생활」

2011년 8월 22일, 서울 출신, 대학원생, 일본체재 2년 반

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

<인터뷰 18> 84

J씨 (30대 후반 · 남성)

「일본에서 시작한 사회생활, 이제는 이 사회의 일원으로...」

2011년 8월 24일, 전라도 광주 출신, 회사원, 일본체재 14년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

<인터뷰 19> 87

P씨 (40대 · 남성)

「일본의 기업정신에 반해서 일본에 오게되고, 현재는 한일 관광 교류업을 하며, 좀더 깊은 문화 교류를 기획하는 사업가로」

2010년 8월 25일, 전라남도 출신, 여행사경영, 일본체재 16년째

인터뷰 담당: 이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

<인터뷰 19 (日本語訳)> 90

Pさん (40代 · 男性)

「日本の企業精神に惚れて来日し、現在は日韓の観光交流を、より深い文化交流として企画する事業家に」

2010년 8월 25일, 全羅南道出身, 旅行社経営, 滞日 16年目

인터뷰 담당: 李 桴鉉 (인터뷰는 한국語で行われた)

<인터뷰 20> 93

YJ씨 (20대/여성) 「집주인 아저씨의 따뜻한 마음」

2010년 9월 14일, 부산출신, 대학원 박사과정, 일본체재 10년

인터뷰어: 오세연

<인터뷰 20 (日本語訳)> 98

YJさん (20代/女性) 「大家さんの優しい心」

2010년 9월 14일 부산出身, 大学院 博士課程, 日本滞在 10年

인터뷰어: 吳 世蓮

스케줄 / 스케줄 102

프로젝트멤버 / 프로젝트 멤버 103

ごあいさつ

新宿にいる韓国人の話を聞いてみませんか？

2009年に始まった『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成』プロジェクトも残すところあとわずかです。今回の記録集には全20人のニューカマー韓国人のインタビューを中心にまとめてあります。インタビューは実施順に並べ、インタビューで使用された言語が先、翻訳がそれに続くようになっています。

なお、今回の記録集で全54人のインタビューを発表したことになります。プロジェクト全体の詳細とあわせてホームページ上にも掲載されています。興味のある方はアクセスしてみてください。

新宿では東日本大震災とそれに続く福島原発事故の影響が確実に見えています。今回の記録集のインタビューの多くは、この震災以降に行われたもので、インタビューの中にもニューカマーの人たちの生活に震災がどのような影響を与えたのかが良くあらわれています。新宿のニューカマー韓国人の様々な側面が見えてくるのではないのでしょうか。

2011年 9月15日
研究代表 渡辺幸倫

このプロジェクトは、トヨタ財団 2009 年度研究助成（D09-R-0422）『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成ー顔の見える地域作りのための基礎作業ー』（2009 年 11 月～2011 年 10 月）の助成を受けています。
(<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx>)

인사말

신주쿠에 사시는 한국인의 이야기를 들어 보시지 않겠습니까?

2009 년에 시작한 “신주쿠에 새로이 이주해 오신 한국인 여러분들의 라이프히스토리 기록집 작성” 프로젝트도 거의 막바지에 이르렀습니다. 이번 기록집은 총 20 명의 뉴커머 한국인 인터뷰를 중심으로 만들었습니다. 인터뷰는 실시 순으로 엮었고, 인터뷰에서 사용된 언어를 먼저 내고 다음에 번역이 이어지도록 하였습니다.

그리고 이번 기록집으로 총 54 명의 인터뷰가 발표되었습니다. 프로젝트 전체의 상세 내용과 함께 홈페이지에도 게재하였습니다. 관심있으신 분은 둘러 주시길 바랍니다.

신주쿠에서는 동일본 대지진 재해와 잇달은 후쿠시마 원전 사고의 영향이 확연히 들어나고 있습니다. 이번 기록집 인터뷰의 대부분은 이 지진 재해 이후에 행한 것으로, 인터뷰 중에도 뉴커머 한국인의 생활에 지진이 어떤 영향을 미쳤는지 잘 나타나 있습니다. 신주쿠 뉴커머 한국인들의 다양한 측면이 보이지 않을까 생각됩니다.

2011 년 9 월 15 일
연구대표 와타나베 유키노리

이 연구는 도요타재단으로부터 연구조성프로그램의 조성금(조성번호 D09-R-0422) 『신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집 작성—얼굴이 보이는 지역사회만들기 기초작업—』을 받아 이루어지고 있습니다. (기간 : 2009 년 11 월부터 2011 년 10 월)

(<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx>)

プロジェクトの概要

多文化・多民族化する日本の地域社会で、住民同士のつながりをどのように作っていくのかが重要な課題となっています。特に新宿区では韓国人ニューカマーが大きな存在感を持っているものの、地域の人々との接点は必ずしも多くなく、「顔の見える関係」という地域作りの基盤が弱いといわれています。

本プロジェクトでは100人の韓国人ニューカマーに一人一時間程度のライフヒストリー・インタビューを行い、その内容を本人の同意のもと、定期的に印刷物・ホームページで公開し自由に共有できるようにします（インタビュー方法の詳細については、『記録集1』の武田里子「インタビュー調査について」をご参照下さい）。重要な社会の構成員としてインタビューされる人々の地域社会への所属意識向上が期待できるとともに、受け入れ社会側には「地域にいる『韓国人』も、かけがえのない人生の一時期を、同じ地域空間を共有しながら生きている」という気づきが可能となるのではないのでしょうか。

このプロジェクトの理論的背景には、人生を語り／聞くことで世界観を作っていくという物語(ナラティブ)理論やライフサイクル論などがあります。本プロジェクトは、インタビューを通して、関係する全ての人が自己を肯定しながら社会を理解できるようになることを目指しています。このような人と地域のつながりを作る手がかりを得ることが本プロジェクトの目標です。

프로젝트 개요

다문화, 다민족화가 진행되고 있는 일본 지역사회는 주민들 사이의 연결고리를 어떻게 만들어 가느냐라는 중요한 과제를 안고 있습니다. 특히 신주쿠는 한국인 이주자가 큰 존재감을 가지고 있지만 지역의 주민들과의 교류가 적어 “얼굴이 보이는 관계” 라는 지역사회를 만들기위한 기반이 취약합니다.

본 프로젝트에서는 한국인 이주자 100 명에게 한 시간 정도의 라이프 히스토리 인터뷰를 하여 본인의 동의하에 그 내용을 정기적으로 인쇄물, 홈페이지에 공개하여 자유롭게 공유할 수 있도록 하려고 합니다 (인터뷰 방법에 관한 상세한 내용은, 『기록집 1』의 타케다 사토코(武田里子) 「인터뷰 조사에 관하여」를 참조해 주십시오) .. 이로 인해 인터뷰에 응해 주신 분들이 사회의 중요한 구성원으로서 지역사회에의 소속감을 고취시키는 것과 동시에 지역사회 측에는 “지역사회에 속한 한국인 또한 인생의 소중한 한 시기를 같은 지역공간에서 함께 살아가고 있다”는 사실을 깨닫게 할 수 있지 않을까요?

이번 프로젝트는 인생에 대하여 듣고 말하는 것을 통해 세계관을 만들어 나가는 이야기(내러티브)이론을 배경으로 하고 있습니다. 그리고 인터뷰를 통해 모든 분들이 자신에 대해 긍정적인 마인드를 가짐과 동시에 사회를 이해할 수 있기를 바랍니다. 즉 사람과 지역의 연결고리를 만드는 계기가 되는 것, 그것이 본 프로젝트의 목표이기도 합니다.

<インタビュー 1>

キョウさん (20代・女性)「濃密すぎる29年」

2011年4月19日、ソウル出身、会社経営、日本在住5年

インタビュアー：渡辺幸倫

「演劇」「父親」「病院」「夜間大学」「歌舞伎」「日本語学校」「雑誌編集」「給料遅配」「起業」「オンラインビジネス」「韓流ショップ」「ウェディングドレス」「地震」。キーワードだけでもこれだけのものが上がってしまう。どれもキョウさんのこれまで29年間で語る上で欠かせない。今回はそんなキョウさんの濃密な29年間を紹介したい。

◇ 演劇との出会い ◇

キョウさんは、ソウルで3姉妹の末っ子として生まれた。

母親は勉強の良くできる末娘に期待して、いろいろな勉強をさせた。弁護士になってほしかったようだ。キョウさんもそれにこたえるように、どんどんと成績を上げていった。高校も評判の良い学区外の学校に進学した。しかし、そこで出会ってしまったのが「演劇」だった。高校の先輩の演じる舞台に感動し、すぐに演劇の魅力の虜になった。ほどなく役ももらえるようになり、練習の甲斐あって高校生の演劇コンクールでいくつも受賞。大学も自然と舞台芸術に定評のある専門大学を希望することになる。

しかし、母親からは大反対を受けた。学費も払ってもらえないということで、初めてのアルバイトを経験した。可愛がってくれた姉たちの援助もありなんとか入学したが、母に「あなたのやりたいことのために、姉さんたちが苦勞しているんだよ」と言われてハッとする。それほどまでに迷惑をかけているという自覚はなかったからだ。

それから一週間部屋にこもって悩みぬいた。最後のひと押しとなったのは大好きな父が「今までは自慢の娘だったけど、ちょっと今は言えない部分があるね」という悲しい一言。あれだけ打ち込んでいた演劇に別れを告げ、大学を中退してしまう。

◇ 韓国での仕事と日本への道 ◇

まずは仕事をしよう。『自慢の娘』に戻るために、みんながあこがれるような会社で働こうと思った。大卒以上を求めているような仕事にもひるまず履歴書を送ったところ、ほどなく面接の連絡があった。

キョウさんは緊張した面接の状況を今でもよく覚えている。まずは服装からして面食らった。自分はそれなりのつもりだったが、カジュアルな格好をしているのは自分だけ、他の人たちはみんなスーツだった。5人の集団面接も番号が一番だったため、質問もいつも最初。他の人の様子をうかがうこともできなかった。志望動機を聞かれた時も正直に「自慢の娘に戻るために、大企業に勤めようと思いました」と言い切った。それがよかったのだろうか。見事に採用される。財閥系の大病院での事務職だった。

初めは広報、その後婦人ガンの専門科の部署でと、合計4年ほど働いた。とにかく忙しい職場だったが充実した日々だった。経験を積んで自分が向上していく

のが感じられた。率直な物言いで衝突することもあったが、熱心な仕事ぶりで徐々に周りの信頼を得ていった。キョウさんのその後の仕事への取り組み方はここでの経験が大きく影響しているようだ。

忙しい仕事に慣れてきたころ、以前見た日本の演劇や歌舞伎のことを思い出した。「なぜだかわからないですけど、発音とかがすごく気になって、教えてもらいたいなって思ったんですよ」。仕事後の語学学校だけでは物足りなくなり、夜間大学に入りなおして卒業までしてしまう。しかし、それでも足りない。次は日本への留学を父に相談した。仕事もこなし、大学も卒業した今度は快諾してくれた。

3人娘の一家で、父は時々さみしそうに見えることがあった。だから、ということだけではないのだろうが、キョウさんは父と山登りや釣りなど「普通のお父さんたちが息子とすること」によく出かけた。その父が日本行き直前に倒れ、わずか二日のうちに亡くなってしまう。もちろん動揺した。しかし、予定よりも遅らせたものの、心を落ち着かせて日本へと渡った。

◇ 日本語学校から日本での就職 ◇

日本語学校とアルバイトの両立は大変ではあったが、日本語が上達していくのが楽しかった。そんなある日、学校で近くの大学の学生と合同で富士山に登る企画のお知らせがあった。日本に来たからには、「富士山に一回登ってみたい」と思っていたんですが、バイトもあるし諦めていたら、店長が『日本に来て仕事ばかりしてるから行ってきなさい』と言ってくれたんです。そこで出会った日本のスタッフの一人が現在の婚約者だったとはにかむ。

日本語学校を卒業してからの進路には迷いもあった。『学校では、すぐ就職できないよ、学生を延長するか、帰るかどっちかだ』と言われていて。『じゃあやってみる』って言ったら、会社に就職できたんですよ。韓国の一류どころでの仕事の経験があるキョウさんにとって、仕事を見つけること自体はそれほど難しいことではなかったようだ。しかし、「あんまり日本の会社に入っていない思い出がないんですよ」という。

2つの会社で働いたが、2週間の連続勤務や、給料の遅配も経験した。「最初に入ったところがたまたま駄目だと思っていたので」、二つ目の会社で「私以外皆遅刻」してきたときにはがっかりした。

「今の旦那（婚約者）さんに相談してんですけど、『もうちょっと我慢すれば』と言われてたり…。韓国系の会社だったので、自分の国の悪口を言ってるみたいになるのが嫌であまり詳しく話さなかったんです」。キョウさん個人の生き方と働いている会社だけでなく、日本の中の韓国社会、日本と韓国など、様々な要素が複雑に絡んだ悩みだった。

◇ 起業 ◇

「3つ目の所も考えたんですよ、最初はこの会社だけ酷いんだって思ってたから、2番目のところはもっと最悪だったから、他の会社に行っても一緒じゃないのって感じで」。日本にはもっといたいという気持ちもあったので、道は限られてきたという。「仕事頑張りたいのに頑張れる場所がないじゃないですか。そんなんだったら、自分で仕事しようって感じになって」。自分で事業を始めることを決

めた。

起業に当たっては、それまですべての経験を踏まえて、悩み、準備した。

「とりあえず生活を何とかしようとして、私が出来る仕事は何か考えたんですよ。お金がないからネット販売をしようと考えて、会社に通いながら色々準備をしてたんですよ。いつもそうなんですけど、だから休めないんですよ、私。今思うに、失敗することが怖くて同時にやることが多いんじゃないかと。やっぱり1回自分が勝手なことやって皆に迷惑をかけてしまったので、今度からはそういうことをやらないようにしてると思うんですね。日本へきて、心を開いて話せる人もなかなかいなかったし、韓国人と友達になっても皆帰っちゃうから凄くさびしくて…。で、同じ時間に仕事するなら、自分のやりたいことしようと思って、そこから手数料のかからないネット販売を始めたんですよ」。

韓国の家族などに借金もして始めた事業だが、早くも2か月ほどで軌道に乗った。注文から発送までのスピードときめ細かい翻訳サービスが良かったのではないかと振り返る。

しかし、若い、女性、外国人ということで軽く見られてしまう場面には当惑する。会社組織にしようかと相談に行った先でも、「あなた若いからもうちょっと経験を積みなさい」といわれて、売り上げが月に100万から300万くらいになってから来るようにと諭されたことがある。見くびられたと感じたことだろう。もちろん、この目標はすぐに達成した。この方は驚きすぐに会社組織の設立を手伝ってくれた。

売上が増加し、在庫も抱えるようになったため、事務所兼倉庫も新宿に借りた。初めは、家賃の心配もしたが、社員も一人増え、二人増え、今では4人になった。

「今店舗の準備をしてるんですね。職安通りの方でCDショップを作る予定なんです。先週から動き始めたので、それも大変だったんですよ」。という。「外国人の女の子だからやっぱり甘くみるんですよ。年よりも若く見られるので、代表者とは思われなくて。態度も良なくて、あまり認めようとしていない人もいるし。ネット企業のノウハウを教えてと言ってくる人もいるし、若いのにどうやってここまできたの？と言ってくれる人もいるし…。今は今でつらいこともあるけど、やっぱり前と比べたら自分がやりたいことをやっているから。」

悩みの種類は変わってきたが、悩み自体は尽きないようだ。

◇ 地震の影響 ◇

CDショップの場所は3月の初めにはほぼ決まっていた。そして契約は3月の15日の予定だった。ただ、11日の震災の影響で、「大家さんが台湾の方だったので、こっちに来なくて。原発や地震が怖いからこっちに来ないですよ」ということで、しばらく中断してしまう。

キョウさんの会社の社員も怖がってしまい、「1週間会社をお休みにして、様子を見よう」ということにした。その間韓国に一時帰国していたものも多かった。

1週間後に全員がそろったわけではなかったが、五月雨式にもどってきた。しかし、士気は低く「会社が落ち着くまでは働くけど怖いから帰りたい」といわれた。店舗を出すという大事な時期だ。不安定な社員の気持ちに焦りを感じた。そこで、経営者の手腕といえるだろう。社員とよく話し合うことで、「地震は怖いけど、やることはやろう」というところまで、引き出した。

しかし、これがいつまで続くのかという心配は残る。ただ、「まだうちは皆帰ってきたから良い方」だそうなのだ。周りには 20 人の社員のうち 2 人しか返ってこなかったり、比較的大きなところでは 50 人も帰ってこないというところもあるという。もちろんそれでは会社は動かない。震災の影響は甚大のようだ。

◇ これから ◇

「みんな周りの社長とかは、今、店舗出さないほうがいいんじゃないの？と思うんですけど、私はピンチは逆に機会だと思うんですね。失敗か成功かわからないけど、私はやってみると言っただけです」。仕事面ではここでひるまず前に進むことが既定の路線だ。今は生活の 80%が仕事だというが、仕事以外の面でもキョウさんの人生は重大な転機も迎えている。

地震のせいでウェディングドレスの試着が伸びてしまったが、キョウさんは 5 月に挙式を控えている。個人的には希望のあふれる時期だ。もちろん仕事は大事だ。経営の勉強もしたい。しかし、「自分の個人的な時間、山登りを旦那としたり、仕事が終わればそういうこともしたいんですよ。時間を作りたい、ということですね」と、笑顔で話してくれた。

<인터뷰 2>

CH씨 (30 대 후반 · 여성)

「외국인 전업주부로서 큰 힘이 되진 않았지만, 일본에서 행복한 가족을 이루고 살았기에, 이번에는 내가 도움을 줄 차례」

2011년 6월 1일, 경기도 출신, 전업주부, 일본체재 16년째

인터뷰 : 이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어졌다)

◇ 일본에서 3명의 자녀를 출산,육아와 교육에 분투하는 엄마의 일상 ◇

유학오는 남편을 따라 일본에 온지 16년이 된 주부의 라이프히스토리로, 부모님 도움없이 자립해야 하는 상황에서 남편의 학업이 길어지고 세자녀의 출산과 교육등으로 일본에서의 삶은 만만치가 않았다고 쓴 웃음을 지으며 서두를 시작한다.

한국에서는 주부라는 이름으로 생활해보지 않았기에, 한국 주부들의 현재 생활상이 비교대상이 되지는 않지만, 가끔씩 드라마나 친구들의 소식으로 들려지는 운동 다니고,맛난집 찾아다니고, 무언가를 배우러 다닌다는 한국주부들의 삶이 그렇게 현실적이진 않다고 한다.

현재 일본에서 한인교회라는 작은 사회안에서 그 나름의 활동을 하면서 바쁘다 보니 더욱이 외국이라는 걸 잊고 살때도 많다. 하지만, 자녀들이 학교에서 다른 문화로 인해 부딪칠때면 이곳이 외국이라는 사실을 새삼 절감하며 이질감을 느끼기도 한다.

◇ 세명의 자녀양육을 둘러싼 에피소드 ◇

세 자녀를 키우다 보니 제각각 아이들의 특성에 따라 끌어안아야 하는 고민들도 다양하다. 첫째는 딸아이라 그런지 일본유치원과 소학교를 잘 적응해줘서 별 어려움 없이 보냈다. 단 한가지, 자기는 왜 다른아이들과 이름이 다른가에 대한 의문과, 한일간의 축구경기나 운동경기가 있을때마다 같은반 아이들로부터 듣게되는 “넌 한국애잖아”라는 한마디에 힘들어 하는것이였다.

그러나 둘째 남자아이는 또 많이 달랐다. 자기주장이 강하다 보니 자기가 생각한 대로 행동하는 점은 일본사회의 규칙을 잘 지키는 순종적인 어린이와는 거리가 멀었다. 에피소드를 하나들자면, 학교에 입학하고 얼마후, 방과후 학동클럽에서 놀고올수 있도록 사인을 해줬는데, 아이는 그 시간까지는 자유롭게 놀다가 집에 귀가 하면 된다는 허락으로 생각하고, 일본친구 집에 란도세루를 멘채로 놀러가서, 다음날 선생님께서부터 주의 전화를 받았다. 만약에 한국이라면, 그 친구엄마가 직접 전화를 해서 애가 집에도 안들러고 가방을 멘채로 놀러왔는데 괜찮은지 확인했을텐데, 일본엄마는 연락장에 누구누구가 이렇게 해서 놀러왔는데 학생들 지도에 문제가 있는것 같다는 식의 연락을 적어보냈고, 그것을 읽은 선생님이 주의를 준 것에 대해서는 정말 문화적인 차이를 실감할수 밖에 없었다고 한다. 우리가 성이 다른 외국인이라 어쩔수 없이 멀게만 느껴지는 벽인지, 단지 문화적인 스타일의 차이인지는 모르겠지만, 갈등을 느껴야 하는 이질감임에는 틀림이 없었다고 덧붙였다.

이와는 반대로, 아이가 다녔던 신쥬쿠의 보육원 이야기를 하시면서,

지역특성상 한국어린이가 많다보니 보육원이 한국화되어 버렸다는 느낌을 받을 정도로 좋은 추억과 친근감을 느꼈다는 에피소드를 들려주셨다. 한국엄마들이 보육원을 보내면서 교육적인 문제로 고민하는 부분이 있는데, 이곳은 보육뿐만 아니라 유치원교육같이 일주일에 한번씩 체조선생님이 오셔서 지도하고, 일박이일 숙박시설에 가서 카레도 만들어 먹고, 입학전에 숫자도 백까지 학습시키고, 무엇보다 히라가나 카타가나를 전부 가르쳐 주셔서, 발음이 정확하지 않은 외국인 엄마로서는 너무 감사한 부분이었다. 그리고 무엇보다도 성장기록을 해줬다가 일년에 한번 생일때 정리해서 주시는데, 「이건 정말 감동 그 자체야」라고 하신다. 한국에서는 있을수 없는 일이라며, 지금도 그 기록들은 소중한 보물이라고 하신다. 원장선생님이 아침마다 아이들이랑 함께 축구도 해 주시면서 추억을 만들어주는 것 등, 다정다감한 선생님들의 모습에 물론 주변에서도 평판이 아주 좋다고 덧붙이며, 그곳은 작은 한국같은 느낌이라며 밝은 미소로 추억을 더듬으셨다.

◇ 신앙과 교육방침 ◇

일본에 오기전 작은 트러블로 인한 절박함으로 교회를 다니게 되었고, 그때 기도응답의 체험을 하고는, 일본에서는 부부가 함께 교회를 찾아서 지금껏 좋은 신앙 생활을 하고있다고 한다. 일본에서 더욱더 하나님과의 인격적인 만남이 가능했다고 한다. 삶의 기준으로서 신앙이 자리잡혀 있음을 느낄수 있었다.

자녀를 일본 공교육으로 키우면서, 아이의 가치관이 확립되어질 즈음인 중고등학교 때는 한국식교육을 해주고싶다는 생각을 했었는데, 마침 교회에서 인터내셔널 스쿨을 시작하게 되어, 첫아이를 중간에 전학시키게 된다.

무엇보다 신앙을 기준으로 세워준다는 점이 좋았는데, 막상 학교를 보내고 보니, 여지껏 보여주지 않았던 자녀의 밝은 자아상을 접하게 되면서 한국어린이로서의 개성을 잘 살려주는 학교로 전학한것에 너무나 만족하신다고 덧붙이신다. 소풍이나 찰리티같은 모든 행사를 아이들이 직접 기획하고 만들어 연습하게 해서, 리더쉽을 길러주고, 과중한 학습량에 불안하면서도 한번씩 스트레스를 마음껏 해소할수 있게 기회를 줌으로써 관리해 가는 점등 직접 경험하신 것들을 말씀하시며, 아이가 소풍갔다와서 너무 재미있었다고 또 가고 싶다고 환하게 짓는 웃음에 엄마의 마음은 행복백점이다.

물론, 큰아이의 성공적 교육사례는 나머지 두아이의 진로를 결정하는데 중요한 방향잡이가 되리라 보인다.

◇ 일본대지진 재해 이후 다시금 깨닫게 되는 일본에 대한 잠재적인 사랑 ◇

3·11, 누구나가 그러하듯 그날의 체험은 16년간 동경에서 생활하면서 한번도 느껴보지못한 두려움이었다. 가까이 교회라는 소속공동체가 있어 무엇보다도 지혜롭게 대처할수 있었다고 한다.

이번 지진을 계기로 새삼 순교라는 말을 떠올리며, 본인의 삶을 돌아봤을때 너무 부끄러울것 같아서, 부끄럽지 않은 크리스찬의 삶을 위해 좀더 열심히 일본선교를 해야 겠다고 다짐하게 되는 계기가 되었다고 한다.

즉, 지금까지는 교회의 비전에 맞추어 일본선교를 위해 나름대로 열심히 따라하는 삶이었다면, 급박한 상황이 되어 기도하면서 다시금 일본에 대한 본인의 잠재적인 사랑을 확인하는 순간이었다고 한다.

지진후에도 일본에 남아서 해야 할 일들이 있음에 감사한다고 덧붙이신다.

3월 21일부터 시작된 교회의 불란티어 활동(청년들과 남선교분들은 몸으로 봉사하는 복귀활동, 여선교분들의 따뜻한 식사봉사와 이야기 상대, 맛사지등)에도 여러모로 기도하며 돕고 있다고 한다. 한국으로부터 오는 많은 물자와 각 교회연합에서 보내오는 물적, 인적 지원을 신쥬쿠의 교회에서 매일 센다이로 운행하는 셔틀버스로 효율적으로 전하고 있다고 한다. 피난처 생활에 지친 노인분들의 어깨를 주물러 드리며, 이야기 상대가 되어주는등 어떻게 도움의 손길을 전하며 마음을 나누고 오는지에 대해 말씀해주셨다. 또한 한국으로부터 찬양사역자 분들이 오셔서 피난처를 돌면서 찬양으로 아픈 마음을 달래주며 함께 나누는 이야기를 소개해 주셨다.

기독교인으로 복음을 전하는 것이 우선되었던 이전과는 달리, 마음의 상처를 입은 그들 한사람 한사람 한테 가서 직접 필요한것이 무엇인지 물어보고, 그 필요를 먼저 채워주는 것에 열심이라고 봉사활동에 대해 말씀하신다.

일본에 살면서 지금껏 받기만 했는데, 이제는 작으나마 본인도 돌려줄수 있는게 있어서 감사하다는 세 아이의 엄마 얼굴에는 크리스찬의 사랑이 빛나 보인다.

◇ 신쥬쿠라는 동네의 매력과 미래에 대한 준비 ◇

일단 일본이 복지면에서 참 잘 되어있고, 특히 신쥬쿠라는 곳은 일단 외국인이 많아서 그런지, 어찌됐건 외국인에 대해서 많이 너그러운 것 같다고 느낀다. 본인이 대충 알고 있는 것만 해도, 비과세의 가정에 출산보조금이나, 영주권자에게 돈을 빌려주고 이자없이 갚는것이냐, 야짱 보조비와 다른구에서 신쥬쿠로 이사올때의 이사비용 보조 등이다. 본래 일본인을 위한 제도 였겠지만, 구민으로 살고 있는 외국인에게도 균등하게 혜택을 준다는 것이 쉽진 않은 일인것 같다고 덧붙인다.

CH 씨의 일본생활 적응술에 있어서 특이한 일면이 하나 있다. 보통의 외국인과는 달리, CH 씨는 특별한 일이 없어도 자주 쿠약소에 들린다고 한다. 시간이 날때마다 직접 가서, 적극적으로 새로운 여러 정보를 얻어 온다고 한다. 예를들면 어린이들을 위한 유원지 프리패스 할인권에 관한 정보를 얻게 되면, 평소때 입장료가 비싸서 쉽게 나설지 못했던 유원지에, 교회의 다른 분들과 함께 아이들을 데리고가서 신나게 놀고 온다며, 얼마나 경제적으로 도움이 되는지 모른다며 뿌듯해 하신다. 본인이 그렇게 적극적으로 쿠약소에 가게 되는데는 한 계기가 있었다. 처음 일본생활이 너무 힘들었을때, 교회에서 다른 주부들로부터 들은 이야기를 의지해서, 도움을 받고자 처음 쿠약소를 들렀을때, 본인의 어색한 일본어지만, 열심히 듣고, 상담에 적합한 다른 여러 부서의 분들을 소개해주시며, 어떻게든 도움을 주시려고 하였던 공무원 분들의 따뜻함에, 외국이라는 낯선 생활에 소극적으로 얼어있던 주부의 마음은 눈녹듯이 활짝 열린다.

아이들의 교육문제와 신앙생활에 있어서도 이곳 신쥬쿠는 떠날수 없는 제 2 의 고향이 되고있다. 다만, 비싼 야짱과 국민보험 등은 계속되는 불경기 가운데 남편 혼자수 수입으로 생활해야 하는 가정에 있어서, 금전적인 면의 불안을 느끼지 않을수 없다고 한다. 이전과는 달리, 한국에 계신 부모님도 점점 연로해 가시고, 커가는 아이들의 교육비도 점점 증가해 가고있다. 이제는 본인도 전업주부가 아닌 무언가 아르바이트라도 해서 가정경제를 도와야 할 시점이라고 고민을 내어 놓으셨다. 경제적인 문제만 해결된다면, 더할나위없이 좋은 곳이라며 작은 푸념을 내어 놓으신다.



<インタビュー 2(日本語訳)>

CHさん (30代後半・女性)

「外国人専業主婦だけど、日本社会で家族幸せに暮らせたので、今度は自分ができるボランティアを」

2011年6月1日、京畿道出身、専業主婦、日本滞在16年目

インタビュー担当：李 埈鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇ 来日して三人の子どもを出産、育児と教育に奮闘するママの日常 ◇

留学する旦那の後について来日し、16年になる主婦のライフヒストリーです。親の援助なしで、自立していかなければならない状況のもと、旦那の学業が長引く中、三人の子どもを出産して育てる日本での生活は、やさしいことではなかったと苦笑いで話を始める。

韓国では、主婦として生活した経験がないので、韓国の主婦たちの生活の状況は比較の対象にならないが、ドラマや友だちとのおしゃべりのなかででてくる、スポーツやグルメ、習いこと等で忙しくしている韓国の主婦たちの日常は、それほど現実的な話として感じるわけではないという。

現在、日本で韓人教会という小さな社会に属して、それなりの活動をしながら、忙しく動いているので、普段はここが外国であることを忘れて生きている時が多いという。しかし、子どもたちが学校生活のなかで異なる文化の狭間で衝突する時があると、「ここが外国である事実を再び切実に感じながら異質感を覚えることもある」と語った。

◇ 三人の子育てをめぐるエピソード ◇

三人の子どもを育てるとそれぞれ子どもの個性によって抱える悩みも多様である。最初の子は、女の子であるためか、日本の幼稚園と小学校によく慣れてくれて、それほど苦労なく過ごせた。ただ、自分はなぜ他の友だちとは名前が違うのかについて聞かれたり、日韓のサッカー試合や運動競技がある度に、同じクラスの子たちから聞かれる「お前、韓国人だろう」という一言で悩んだりすることがあったという。

しかし、二番目の男の子は、ずいぶんと違った。自己主張が強いせいか、自分が思った通りに行動する点は、日本社会の規則をよく守る従順な子どもの姿とは程遠い。ひとつ例をあげると、小学校に入って間もない頃、放課後に学童クラブで遊んでくるようにサインをしてあげたが、「うちの子は、その時間まで自由に遊んで帰宅すれば良いものだ」と勘違いして、日本の友だちの家にランドセルのまま遊びに行き、次の日、先生から注意の電話がきた。もしも、韓国の場合なら、その友だちのお母さんから直接、「お子さんが家に寄らずにカバンのまま遊びに来ていますが、心配しないで」という電話がくるはず。しかし、日本のお母さんは、連絡帳に「だれだれがこうやって家にも寄らず遊びに来ました。学校の先生の指導として、少し問題があるようです」と書いて、それを読んだ先生が私に電話して、「子どもに注意させてほしい」という、遠回りの伝え方に関して、「本当に文化的な差を感じざるを得ない」と話した。「私たちがなまえが違う外国人であるため、どうする事もなく遠く感じてしまう壁のせいか、ただ文化的なスタイルの違いであるかは分からないが、葛藤を感じてしまう異質感であることには間

違いがない」と付け加えた。

これとは反対に、子どもが通っていた新宿の保育園の話をしながら、地域の特性上韓国人のお子さんが多く、「韓国にある保育園に通っているような感じになってしまった」と言うほど、良い思い出と親近感を感じたエピソードも聞かせてくれた。韓国人の母親は子どもを保育園に送りながらも教育的な面で悩む部分がある。しかし、その保育園では、保育だけではなく幼稚園教育のように、週に一回体育の先生が来て指導したり、一泊二日の宿泊施設に行ってカレーを作って食べたり、入学前に数字も一から百まで学習させたり、何よりひらがな、カタカナを全部教えてくれて、発音が正確ではない外国人のママにとってはとっても感謝する部分だったという。そして、何よりも成長の記録をしておいて、年に一回の誕生日の際に整理したものをくれるが、「これは本当に感動そのものだ」という。「韓国では有り得ないことだ」といい、今もその記録は大事な宝物であるという。園長先生が毎朝、子どもたちと一緒にサッカーをしながら思い出を作ってくれることなど、心温かい先生たちの姿には周囲からの評判もとても良いと付け加えながら、そこは「小さな韓国社会みたい」だと明るい笑顔で保育園での居心地良い満足した思い出を振り返った。

◇ 信仰と教育方針 ◇

日本に来る前に小さなトラブルがあって、その切迫感から教会に通い始め、その際に祈りが叶う体験をし、日本に来てからは夫婦で一緒に教会を探し、今まで良い信仰生活ができていたという。さらに日本で神様との人格的な付き合いができたという。しっかりと信仰が生き方の基準になっていると感じさせてくれた。

子どもを日本の公教育機関に行かせながらも、子どもの価値観が確立されていく頃である中・高校は韓国式の教育をしてあげたいという考えを持っていた。その頃ちょうど教会でインターナショナル・スクールを始めたので、途中、上の子を転校させた。

何より信仰を基準として身につけてくれる点が良かったが、いざ学校に送ってみると、今まで見せてくれなかった我が子の明るい姿を目にして、韓国人の子どもらしい個性をよく活かしてくれる学校に転校したことについてとても満足しているという。遠足やチャリティなど全ての行事を子どもたちが自ら企画して、作って、練習するようにして、リーダーシップを育ててくれる。過重な学習量に不安を感じながらも、たまにはストレスを思い切り解消できる機会を与えることで管理していくこと等、直接経験したことを話してくれた。子どもが遠足から帰ってきて、「とても楽しかった。また行きたい」という我が子の満面の笑顔にママの心は幸せいっぱいである。

もちろん、上の子の教育成功事例は下の子二人の進路を決める上で、重要な方向付けになるのは間違いないだろう。

◇ 東日本大震災後、改めて自覚する日本に対する潜在的な愛 ◇

3・11、誰もがそうだろうが、その日の体験は 16 年間東京で生活しながら一度も感じたことのない怖さだった。近くに教会という共同体があって、何より賢く対処できたという。今回の地震をきっかけに、改めに殉教という言葉の思い浮かべながら、自分の人生を振り返ってみた時、「このままでは恥ずかしくて。恥

ずかしくないクリスチャンの生き方をするため、より頑張って日本で宣教をしなければ」と心を決めるきっかけになったという。つまり、今までは教会のビジョンに従って日本での宣教のために自分なりに頑張る生き方だったが、切迫した状況になって切実に祈るなか、改めて日本に対する自分の潜在的な愛を確認する事ができたという。地震の後にも日本に残って自分にできる、自分がやるべきことがあることに感謝していると付け加えた。

3月21日から始まった教会のボランティア活動（青年たちと男子宣教部の方たちは体を張った仕事、復旧活動、女子宣教の方たちによる温かい給食提供と話し相手、マッサージなど）を祈りながら手伝っているという。韓国から贈られる多くの物資と各教会連合からの物的、人的な支援を新宿の教会で毎日仙台まで運行するシャトルバスを使って効率的に配っている。避難所での生活で疲れている高齢者たちの肩をもんであげながら、話し相手になってあげる等、どのように手助けして心を分かち合ってくるかについて話してくれた。また、韓国から賛美で人の心を癒す活動をしている方たちが来て、避難所を回りながら賛美と共に傷ついた心を癒しているという話も紹介してくれた。

クリスチャンとして福音を伝えることが優先しされていた以前とは異なり、心に傷を負った彼ら一人一人に出向いて、何が必要であるか直接聞いて、まずその必要を満たしてあげることに頑張っているという奉仕活動の内容について話してくれた。

日本で生活しながら、今まではもらうばかりであったが、今度は小さいながらも「自分が返してあげることがあることに何より感謝している」という三人の子どもを持つお母さんの顔にはクリスチャンの愛が溢れていた。

◇ 新宿という街の魅力と未来についての準備 ◇

ひとまず、日本は福祉の面がちゃんと整えられており、特に新宿というところは、外国人が多いせいか、ともかく外国人に対して結構寛容であるように思える。自分が知っていることだけでも、非課税の家庭に出産の補助金や、永住者に利子なしのお金を貸してくれること、家賃の補助と他の区から新宿区へと引越してくる際の引っ越し費用の補助等がある。

本来、日本人のための制度だったはずだろうが、区民として生活している外国人にも均等に恩恵を与えるということはたやすいことではないと思うという。

CHさんの日本生活において良く適応するコツとして、特異な一面がある。普通の外国人と違って、CHさんは特別な用がなくても頻繁に区役所に寄るという。時間がある度に直接出向いて、積極的に新しい情報を得てくるという。例えば、区役所で子どもたちのための遊園地のフリーパスの割引券に関する情報を得ると、普段、入場料が高くてなかなか行けなかった遊園地に、教会の友たちと一緒に子どもたちを連れて遊びに行くという。経済的にとっても助かると誇らしく話す。

自分がそのように積極的に区役所に行くようになったのは、一つのきっかけがある。最初、日本での生活があまりにも苦しくて、教会の主婦たちから聞いた話を頼りに、何か助けてもらえる方法がないかと思い、区役所に出向いた。当時、自分の下手な日本語を一生懸命に聞いて、その相談にふさわしい他の部署の方たちを紹介してくれて、どうにか助けてくれようとした公務員の方々の心温かさに、

外国という見慣れない生活で消極的になっていた主婦の心は雪が溶けるように開かれた。

子どもたちの教育の問題と信仰生活において、ここ新宿は離れられない第二の故郷になっている。ただ、高い家賃と国民保険など、続く不景気の中、主人一人の収入に頼って生活する家庭では、金銭的な面の不安を感じざるを得ないという。

以前とは異なり、韓国にいる両親もだんだん歳をとっていき、面倒をみななければいけないし、成長していく子どもたちの教育費もだんだん増えていく。これからは自分も専業主婦ではなく、何かアルバイトでもみつけて、家庭の経済を助けなければいけない時期にあると悩みを話してくれた。経済的な問題さえ解決できれば、これ以上ないくらい良いところであると愚痴をこぼしていた。

<인터뷰 3>

NY 씨(20 대/여성) 「꿈을 향하여 앞으로 나아갈수 있게 해준 유학생활」

2011 년 7 월 2 일, 대구출신, 대학교 4 학년, 일본체재 4 년

인터뷰어: 오세연

◇ 약력 ◇

신주쿠구에 있는 대학교 4 학년인 NY 씨는 현재 법학부에 재학중이며, 대구에서 태어나서 대구에서 계속 자라다가 2008 년 3 월에 일본 도쿄에 와서 지금 4 년째 일본에서 살고 있다. 외국어 고등학교에서 일본어과에 재학 중이었던 NY 씨는 고등학교를 졸업 하자마자 일본의 대학으로 바로 입학했다고 한다.

일본의 대학으로 올려고 결정 하게 된 계기는, 국내로 대학교를 간 선배들이 스승의 날이나 종종 고등학교에 놀러 와서 국내 대학교에 관한 이야기를 들려 줬다고 한다. 하지만 전혀 국내 대학교에는 흥미를 못 느끼고 일본이나 미국으로 대학교를 간 선배들이 놀러 와서 대학교 생활이나 여러가지 면에 대해서 이야기를 해 주었을때 엄청 재밌어 보였고 유익하게 보였다고 한다.

“원래는 미국으로 더 가고 싶었는데 부모님께서 미성년자일때 미국에 혼자 보내는 것을 반대 하셨고, 일본은 한국이랑 가깝고 지리적으로도 문화적으로도 가까워서 허락 해 주셨기 때문에 일본으로 오게 되었습니다”라고 NY 씨는 말했다.

그리고 일본과 한국은 별 다르게 없다고 생각했는데 막상 일본에 오고 나니, 여러 차이점에서 당황스러웠다고 한다. “가까워서 문화등이 별로 다른점이 없을거라 생각했는데 문화적인 차이가 생각 외로 많은게 당황스러웠고 일본어도 한국어랑 비슷해서 외우기 쉬었는데 쓰면 쓸수록 한국어랑 다른 점이 많아서 어려웠어요”

구체적으로 당황스러웠던 점이, “혼자서 밥먹는게 아무렇지도 않은거랑 선배에 대해서 한국 보다는 좀 더 친근한점, 반말을 서스름없이 하거나 선생님에 대한 예의가 한국 보다는 미국이랑 좀더 가까운 느낌이 들었어요”라고 예를 들었다.

◇ 친구들과의 교류 ◇

학교 생활은 즐겁다고 한다. NY 씨의 대학교는 외국인이 많고 유학 가는 프로그램이나, 어렸을때 외국에서 살다가 온 친구들이 많아서 외국에 관해서 편견을 가지거나 안 좋게 보는 친구 보다는 유학생에 대해서 오픈 마인드를 가지고 먼저 다가온 친구들이 많아서 적응하기 편했다고 한다. 친구는 일본인 친구들이 더 많다고 한다.

“학부가 법학부인데 저희 학년에는 800 명중에서 외국인이 3, 4 명밖에 없어요. 밑에 학년을 보니 매년 느는 것 같은데 그래도 한 학년에 10 명 안이라고 들었죠. 외국인만 교류 하는 그런게 없기 때문에 일본인 친구들이 더 많은 것 같아요”또한 NY 씨는 도쿄 출신 친구들 보다 시골 출신 친구들이 더 친숙하다고 한다. “시골에서 올랄 온 친구들이 더 많고, 도쿄 친구들은 친해지기 뭔가 어렵고... 뭔가 거리를 두고 친구나 인간관계를 사귀는 것

같아요. 그거는 저 혼자만 느낀다고 생각을 했는데 시골에서 올라 온 일본 친구들한테도 물어 봤을때 자기들도 그런 느낌을 받는다 해서 외국인으로서 저만의 문제는 아니구나 라고 생각했어요.”또한 NY 씨는 일본인 친구들과 한국인 친구들의 다른 점도 이야기 해줬다.

“한국인 친구들은 바로 그날 전화해서 뭐하나, 만나자 밥먹자고 말하기가 가능한테 일본인 친구들은 2 주전, 3 주전에 이날 비었냐, 이날 약속 잡자 해서 만나지 않으면 만나기 힘들다는 점이에요.아마도 서로 간의 스케줄이 있는데 그것을 존중 하고 나서, 서로 만나는게 아닌가...싶어요. 한국인 친구들은 그 이상의 벽을 허물 수 있는 서로가 서로의 일 보다는 서로의 관계를 더 중시하는 그런 마인드가 아닐까라고 생각해요” 하지만, NY 씨도 지금은 2,3 주전에 약속을 잡는게 편해졌다고 한다.

일본인 친구들의 거의 80,90 퍼센트는 외국인, 유학생에 대해서 아니면 한국에 대해서 편견이라는게 없지만 나머지 10,20 퍼센트 친구들, 특히 남자 아이들은 “ 왜 일본에 왔냐” 라든지 같이 그룹을 짜서 발표를 해야 하는데 “한자는 읽을수 있냐”, “나한테 방해 안되게 준비 잘해라” 라고 말한 친구들도 몇명 있었다고 한다. 그럴 때 마다 웃으면서 열심히 하는 것이 해결책이 었다고 한다.

요즘은 일본인 친구들하고 한국 관련된 문화,드라마 연예인 이야기를 많이 한다고 한다. 가끔씩 일본인 친구들하고 신오오쿠보에 가서 식사도 한다고 한다. “요즘 한류 붐이 일어 나서 제 주변 친구들이 드라마를 보면서 드라마에 나오는 음식등을 직접 먹어 보고 싶다는 점이 든 것 같아요. 1 학년때는 그렇게까지 한류가 많지 않고 아줌마들이 좋아해서 소개를 하면 우리 엄마가 좋아한다 하고, 자기 자신이 좋아한다는 친구는 거의 없었는데 최근에는 한국 가고 싶다, 음식 먹고 싶다, 이 연예인이 좋다고 말하는 친구들이 많아졌어요.” 일본인 친구들하고 함께 한국여행을 갈 계획이라고 한다.

◇ 장래에 대하여 ◇

지금은 일본 대학원의 원서를 내서 준비를 하고 있으며, 현재는 대학원에 진학 하는게 가장 큰 목표라고 한다. 하지만 혹시 대학원에 진학을 못하게 되면, 일본에서 취직을 하고 싶은 마음에, 취직 활동도 병행 하고 있다. “취직 활동 중 이라고 거창하게 말은 못하지만 원서만 넣었어요. 일본 회사요.”하지만 역시 제일 하고 싶은 것은 대학원에 진학 하는 거 라고 한다.

“제가 법학부에서 전공 하고 있는게 국제법인데요, 국제법 안에서도 인권법등 여러가지가 있지만 저는 우주법이라는 것에 관심이 많아요. 그 우주법이 아직까지 구축이 잘 안되어진 상황이기 때문에 나중에 우주법을 만드는 과정에 참여하는 일을 하고 싶습니다”그러기 위해서는 장래에는 일본도 한국도 아닌 유럽에서 살 계획이라고 한다. “일본에서 생활 하다가 방금 말씀 드린 것 처럼 우주법에 관련해서 공부한 후에 그것을 바탕으로 앞으로 만들어질 우주법을 구축하는데 참여 하고 싶어요. 참여 하는 곳이 스위스 제네바에 있는 유엔에서 하는 거예요. 그래서 유럽으로 가서 본토에서 더 연구하고 공부해서 그 법을 구축하는 곳에서 일을 하고 싶어요.”

NY 씨는 원래 고 2 때까지 이과였다고 한다. 그리고 그때 당시의 장래 희망이 물리 학자였고 어릴때부터 우주에 관심이 많았다고 한다.

“저희 가정이 다 문과 계통이에요. 저 혼자 이과였지만 부모님이 좀 보수적이어서 여자이기 때문에 이과 말고 문과로 갔으면 좋겠다고 말씀하셨기 때문에 문과로 옮겼어요. 그랬는데 법학 공부를 하면서 원래 제가 관심이 있던 우주와 관련해서 제 전공이랑 매치가 되는 우주법이 있다는 것을 알게 되었고, 변호사나 검사 판사를 하면 벌써 만들어진 법을 어떻게 활용 할 것인가가 직업이지만, 저는 그 이전에 사람들이 잘 활용 할 수 있는 그런 법을 만들 수 있는 직업을 가지고 싶어요”라고 NY 씨는 우주법을 공부하고 싶은 강한 의지를 보였다. 그러나 일본에서 우주법을 전공하시는 연구자는 두 분 밖에 없다고 한다. 그 중에 한 분은 내 후년부터 대학원의 연구실을 가지시기 때문에 현재 일본에 있는 대학원은 딱 한 군데 밖에 없다고 한다. 우주법을 공부하기 위해서는 우주와 법 뿐만 아니라 정치적인 면도 공부를 해야 하기 때문에, 지금의 새로운 우주법을 만드는 것은 어렵지만, 우주법을 공부 하고 싶은 마음이 강하기 때문에 열심히 노력 중이라고 한다.

◇ 일본사회에 바라는 점 ◇

“예를 들면 정치적인 면이나, 이번 3.11 대지진 이후 도쿄 전력이나 여러 단체에서의 움직임에서 좀 더 그런 면을 많이 느낀것 같아요.”

한국이랑 많이 다른점은, 무엇 하나를 결정할때 일본은 생각을 너무 많이 하고, 천천히 정말 돌 다리를 수십번 두드리고 한발 지나가는 것 같다고 한다. 좀더 빠른 발걸음, 빠른 실천으로 옮길 수 있는 일본이 되었으면 좋겠다고 한다.

◇ 4 년동안의 유학 생활을 돌아 보며 느낀 점 ◇

3.11 대지진 이후 NY 씨의 부모님은 많은 걱정을 하시고 계신다 한다. 그렇기 때문에 NY 씨가 일본의 대학원에 입학 하는 것과 취직 하는 것에 별로 찬성을 하시지 않았다고 한다.

“취직에 관해서는 앞으로 다시 부모님과 얘기를 해야 하지만 대학원은 죽기전에 한번은 일본에서 한 분 밖에 안 계시는 그 지도 교수님 밑에서 지도 한번 받아 보는게 제 꿈이라는 것을 확실히 부모님에게 말했기 때문에 부모님께서 그 대학원에 가는 것에 반대는 없으세요.”

그리고 일본 유학 4 년동안 전체적으로 느낀점은 “그냥 한국의 국내 대학교를 갔더라면 잘 하지 못 했을 부분, 예를 들어 혼자서 집을 구하거나 비자를 받거나 하는 행동을 하면서 저의 성장 된 그런 면이 참 좋은 경험이었던 것 같고 그래요.” 하지만 아쉬운 점이 남아 있다고 한다. “1,2 학년 방학 때는 씨클 활동 때문에 거의 한국도 못가고 계속 일본에만 있었는데 일본 여러지역에 간것도 아니고 도쿄에만 있었던게 아쉽고 일본 국내 여행을 더 많이 했었더라면 좋았을텐데 라는 생각이 들어요.”

NY 씨는 모의 재판 대회에 나가는 씨클에 들어 갔었다 한다. 대회에서 사건의 전체적인 배경이나 어떤 사건인지 대해서 나오면 그것을 바탕으로 원고와 피고를 나눠서 각자의 편에서 서면을 작성해서 제출하고 각 학교마다

모여서 변론을 하고, 점수를 매겨서 1 등 2 등을 가리는 대회라고 한다. NY 씨는 씨클을 통해서 이 대회에 두번 나간 적이 있다 한다.

“한번은 일본어로 한번은 영어로 했는데 둘 다 저에게는 외국어라서 힘들었어요. 결과적으로는 그냥 그냥 만족할 정도의 성적이었어요(웃음).”

4 년간의 유학생 생활은 씨클 활동과 전공 수업에 충실했으며 전공 수업을 통해서 자기 자신이 더 공부 하고 싶은 분야를 찾게 된 NY 씨는 2011 년 3 월 11 일 대지진 이후의 일본의 상황이 좋지 않았기 때문에 다시 한번 진로에 대해서 고민을 했다고 한다. 부모님의 반대도 있었지만 역시 NY 씨는 자기 자신이 정말 하고 싶고 원하는 길을 선택 한다는 뜨거운 열정을 가지고 있었으며, 인터뷰 하는 동안 계속 느낄 수 있었다.

<インタビュー 3 (日本語訳) >

NY さん (20 代/女性)、「夢に向かって進めるように、勇気を与えてくれた留学生生活」

2011 年 7 月 2 日、大邱 (テグ) 出身、大学 4 年生、日本滞在 4 年

インタビュアー：呉 世蓮

◇ 略歴 ◇

新宿区にある大学 4 年生の NY さんは現在法学部に在学中で、大邱で生まれ、大邱に住んでいたが、2008 年 3 月に来日した。外国語高校で日本語科に在学していた NY さんは高校を卒業するとすぐ、日本の大学への入学をしたという。

日本の大学に留学を決めたきっかけは、国内の大学に行った先輩たちが師匠の日 (5 月 15 日) やよく高校に遊びに来て、国内の大学の話を聞かせてくれたと言う。しかし、全く国内の大学には興味を感じる事なく、日本やアメリカの大学に行った先輩たちの大学生活の話を聞いて、ものすごく海外の大学に行きたいと思ったという。「もともとは、アメリカの大学に行きたかったが、両親が未成年の時にアメリカに一人で過ごすことに反対したし、日本は韓国と地理的にも文化的にも近いので、許してくれたのです。そのため、日本に来るようになりました」と NY さんは語った。

そして、日本と韓国は、あまり変わらないと思ったが、いざ日本に来て、いくつかの違いで戸惑いを感じたという。「近い国なので、文化などはあまり変わらないと思ったが、文化的な違いがあまりにも多くてびっくりしました。日本語も韓国語も最初は、似ていて覚えやすかったですが、勉強をすればするほど、違いが多くて難しかったです」

具体的に驚いたことは、「一人で食事をするのが平気であり、先輩に対して韓国よりも親しみやすい点、そしてタメ口で話したり、先生に対する礼儀が韓国よりアメリカの方に近い感じがしました。」と例を挙げた。

◇ 友達との交流 ◇

学校生活は楽しいという。NY さんの大学は、外国人が多く、留学へのプログラムや、子どものころ、外国で暮らしてきた人が多いため、外国人に対する偏見をもっている友達より、留学生に対してオープンマインドをもって、先に近づいてきた友人が多かったので、学校生活に慣れるのに大きな問題はなかったという。友達は日本人の友達が多いと言う。

「学部が法学部ですが、私達の学年は 800 人の中で外国人が 3、4 名しかいないです。下の学年をみると、毎年増えるようですが、それでも一学年に 10 人内だと聞きましたよ。外国人の留学生だけ交流を行うことはないですので、日本人の友達の方が多いと思います」また、NY さんは東京出身の友達よりも田舎出身の友達の方が、より身近に感じるらしい。

「田舎出身の友達が多くて、東京の友達は、親しくなるのに、何か難しくて…向こうから距離を置いて友達や人間関係を作ろうとしているような気がします。それは私一人だけ感じていると考えていましたが、田舎から上がってきた日本の友達にも聞いてみた時、自分たちもそんな感じがすると言いましたので、外国人として、私だけの問題ではないんだなと思いました」また、NY さんは、日本人

の友達と韓国人の友達の違うところを話してくれた。

「韓国人の友達は、その日、電話して何してるの・すぐ、会おう・ご飯食べよう」と話すことが出来ますが、日本人の友達は2週間、3週間前に、この日空いてる・この日に会おうなど、予定を前もって決めないといけない点です。おそらく互いのスケジュールがあり、それを尊重してから、お互いに会うのではないか…と思います。韓国人の友達は、それ以上の壁を崩すことができるというか、お互いがお互いの仕事ではなく、お互いの関係をより重視するようなマインドではないかと思います。」しかし、NYさんも今では2,3週間前に約束を決めた方が楽になったという。

日本人の友達のほとんど80,90%は、外国人、留学生に対して、または韓国に対して偏見をもっていないが、残りの10,20%の友達、特に男の子たちは「なぜ日本にきたのか」とか、一緒にグループを組んで発表をしなければならないのに、「漢字は読めるのか」、「私に邪魔ならないように準備をやれ」と言った友人も数人いたという。そのたびに笑顔で、笑いながら、頑張るしかない。これこそ、解決策だという。

最近では日本人の友達と韓国に関連する文化、ドラマの芸能人の話をたくさんするようになったという。たまに日本人の友達と新大久保に行って食事をするという。「最近、韓流ブームが起きてから私の周囲の友人たちがドラマを見ながら、ドラマに出てくる食べ物などを直接食べてみたいということが多くなっています。1年生の時は、これまでの韓流のブームは少なく、おばさんたちが好きなので、韓国の芸能人とかを紹介すると、私の母が好きだけど、自分自身が好きだという友達は、ほとんどいなかったのです。今は、韓国に行きたい、食べ物が食べたい、この芸能人が良いと言う人が多くなりました。」今度、日本人の友達と一緒に韓国旅行に行く予定であるという。

◇ 将来について ◇

現在は、日本の大学院に願書を出して準備をしており、大学院に進学するのが最大の目標だという。しかし、もし大学院に進学できなくなれば、日本で就職をしたいという気持ちで、就職活動も並行している。「就職活動中だと自信をもって話ができないほど、大したことはやっていませんが、一応、エントリーシートは出しました。日本の会社です。」でも、やっぱり一番したいのは、大学院に進学することだという。

「私は法学部で、国際法について勉強をしています。国際法の中でも、人権法などいろいろありますが、私は宇宙法ということに興味関心があります。その宇宙法についていまだにうまく構築がなされていない状況ですので、将来、宇宙法の作り上げるプロセスに参加できる職に就きたいです。」そのためには、将来的には日本も韓国でもない、ヨーロッパに住む予定だという。「日本で生活をして、先ほど申し上げたように、宇宙法に関連して勉強をした後、これに基づき、宇宙法を築き上げ、確立することに参加したいです。参加するためには、スイスのジュネーブにある国連に入らなければなりません。そこで、ヨーロッパに行って、本土でのより多くの研究や勉強をして、その法を構築しているところで仕事をしたいです。」

NYさんはもともと、高2まで理系だったという。そして、その当時の将来の

夢が物理学者だったし、子供の頃から宇宙に関心が多かったという。「私達の家がみな文科系です。私一人だけ理系だったのです。両親がちょっと保守的で、私が女性であるので、理系ではなく文系にいつて欲しいと言われたのです。そのため、理系から文系に移ったのです。そうでしたが、法学の勉強をしながら、昔から興味があった宇宙と関連して、私の専攻とマッチとなる宇宙法があることを知るようになりました。弁護士や検事になると、すでに作られた法律をどう活用するかが仕事ですが、私はそれ以前に、人々が活用することができるような法を作ることができる職業に就きたいと思いました。」と、NYさんは、宇宙法を勉強したいという強い意志をみせた。しかし、日本で宇宙法を専攻される研究者は、二人しかいないという。その中に、一人は再来年から大学院の研究室を持つので、現在、日本の大学院は、たった一ヶ所しかないという。宇宙法を勉強するには、宇宙と法だけでなく、政治的な面も勉強をしなければならないので、今の新しい宇宙法を作ることは難しいが、宇宙法を勉強したいという気持ちが強いので、一生懸命に頑張っているという。

◇ 日本社会に望む点 ◇

「例えば、政治的な面や、今回の 3.11 大震災後、東京電力や、多くの組織での動きでは、よりそのような面をたくさん感じたと思います。」

韓国と多く違うところは、何かを決定する際に、日本ではあまりにも考え過ぎて、ゆっくりと、本当に石の橋を何十回もたたいて一步を渡るようにみえるそう。もっと、迅速な行動に移すことができる日本になってほしいという。

◇ 4 年間の留学生生活を振り返って感じた点 ◇

3.11 大震災以来、NY さんの両親は、大変心配をしているという。そのため、NY さんが、日本の大学院に入学するのと就職することにあまり賛成をしていないらしい。

「就職に関しては、これからまた両親と話をしますが、大学院は、死ぬ前に一度は日本で一人しかおられないこの指導教授のもとで一度、指導を受けてみるのが私の夢ということを正確に両親に伝えましたので、正直に今は、大学院に行くことに反対はないです。」

そして、日本留学の 4 年の間、全体的に感じた点は、「ただの韓国の国内の大学に入ったら、よく出来ないところ、例えば、一人で部屋を探したり、ビザを取りに行くことなど、このような行動をしながら、私の成長できたような面が本当に良い経験だったと思います。」だが、まだ心残りがあるという。「1,2 年生の夏休みや春休みのときは、サークル活動のために、ほとんど韓国にも帰れず、ずっと日本にいましたが、日本の各地域に行くこともなく、東京でのみ時間を過ごしたのが、残念でした。日本国内の旅行をもっとすればよかったなと後悔しています。」

NY さんは、模擬裁判大会に出るサークルに入っていたそう。大会で、事件の全体的な背景や、どんな事件かについて出てくると、それをもとに、原告と被告に分けてそれぞれの側で書面を作成して提出し、各学校ごとに集まって論争をして、点数をつけて 1 等 2 等を定める大会だという。NY さんはサークルを通してこの大会に二回ほど、出たことがあるそう。

「一回目は日本語で、二回目は英語で行いましたが、両方とも私には外国語なので大変でした。結果的にはただそれだけで満足するほどの成績でした（笑）。」

4年間の留学生活は、サークル活動や専攻の勉強などに充実出来たという。専攻の授業を通して、自分自身がもっと勉強したい分野を見付けることができたNYさんは、2011年3月11日の大震災以後の日本の状況があまりにもよくなかったので、再び進路について悩んでいたという。ご両親の反対もあったが、やはりNY氏は、自分自身が本当に願っている道を選択するという熱い情熱を持っており、インタビューをしている間にも彼女の気持ちは伝わってきた。

<インタビュー 4>

Hさん (30代・女性)「商売、山あり谷あり」

2011年7月7日、テジョン出身、店舗経営、日本在住13年

インタビュアー：渡辺幸倫

新宿には多くの韓国料理店がある。職安通り周辺から大久保通りにかけては特に集中している。3月の震災の影響で一時は人通りが少なくなったが、現在はずでに以前の賑わいを取り戻しつつあり、客層は20代の女性が非常に目立つようになっている。今回のインタビューでお話を聞いたHさんは、韓国での大学時代から商売を始めた。大きく儲けたときもあれば、思い通りに行かなかったこともある。そんな紆余曲折を経て現在は西武新宿駅近くで韓国料理店の店主として厨房も切り盛りしている。そんなHさんの「紆余曲折」の部分の話を聞いてみた。

◇ 初めての商売 ◇

Hさんはテジョンで兄4人、姉2人の末っ子として育った。高校を卒業した後一年間兄が働く香港で経理の仕事を手伝ったのが初めての外国生活だった。帰国後大学へ進学し経営学を学んだ。初めての商機は大学時代アルバイトで働いていたデザイナーショップで訪れた。

良く気がつき、おしゃべりも上手なHさんはアルバイトながら売上が非常に良かった。ある日、オーナーがアメリカに移ることになり、ビジネスを売りに出そうとしたが買い手がつかない。そこでHさんに話が回ってくる。「皆が安く買おうとするから腹が立って、それならこの子に任せて、営業利益からお金を回してもらえれば」と考えたのだろうという。このオーナーの考えは的中する。

「私のアイデアを入れたら、3か月で売り上げが3倍に上がったんです。私はそのとき訪問販売をしたんです。セレブたちに服を持って行って、ちゃんと服をコーディネートしてあげて。若かったから、何も怖くなくて…」Hさんは振り返る。仕事は順調に伸びた。ほどなくアメリカのオーナーから店を買い取り、自ら事業を大きくしていった。その間IMF金融危機を経験するが「金持ちは金持ちだから。私は金持ち相手の仕事をやってたので、それで大丈夫だったんです」という。しかし、1998年に倒産させてしまう。「私があまり大きくやりすぎたのと先だけ見て、今現在の状況を見なかったからお金の動きとかをちゃんと考えなきゃいけなかったんですけど、それをしなかった。まだ若かったし…」。自分がオーナーになってから4年後のことだった。

◇ 来日と新宿での新生活 ◇

初めての来日は1998年。お店が倒産してしまい、パニックになっていた時だった。「うちのお父さんがそれを見て凄く可哀想に思ったんですね。『お父さんが解決するから、親戚のお姉さんがいる日本に行ってください。行ってる間に全部解決するから』ということで日本にきました」。

しばらくは、ビザの関係もあって日本や香港と韓国を往復することになった。「その間に倒産の件はお父さんが全部解決しました。けど、それから恥ずかしくて韓国に帰りたくなかったんですよ。それまでは私は、自分の年に見合わない生活をしていたんですよ。お金を沢山稼いでいたので、同い年の友達とは全然違う

生活をしていたんです。それで友達に会うのも恥ずかしくて帰れない」。こんな事情での来日だったが「日本が私とあった。人の性格とか考え方とか、自然も韓国と凄くよく似てるし。でも、似てる中でも違うところがあるんですね。そういうところが私とあった」のだという。そこで、前橋の親戚の家に住み込んでアルバイトをはじめた。言葉で苦労した覚えはあまりないという。「私はおしゃべりだから、3ヵ月で言葉がペラペラになりました。しゃべれないと、自分が苦しいじゃないですか。何かしゃべりたいのに、早くしゃべらなきゃいけないし。あと勇気があったの。私が外国人なのを皆知ってるから、間違っても大丈夫だ。間違っても大丈夫だし、相手が教えてくれるから」と笑う。

「そこから、田舎が嫌なんで東京行きたいなって思って、東京に出ました。最初新宿のプリンスホテルに泊まったんです。高層階に泊まったんですけど、そこから見た夜景が凄く綺麗で、『私ここに絶対住みたい』と心に決めたという。程なく歌舞伎町にある韓国風刺身屋で働き始めることになる。新しい生活が始まるとともに、韓国での失敗からも立ち上がりはじめていた。

◇ 再挑戦のチャンス ◇

刺身屋で働きながらお金を貯めていると次の商機がやってきた。友達が住む千葉に行ったときに気がついた。その街には焼肉などの韓国料理屋は多いのだが刺身屋が無い。「友達に『ここで刺身屋やったら儲かるよね?』と聞いたら、『そうだね』って。それから何日かして友達から電話がきて『オーナーが韓国人の店なんだけど、借金が多くて店を売るんだって。でも、みんなこの店を買ってもお客さんが入らないの知ってるから買いたがらない。だから分割でもいいから売りたいと言っているの、あなたここにきて刺身屋やる?』と言ったんです」。

数百万円のお金が必要だった。自分の貯めたお金だけでは足りなかったのも、韓国の家族にも援助してもらい、内装も刺身屋らしくかえたかったが、お金がかかると言うことで色々と自作したり、韓国から食器を買って持ってきたりもした。それでもオープンする資金しか用意できなかったため、足りない分はオープン後分割で支払うことで解決した。2001年、911のテロがあった頃だった。

いけると思っていた予感は的中。近所のクラブからのお客もありオープン初日から40万円以上の売り上げ。3ヶ月で借金を全て返し、それからは面白いように売り上げが上がっていった。ほどなく2件目の店を出すことになる。浅草に安くて良い物件を見つけた。今度は焼肉屋。こちらでも気分が良い程に繁盛した。

しかし、家は新宿のまま。夕方5時から8時までのお店を2軒も切り盛りするのは体力的につらいものだった。そんな時に日本に来たばかりの頃に知り合った方と結婚することになる。2004年のことだった。

◇ 結婚としばしの主婦生活と再々挑戦 ◇

ご主人は日本国籍を取得した元韓国人。家では日本語と韓国語をちゃんぽんで話すという。「韓国語でしゃべっても、その中に日本語が入ったり」。二人で過ごせる時間を増やす目的と「私の方でも商売をするのをうんざりになってきちゃって…」という事情もあって、千葉と浅草のお店を処分して、ご主人の経営する会社を手伝いながら主婦生活を送るようになる。

しかし、2年程たった2006年。またお店を始めたくなる。今度は歌舞伎町に

韓国料理の高級店を出す。「歌舞伎町にはクラブが多いからクラブのお客さんが来るだろうと。値段も高くすることができるし、夜中までやって。営業時間が長いほど売り上げが上がるから。どうせ家賃は同じでしょう。それでやってたんだけど、それから入管が凄く厳しくなって。目の前にクラブが 20 件くらいあったけど 1 件しか残らなかった。家賃が凄く高かったし、家賃と電気代入れると固定費で 120 万越えるし…。それでダメになって」。残念ながら、この挑戦は 1 年半程で失敗に終わってしまう。「それからまた主人の会社の仕事をして。それからしばらくはまだ落ち込んで。一年経ったときかな？それが 2008 年の 1 月か 2 月で辞めたから、それから落ち込んでたけど、またやろうと思ってここを」、つまり現在のお店を開店することになる。

◇ 再々々挑戦（現在進行中） ◇

開店の際には色々と考えた。今度は高級料理ではなく、安くて質の高いものを出す方針にした。新宿は第一候補ではなかった。「あまり韓国料理屋が多いと競争になっちゃうから。もっと安く、もっと安く。それが嫌だったんです。それで、新宿ではやりたくない。新橋とかそういうところでやりたいなって思って。新橋でも韓国料理屋は何軒かあるんだけど、本格的な三段バラ専門店とかはなかったんで。新橋に探しに行って何軒かいい場所を申し込んだんですよ。でも韓国人だからか断られて。新橋は韓国人にビルを貸してあげるようなオーナーが少ない。ちょっと堅い。それで新宿も探すようになって。ただ、今のお店のある辺りは一回も歩いたことがなかったんです。プリンスホテルの前とかは繁盛してるじゃないですか。それが、考えごととしてたらフラッと歩いてたんですね。で、こういう通りあったって。よく見たら隣にも店があったり 2 階 3 階にも店があるし、人通りもそこそこあるし。いいなと思ったんですね。で、知り合いの韓国の不動産の人と話して、家賃も安くしてくれるって言うんで、さらに何日か調べて。ここに来るお客さんは、新大久保に行くお客さんとは全然違うんだと。大久保とか職安通りに行くお客さんは大体韓流ブームで、おばちゃんとかお姉ちゃんとか、そういう韓流ブームに乗っていく人が多かったんですけど、この辺は普通のサラリーマン。西武線の利用者とかが多かったんで。これなら韓国人同士の競争にはならないかなと」。ブームの恩恵も受けにくいだけに時間がかかるが、最近特に手応えを感じるようになった。そのきっかけの一つは東日本大震災だった。

◇ 震災を経て ◇

現在の店を開店してから既に 1 年半。いろいろなことがあった。しかしもっとも大きな事件は震災関連だろう。これまで経営に専念し、調理などを担当することの無かった H さんが、震災を機にオーナーシェフになった。自ら「ターニングポイントでした」と語るように、震災の対応ということだけでなく、店の運営という点からも良い意味で重要な転換点だった。ただ、そのきっかけは調理場の人間が全て韓国に帰るといいだしたことからだった。「本人たちは韓国に帰りたくなくても韓国のメディアが凄く大騒ぎしたんで。うちの従業員はまだ日本が短いので怖がって。それで言ったんです。『行きたい人は行きなさい。でも店を閉めることはできない。いきなり店を休業しますとかするとお客さんに失礼だし。今慣れてないけど私が厨房入るから。引き継ぐために、ちょっと準備して帰りな

さい』と。そしたらちゃんと準備して帰ったんですよ」。店には前年から日本に留学してきていた姪と二人だけになった。

震災直後には多くの店が休業していたためか H さんの店は客足が絶えなかった。しかし予約が入っても働き手がいない。すぐに見つけることも難しい。そんな状況を変えたのがツイッターだった。「震災のあと、『私は日本捨てないですよ、韓国に帰らないで日本で日本守るから』って呟いたんですよ。そしたら常連客が『感動しました』って言って店に来たんです。その若い OL さんたちが『手伝ってあげる』と言って、仕事終わってから手伝いに来てくれて。3 週間くらい手伝ってくれて」。常連客との思わぬつながりが確認された出来事だった。

店の営業はなんとかあったが、震災では H さん自身も考えるところがあった。「うちの親も何回も電話かかってきて、早く帰って来なさいと。今放射能とかもすごく危いし。あなたが死んだら何の意味もないから。日本のものを全部整理してきなさいと。でも整理もそんな簡単にできないので…。私は日本に来て大人になったから。22 歳のとき日本に来たんで。その前は店やってたけど学生だったし。日本に来てから大人になったんです。それに韓国に行ったらやることもないし、息苦しいから韓国には帰りたくない。『日本が震災で大変な目にあってても私は日本がいいから日本にいるよ』って、それでうちの親は納得したんですけど、主人もいるから主人を捨てていけないでしょ!」。H さんにとっては「日本にいる自分」という方があたり前のことになってきているようだ。

◇ 今後のこと ◇

まずは今の店を軌道に乗せることが重要だ。もちろん、その後のことも考えている。「この店がうまくいったら 2 号店 3 号店。新橋に行きたかったんで新橋に。こういう韓国の店があんまりないところに」店を出したいという。

既に日本が長くなってきている H さんは、友人の相談に乗ることもあるという。その時にいつも言うのが「自分の競争相手よりはもうちょっと頑張らないと。50 パーセント以上頑張る」ということだそう。特に日本人と競争する際には、「同じくらいのレベルの人がいて、一人は日本人、一人は韓国人だったらいい部署には大体日本人をいかせると思うので。同じレベルになっちゃいけないと思うのです。日本人と同じレベルになると負けるから、日本人より少しでももっと頑張って認めてもらわないといけないなっていうのがありますね」。人へのアドバイスとしてだけでなく、自分に言い聞かせているようでもあった。

最後に H さんの原動力となっている思いが良く表れていると思われる一説を紹介したい。「私は今まで何回も日本で成功もしたり、悪いこともあったんですけど考えたら肯定的な考え方をするのが一番。たとえば、今私の店が潰れたとして。でも私は日本に来るとき手ぶらで来たわけだから。今は家があるわけでしょ？お腹空いてないでしょ？洋服もあるでしょ？私日本にくるとき洋服も持ってなかったんで、これでも悪くないよ。また何かしたら、頑張ったら良くなるんだと。信念というか自分自身を信じてあげないといけない。それで、私はできるんだと思えばできる、できないんだと思えばできない。世の中が自分がしゃべる通りになる。私はそう思います。」

商売は山あり谷あり。しかしこんな H さんならきっと切り抜けていくことが出来ることだろう。

<インタビュー 5>

Cさん(40代、男性)「日本で迎えた人生の転機」

2011年 7月23日、慶尚南道出身、会社員、日本暦17年目

インタビュアー：ソン・ウォンソク

◇ 留学生として来日 ◇

Cさんは1965年の46才、妻と息子の3人家族で新宿に住んでいる。両親は他界し、5人兄弟のうち自分を除いて4人は韓国に住んでいる。日本には1994年留学生としてはじめて来た。韓国ではソウルにある国立大学で国際政治を専攻し学部と修士を終え、博士課程1年目の時に日本政府の国費留学生として来日した。でもはじめから日本留学を目指していたわけではなかった。韓国では社会主義について研究していて、ロシア留学を考えていた。ところが、1980年代末、90年代初に旧ソ連で開放改革政策が進展するにつれ社会状況が大きく変わり、自分が持っていた問題意識が無意味になってしまった。ロシア語も勉強しモスクワに行く前提でやってきた留学準備をはなからやり直すことになった。

それでアメリカ留学を考えたが、当時アメリカは経済的に厳しく奨学金をもらうのが難しかった。そんななか留学先を模索中に、日本もあることに気付いた。東京に留学中の先輩が3、4人いることを知り、奨学金などの情報を得て、1年くらい準備してみて日本や韓国の政府奨学金をもらえなかったら諦めようと準備をしたが、日本の国費留学生試験に合格し日本に来るようになった。日本に来ることになり、日本語を早く習得して論文も書いて卒業できるか心配もしたが、やってみようと思った。

家族の中に留学や海外生活の経験がある人はいない。日本留学について、特段反対もなく「行ってらっしゃい」程度の反応だった。来日後は1991年結婚した妻と一才の息子とともに、学生として勉強中心の生活を送った。

◇ 学生から会社員に ◇

ところが、2000年、在学中の大学院の博士課程をやめて会社に就職し社会生活を始めた。1983年大学入学後、徴兵で軍隊に行ってきた3年を除いて、一途に学生として研究者を目指してきたのを考えれば大きな決心であった。

妻をはじめ韓国にいる家族みんなが反対した。それまで投資した時間と情熱がもったいないというのが理由だった。だが、もし博士論文を書いて学位を取得しても、将来が保障されるわけでもなく、韓国に帰国した後も「博士失業者」として不安定な状況に陥る例をたくさん見ていて、自分がそうならない保証はないと思った。自信を持ってさらに数年を投資できるかという疑問が生じたのだ。また2000年に一人息子が小学校に入学したが、「お父さん何している?」「お父さんは学生です」といった状況になるのが嫌だった。今まで仕事をしたことがなかったので、2-3年だけ会社員をやってみて自分に合わなかったら研究者に戻ると、妻に約束して就職した。年齢もすでに35才になり、日本に来て6年もたっていたので韓国での就職は無理だと思い、日本にいる知り合いの紹介で小さい会社に就職することができた。なにより一度日本に来た以上、「勉強であれ仕事であれ、日本で自分が納得できる結果を出したかった」。

それから始まった会社員生活が11年になる。仕事をしてみて自分に合うと思

えたし、だから今もやっているだろう。現在勤めている会社は4つ目で、通信関係の従業員200人程度の日本資本の会社である。会社には在日コリアン1人を含め韓国籍の社員が4人、中国朝鮮族が3-4人いる。会社の顧客に外国人が多く、英語、韓国語、中国語のいずれを話せる社員が必要で、ネイティブの外国人が複数在籍している。現在この会社でそれなりの地位についているし経済的にも安定しているので大きな不満はない。

息子は小学校4年生まで日本の公立学校に行き、韓国語を勉強させるために5、6年生の2年間新宿にある韓国学校に行かせた。妻も日本に来て日本語学校に通って勉強したので、家庭でもほとんど日本語を使っていた。家庭で韓国語を教えたりもしたが限界があり、息子に韓国語を習得させるためには環境を変えざるを得なかった。「韓国語をとてもし上手に駆使する必要はないかもしれないが、だとして彼のアイデンティティが百パーセント日本人にはなれないし、ルーツはごまかせないので、十分コミュニケーションができる程度に韓国語を教えたかった。」息子が韓国学校に移る時に来日してから住んでいた川崎から新宿に引っ越したが、彼は韓国学校に行くことよりそれまで過ごしていた地元を離れることを嫌がった。今もその時の友達とたまに会うようだ。中高はインターナショナル・スクールに通った。彼は日本語がネイティブで韓国についてもあまり知らない。正直韓国の大学の教育をあまり信用してないので韓国の大学に行ってほしいとも思わない。能力があればもっと良い大学に行ってほしい。本人はアメリカの大学に行きたがる。お金はかかるけど応援したい。韓国は社会人になっても行く機会はあるだろう。

妻は日本に来て日本語学校に行って日本語を学び、小さな事業をやったことがある。ビジネス的には問題なかったが、体力的にまた育児など家庭生活との両立が大変でやめた。現在は専業主婦である。

◇ これからも日本で ◇

日本生活には概ね満足しているし、これからも日本で住み続けたいと思う。物価が高いのが難点ではあるが、仕方ない。現在賃貸住宅に住んでいるため高い家賃を払っている。家を買うことは子供の教育もあるのでまだ考えていない。韓国にいる家族はそろそろ帰ればという「無責任」なことを言ったりもしたが、今は言わない。

日本では韓国のような複雑な人間関係に神経を使わないので楽だ。韓国にいる友たちは結婚式・葬式などの冠婚葬祭に顔を出したり、あれこれ酒席も多く大変らしい。今は日本の生活に慣れて韓国には帰れない。友たちは韓国人より日本人が多い。留学生時代の友たちはほぼ全員帰国し、たまに会う友たちはほとんど仕事をしてから知り合った人だ。その韓国人と韓国料理が食べたい時に、平均すると各月一回程度大久保に行く。また韓国食材を求めて月2回程度、車で買い出しに行く。

大久保が韓国と関係があると認知したのは2000年頃と覚えている。当時はそれほど店が多くなかったが今はいろいろ変わってきたようだ。大久保については、東京の他のところと比較すると少し汚いけどソウルに比べるときれい。「一部は韓国のように一部は日本のような、そんな感じ」。大久保を横浜の中華街のように公式的にコリアタウンとして互いに認識してそれに合う文化を作っていく必

要があるのではと思ったりもするが、それにしてはアイデンティティがあいまいなところでもある。2002年のワールドカップで韓国人が自然に集まったように、名前は別にするとしても、日本で初めてコリアタウンを作るとしたら大久保だろう。10年前には比較的に韓国の店が多い程度の街だったのが、今は日本語を一言もしゃべらなくても生活ができる街になった。産婦人科から葬儀屋まであるくらいなので、近所の韓国人駐在員の奥さんたちは、良いこととは言えないが、最近日本語を学ぼうとしない。



<インタビュー 6>

Cさん (20代、男性) 「放射能は怖いけどチャンス逃したくなかった」

2011年7月24日、ソウル近郊出身、学生、日本在住4カ月

インタビュアー：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

Cさんはソウル近郊の出身で、高校教師の父と塾で国語（韓国語）を教えている母の3人家族。両親は大学時代の同級生で40代半ばになる。父はもともとプサンの出身だが、今は親戚も含めて皆ソウル近郊に住んでいる。日本に初めて来たのは9歳の頃だ。友だちの結婚式に出席する母に連れられて来たのだが、その時のことはよく覚えていない。結婚式があったのは千葉だったと思う。神奈川には母の友だちで日本人と結婚して住んでいる人がいて、最近大学まで会いに来てくれた。

Cさんは、中学2年生から中学3年まで第二外国語として日本語の勉強をした。おかげで来日してまだ4カ月しかたっていないが、日本語会話で困ることはほとんどない。入学した学科は英語で学べるプログラムなので学位をとるのに日本語は必要ないが、この機会にもっと日本語を完璧にしたいので、日本語の授業も受けている。

両親は二人とも仕事が忙しく、Cさんは学校から帰ると一人で家で過ごすことが多かったので、「自然に自立心がついたように思う」という。両親も過保護というよりは、Cさんのやりたいことを尊重して、見守ってくれるタイプだ。親子間には基本的な信頼感があると思う。

◇ タイに高校留学 ◇

高校はひょんなことからタイにあるインターナショナル・スクールに進学することになった。タイを旅行した母親の友人が、タイに進出している企業に勤める人の子弟が多く学んでいるインターナショナル・スクールの情報を持ってきたのだ。その学校は全寮制で、授業は英語で行なわれる。卒業後は、欧米の大学に進学する生徒が多いという。両親は英語が身に着けば将来有利になると考えたようだが、それ以上に一人っ子のCさんには寮生活を通じて社交性や対人コミュニケーションの力がつくことを期待したようだ。この留学に熱心だったのは母親だった。Cさんも国際的な視野を広げたいと思っていたので、最後は自分の意思で留学することを決めた。奨学金をもらえることになったのも、その決意を後押しすることになった。

高校は1クラス50人で、生徒のほとんどは駐在員の子弟だったが、国籍はさまざまだった。その中に日本人もいた。Cさんは3年間学生寮で暮らし、最後の半年間は友人の家にもよく泊めてもらった。このタイ留学は、Cさんにとって英語の力がついたことや異文化適応の自信がついたことなど多くの収穫があったが、今から考えると、残念なこともあった。せっかくタイに3年間も暮らしたのに、英語で授業を受け、寮で生活していたので、ほとんどタイ語ができないまま終わってしまったことだ。タイ語ができなかったので、普通のタイ人と付き合う機会はほとんどなかった。この経験があるので、日本ではもっと日本語の力をつけたいし、日本人の友人もたくさんつくりたいと思う。

実は、Cさんの第一志望は、イギリスの大学に留学することだったが叶わなかった。進路について悩んでいる時に、それならと日本留学を勧めてくれたのが日本人のクラスメイトだった。それから日本の大学についていろいろ調べて、英語で学位がとれるY大学を受験することに決めた。両親はいつものようにCさんの気持ちを尊重して、日本留学に賛成してくれた。今から思えば、日本語の勉強をしていたことや、タイで日本人の友人に出会ったことなどを考えると、日本に留学するのは自然な流れだったようにも思う。

◇ 日本留学 ◇

Y大学から合格通知が届き、来日準備をしている最中に東日本大震災が起きた。とても驚いたが、Cさんは地震についてはあまり心配していなかった。翌日起きた原子力発電所の爆発とその後の放射能の影響については、正直に言えば不安を覚えた。でも「僕には選択肢がなかったんです」という。選択肢がないというのは、Cさんは昨年（2010年）6月にタイのインターナショナル・スクールを卒業した後、いったん韓国に戻り、塾や家庭教師で英語を教えるアルバイトをしながら留学の準備を進めていた。それはCさんにとって「1年間のブランク」だった。放射能はこわいけれど、この留学チャンスを逃したくない。これ以上空白の時間を長くしたくないという思いが強かった。考えればいろいろ不安なこともあるが、タイ留学をやりきったことがCさんの自信になっていた。「タイでもいろいろあったけど大丈夫だったから」。

今Cさんは大学の寮に住んでいる。寮生は日本人と韓国人と中国人がほとんどだ。不満は寮の部屋が狭いこと。5.5畳位のスペースにベッドが入っているので、くつろげるスペースはベッドの上しかない。食事は共同のキッチンで取ることが多い。高校も留学していたので、ホームシックになることはないが、自宅の自分の部屋でのんびりしたい気分になることはある。来日して4カ月過ぎたが、寮と大学の往復であつという間に過ぎてしまった。出かけたのは渋谷の近辺だけで、東京もまだほとんど知らない。これからいろいろなところに出かけたいと思う。

2週間後には韓国へ帰る予定だ。本当はもっと早く帰るつもりだったが、友だちが軍隊に入ったので急ぐ理由がなくなった。韓国の男性は大学に入ってから休学して兵役に行く人が多い。だから一緒に入学した同期の女性たちの方が先に卒業してしまう。

◇ 日本の印象 ◇

日本で暮らしはじめて、いくつか韓国との比較で気づいたことがある。まず、韓国では移動手段は車を使うことが多いが、日本では電車やバスを使うことが多い。一つの駅に電車と地下鉄が何本も入り組んでいて、同じ駅なのにJRと地下鉄の出口が違っていたり、乗り換えも難しい。乗り換えに別料金がかかるのは不便だ。韓国では一つの駅に乗り入れているのはせいぜい2本位だし、バスに持っても地下鉄に乗っても同じ方向に行くなら料金は同じだ。日本では交通費の負担が大きい。その一方で、電車が時間通りに運行されているのはすごいと思う。それからどこへ行っても人がちゃんと並んで待つところや、電車の中で携帯を使う人がいないこと、みんながルールを守ることに驚いた。韓国ではそういうルールがあっても、守らない人の方が多い。

違和感を覚えたのは、日本では一人で食事をする人が多いことだ。韓国では食事はみんなで一緒にとるのが当たり前なので、食堂にもテーブル席しかない。ところが日本の食堂にはカウンター席のあるところが結構ある。つまり、一人でご飯を食べる客を前提にできているということだと思うが、それは「韓国ではありえない」って思う。

日本の韓流ブームについては、タイにいる時に日本人の友だちから聞いていたし、タイでも K-pop が結構人気があったのである程度は分かっているつもりだったが、実際に日本に来てみると確かにすごいと思った。自分の知らないアイドルを日本人が知っていたりする。文化についていえば、韓国と日本の壁はほとんど感じない。

◇ 将来について ◇

まだ漠然としているが、卒業後は、国際的な企業で働きたいと思っている。日本の企業でも韓国の企業でもどこの企業でもかまわないが、できれば営業分野で働いてみたい。学生の間にはいろいろな経験を積みたいので、NGO のインターンシップにも応募したところだ。両親には週に 1 回位のペースで電話をかける。タイに留学していた時は 2 週間に 1 回位だったから、今の方が頻繁に話している。一人っ子だが、韓国へ帰らなければならないとか、両親と一緒に暮らさなければ、とは考えない。両親にもそうしたこだわりはなく、C さんの意思を尊重して「やりたいことをやりなさい」と言ってくれる。秋学期からはアルバイトを始めるつもりだ。韓国人の家庭の子供の家庭教師とか、塾の仕事を見つけたいと思う。

<インタビュー 7>

P さん (19 歳、女性) 「友だち母子」

2011 年 7 月 24 日、ソウル近郊出身、学生、日本在住 4 カ月

インタビュアー：武田里子

◇ 略歴と家族 ◇

P さんは父と母、2 つ年下の弟の 4 人家族で、ソウル近郊にある新都市の出身。P さんが小学校に上がる年、韓国大手メーカーに勤務する父がアメリカに赴任することになり、家族全員で渡米した。P さんは 3 年間シカゴの公立小学校に通ったので、自然に英語が身についた。帰国後も母親に帰国子女向けの英語塾などに通わされた。母親の「英語で一番になれ」という言葉をプレッシャーに感じることもあったが、「英語が武器になる」という母親の見通しは正しかった。高校は全寮制の外国語高校に進学した。入学試験が英語だったのでそれほど難しくはなかった。その時点で留学は既定路線になっていた。

そんな P さんとは対照的に弟は留学にはまったく興味がない。理由は、大学受験の厳しさから逃れるために「逃避留学」をして、失敗した知人を身近に見ているためだ。弟は国内進学を目指している。

P さんは熱心なクリスチャンで、高校生の時には宣教のため沖縄に行ったこともある。1 週間ほどの日程で、布教活動のチラシを配ったり、韓国の伝統的な踊りの公演をしたり、観光もした。強烈な太陽ときれいな海、そして月に虹がかかった光景を今も思い出す。

◇ 友だち母子 ◇

P さんは母親と毎日 30 分近く電話で話す。反抗期には母とぶつかったが、今は何でも話せる関係で、親子というより友だちのような感覚だ。つい最近も生活が落ち着いたので「太りそうだ」というと、母から「恋愛したら？」という思いがけない言葉が返ってきた。「韓国人同士はみんな知り合いだから恋愛なんてできない」と答えると、「それじゃあ日本人とすれば？」と言われてしまった。ときどき、娘ながら母親の感覚にはついていけないことがある。

P さんの両親が出会ったのは友人の結婚式だ。「父の一目ぼれ」だったという。結婚までにデートしたのは 2 回だけ。母親は 1 回目のデートで観た映画のタイトルから内容まで今でもよく覚えている。母親の両親は早くに亡くなっていて、結婚したのは 28 歳の時だった。韓国の適齢規範からすると少し遅かったし、両親がいないことも本来なら結婚の障害になる。ところが父はまったく気にしなかった。祖母（父親の母）も母を気に入ってくれた。P さんから見ても母親は家事や片付けの手際が良くて素敵な女性だと思う。

P さんの母親は 7 人きょうだいの末っ子。4 歳の時に母が亡くなったので、きょうだいの家を転々とし、何度も転校したので、辛い思い出もある。例えば、小学校の下校時に雨が降っていると、他の子どもたちの母親は傘をもって迎えに来てくれる。でも P さんの母には傘を持ってきてくれる人がいなかったの、一人で濡れながら家に帰ったことなどだ。このため母には自分の子どもには寂しい思いをさせたくないとか、自分が母親にしてほしかったことは何でも子供たちにしてあげたいという思いが強いようだ。

◇ 日本留学 ◇

P さんの高校は国内クラスと国際クラスに分かれていて、P さんは留学を目指す国際クラスを選んだので、他のクラスメイトと同じように最初は漠然とアメリカに留学するつもりだった。実際に進学先をどうするか考え始めると、費用のことやアメリカより日本への関心が強いことに気づいて迷った。そんな時、両親から「お前は日本に行きたいんだろう」と言いだしてくれた。P さんが日本に関心を持つようになったのは、中学生の時に会った転校生が日本のアニメファンで、その影響でアニメの世界にはまったのがきっかけだった。その後 P さんの関心は、J-pop からドラマへと広がり、日本の文化や伝統にも興味を持つようになった。高校では、第二外国語として日本語を選択した。両親はそういう P さんをずっと見ていたので「日本に留学する予感があった」という。

Y 大学に合格し、日本に出発する準備をしているさなかに東日本大震災が起きた。原発事故とそれに伴う放射能汚染のニュースが連日報道されるなかで、どうすべきか迷った。Y 大学からは、通常は入学前の休学は認めていないが今年は例外的に休学を認めるという連絡もきたので、家族も親戚も P さんは留学を取りやめるといったようだった。でも、P さんは予定を変更しなかった。理由は、休学したら父親に他の大学を受験するように説得されてしまいそうに感じたからだった。それにもう一度、受験勉強をするのはいやだった。

◇ 日本について ◇

新大久保にある学生寮に着いて部屋の狭さに驚いた。6 畳ほどのところに冷蔵庫と電子レンジ、机にベッドが入っているので、身動きするスペースがほとんどなかった。保証金が戻ってくるまでの 3 カ月間は我慢するしかない。3 カ月過ぎて「引っ越ししたい」と言うと、寮の部屋を一緒に見た母親はすぐに賛成してくれた。引っ越し先は自分で不動産を一軒一軒回って探した。外国人には貸せないと言われたり、引っ越しに伴う手続を一人で進めるのは大変だったが、自分の希望をほぼ満たす物件を見つけることができて満足している。引っ越したアパートは大学に歩いて通える距離にあり、システムキッチンがついて大好きな料理やお菓子作りもできる。最初の寮に比べると快適で、部屋に帰るのが楽しくなった。

来日して驚かされたのは、何ととっても韓流ブームのすごさだった。日本の人たちに K-pop が人気があることは知っていたが、これほどとは思わなかった。最初に住んだ新大久保では、近くの 100 円ショップに行くにも人多すぎてなかなかたどり着けなかった。P さんが韓国人だと分かると話しかけてくれる人がいたり、韓国語で話しかけられて、韓国語で答えると「通じた」と喜んでもらえた。「こんなに韓国が好かれていると思うと気持ちが良い」。韓国の友人からは、「いい時に留学したね」と言われた。

その他にも日本に来ていくつか新しい発見があった。例えば、車の座席が韓国とは反対だったこと、日本のコンビニは韓国のコンビニに比べて飲み物の種類が多いことなど。P さんはストリートダンスのクラブに入っている。練習の時にメンバーが韓国ではみたこともないような大きなペットボトルを買ってきて、それをコンビニのビニールバックを外さないで飲むのにも驚かされた。韓国では見な

い光景だ。それから店員がお釣りを渡す時に、大きいお札からお客さんに見えるように丁寧に渡してくれる接客マナーも印象的だった。ゴミの分別は良いことだと思う。でも、ときどき分別に自信がないことがあり、迷った時には「燃えないゴミ」に入れてしまう。

もう1つ付け加えると、アニメの世界だけだと思っていた学ランとセーラー服を着ている生徒が実際にいたこと。初めて制服の生徒を見かけたときは、Pさんは母親と一緒に「あっほんとに着ている。リボンもつけてる」と声をあげた。学ランとセーラー服は母にとって「私たちの時代の制服」、つまり60年代のもので、それを現代の日本の中学生や高校生が実際に着ているので本当に驚いた。

◇ バイトでの挫折 ◇

Pさんは「恥ずかしいんですが…」と1週間で辞めてしまったバイトの経験も話してくれた。原因はいじめだった。その韓国焼肉店のオーナーは韓国人で27～28歳だった。新大久保で3店舗も営業しているというからかなりの人気店だ。しかしPさんは、味とかブランドとかではなく、韓流ブームで新大久保に人がたくさん集まっているから、「空いている店にお客さんが流れて埋まっていく」のだという。オーナーの態度は、日本人のバイトとPさんに対するときとは違った。バイト初日にまず100種類のメニューを覚えるように言われた。いっぺんには覚えられず、質問すると無視され、少しでももたつくと叱られた。

Pさんはいじめの原因を次のように分析した。一つは、韓国人が日本で店をもつのは大変なので、人間がラフになり、そのストレスは、日本人より同じ韓国人に向けられてしまうこと。もう一つは、Pさんが若すぎて恋愛対象にならないから良くしてやる必要がないと考えた可能性だ。新大久保は韓国系の店が多く、日本語ができなくて他では働けない韓国人にとっては仕事を見つけやすい利点がある。その一方で、韓国人であるがゆえに、より厳しい状況におかれる場合もあるというのがPさんの意見だ。

◇ 将来について ◇

Pさんの将来の夢は、国連などの国際機関で働くことだ。韓国では模擬UNの活動に参加していたので、大学でもそういったプログラムを立ち上げたいと思っている。「私の強みは語学力なので、できるだけ多くの言語を勉強したい」と言う。今学期は中国語クラスをとっているが、来学期からはフランス語も受講する。

Pさんのアドレス帳は、韓国人と日本人に分かれているが、最近、日本人の方が多くなったことに気づいた。留学中にできるだけ多くの友人を得ることと、できるだけ日本国内も旅行したい。そうしたネットワークや多様な経験が自分の将来の宝になると思うからだ。/

<インタビュー 8>

Bさん (20代・男性) 「10年後の新大久保の変化」

2011年8月1日、釜山出身、大学生、日本滞在歴4カ月

インタビュー担当：河合優子

◇ 来日するきっかけ ◇

ソウルの大学で経営学を専攻しているBさんは、卒業まであと1学期を残し、2011年4月に大学の交換留学制度を利用して都内の大学に1年間の予定で留学している。日本語を学び始めたのは高校1年生の時だ。高校のクラス担任だった先生の、「新聞配達か何かバイトして1年ぐらいお金を貯めて、2年の夏休みぐらいにヨーロッパに一人で旅に行ってみたらどうだ」という言葉に心を動かされ、新聞配達を始めた。朝3時半から1時間ほど、朝の新聞配達のバイトをしたが、ヨーロッパに旅に行けるほどお金が貯まらないことがわかり、行き先を日本に変更した。バイトの後、高校の授業が始まるまでには時間があつたため、その時間を利用して日本語の語学学校に通い始めた。そして貯めたお金で2001年、釜山からフェリーで福岡に渡り、あとはJRパスを使って東京まで約2週間の日本旅行をした。

Bさんは大学時代に多様な経験をしてきた。2004年に大学に入学し、1年後の2005年から2007年の2年間、大学を休学して軍隊での兵役に従事した。そして2007年から2008年まで大学に復学した後、再度休学し、ワーキング・ホリデイビザを利用してオーストラリアに1年間滞在した。2009年から2010年まで復学した後、さらに今回、交換留学制度を利用しての来日である。兵役の後、オーストラリアにワーキング・ホリデイに行ったのは、「軍隊ですごく外にも出られずに束縛された感覚がすごく嫌だったので、これが終わったら自分がほかのところにも行ってみよう」と思ったことが理由だそう。オーストラリアではレストランなどでバイトをしながら生活した。現地では、韓国人経営のレストランに日本人が働いていたり、日本人経営のレストランに韓国人が働いていたりということもよくあつたという。

高校生のころ学び始めた日本語は、ドラマをみたり、日本から韓国に来る留学生と友だちになったり、オーストラリアで知り合った日本人の女性と付き合ったりする機会があつたことで、日本語力を伸ばした。偶然、大学のウェブサイトで日本への交換留学生募集のお知らせを見たことがきっかけで応募した。日本語での面接試験に合格し、3月に発生した東日本大震災で両親や友人からも心配されたが、「すごく経験の機会がもったいないなと思って」、来日を決めた。

◇ 大学での生活 ◇

現在は、各国の留学生と日本人学生と一緒に生活する国際寮で生活している。一番多いのは中国からの留学生で、次が韓国から、そしてインドやロシアなどさまざまな地域からの留学生がいる。留学先の大学に経営学科はないため、多様な分野の授業を興味の向くままに履修している。大学では、テコンドーとアカペラのサークルの他、韓国のポップカルチャーに興味がある人たちが集まるサークルにも参加している。このサークルは韓国にたまたま旅行に行き、韓国語や韓国文化に興味を持つようになった男子学生がつくったものだが、メンバーはほとんど

女子学生だという。定期的に集まり、飲みに行ったり、カラオケで K-POP を歌ったりするが、大体行く場所は新大久保だ。

◇ 新大久保 ◇

2001 年に旅行で初めて日本を訪れた時にも新大久保に来たが、10 年ぶりに新大久保を定期的に訪れるようになり、その違いに驚いている。10 年前に来たときには、男性が多く、韓国語のような言葉が聞こえてきても、韓国語ではなく中国の朝鮮族や北朝鮮の朝鮮語のように聞こえ、さらに「疲れた労働者が集まってくる」というような雰囲気だったらしい。しかし現在では、男女の比率は逆転し、街には女性のほうが目立つようになっているほか、かなりきれいになった印象だという。新大久保は、「韓国の 10 年、15 年、20 年ぐらい前の雰囲気って感じ、まだそこまで発展されてない」そうだ。B さんにとっては、「あんまり興味というか、関心がない」が、それでも「韓国に興味がある日本人の友達に少なくとも、ほんの少しでも韓国はこういう雰囲気だよっていうところが見せられる場所って感じですかね」と言う。

◇ 友達関係 ◇

日本人の友人は、寮やサークル活動を通して出会うことが多い。しかし、やはり留学生同士のほうが親しくなりやすく、本当に親しい日本人の友人は今のところ一人だという。韓国では人の家の冷蔵庫を自由に開けるのはよくあることだそうだが、日本ではあまりない。B さんは、その友人について、「割と日本人なのに、そういうのを全然気にしない人なんで、だから親しくなれたんですけど、酒とか飲みながら教えてくれたんですよ。『そういうのは日本じゃだめ』とか、僕のやり方の問題点とか教えてくれて。いきなり電話して『今からご飯食べに行く？』か、そういうのはちょっと日本人の人にはないらしいんですよ」と話す。しかし、同じ寮に住む留学生同士であれば、勝手に部屋に入って「ご飯食べにこうよ」と誘い合うことはよくあることだという。

日本社会に対しては、プライバシーを大切にするというところが良い面でも悪い面でもあるという。良い面については、「自分には日本の学校で一人でご飯食べられることもいいですよ。(中略) そういうところも好きなんです」という。韓国の大学では一人で食べていると変だと思われる。兵役を終え、大学に復学したばかりなので、友人がおらず一人で食事していると、一度会ったことのある後輩から、「なんで先輩、ひとりでご飯食べているんですか」と言われて恥ずかしい思いをしたことがあるという。悪い面としては、プライバシーを尊重しすぎることで、なかなか親しくなれないことがある。「自分のことをもうちょっと見せてもいい。(中略) もっと相手の領域に入れてもらって、相手にも自分のことを見せてあげたいと思いますけど、それがなかなかできないらしくて」と B さんは話す。

友人とは歴史問題についてはあまり語ることはない。歴史問題を語ることを避けているわけではないが、個人的にそれを語り合っても「けんかにしかならないじゃないですか」という。実は、B さんの祖母は札幌で生まれた。それについて、「国籍は韓国なんですけど、でもどうやって札幌で生まれて、どうやって韓国出身のおじいさんと出会って、どうやってここ（韓国）にやってきたのか」という

ことについて、祖母は口を閉ざして語らないそう。それについて、付き合っていた日本人の彼女に、歴史は「まだ終わっていないよ」と言ったら、「そんなこと言われても、自分はわかんないし」という反応で、けんかになってしまった。このようなギャップは越えられないのか、という質問に対し、Bさんは「いや、越えられると思いますよ。でも、教えてくれないじゃないですか」という。原爆投下については詳しく教えられても、植民地で日本がどのようなことをしてきたのかについて、あまり日本の若者が教えられていないことを指摘した。

◇ 現在の生活と将来 ◇

就職先は旅行会社と考えていたが、調べてみると、韓国では旅行会社で長年勤める人が少ないことを知った。平均勤続年数は10年にも満たないという。90年代後半のアジア通貨危機の影響で、安定した雇用形態が韓国ではかなり崩れてしまったこともあり、旅行会社に就職しても、退職して別の仕事に移ったり、自分の会社をつくる人も多いという。旅行会社は厳しいとは知っても、「まだ未練とか残っていますけど……。興味もあるし、悩んでいます」という。韓国では、正社員の仕事を見つけるのは簡単ではないという。Bさんのように大学在学中に、多様な経験をする韓国の大学生は多いが、「自分の経験というよりは、最近、経済が悪すぎるし……」という。よって、休学して語学研修にいたり、資格取得に励んだりするのだそう。

<인터뷰 9>

D 씨 (40 대 중반 · 남성)

「한일간의 기술 교류로 더 강한 IT 국가로의 성장」

2011 년 8 월 1 일, 서울 출신, 회사 경영, 일본체재 14 년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

D 씨는 현재, 두 아들 그리고 부인과 함께 사이타마현에 거주 중이며, 89 년 일본에서 유학생 생활을 시작했다. 대학 졸업 후, 한국으로 잠시 귀국을 했었지만, 다시 일본으로 돌아오게 되었다. 지금은 일본에서 IT 관련 기술 개발과 한류 스타 매니지먼트 회사를 경영하고 있는 D 씨를 소개하고자 한다.

◇ IT 기술을 배우기 위한 일본 유학 ◇

D 씨는 1967 년, 3 남 1 녀의 장남으로 서울에서 태어났다. 서울의 사립대 치의예과에 합격했지만, 전공이 본인의 적성과 맞지 않아 1989 년 당시, 한국보다 발전된 일본의 IT 기술을 배우기 위해 일본으로의 유학을 결심하게 된다. 전부터 부모님이 일본으로 왕래가 많으셨고, 여동생이 고등학교 시절부터 일본 유학을 준비하고 있었기에 D 씨의 일본 유학 길은 비교적 쉽게 이루어졌다.

부모님의 지인을 통해 89 년 3 월, 소프트웨어 개발 회사의 연수생으로 처음으로 일본에서의 생활을 시작하게 되었다. 6 개월 동안의 연수생 생활을 마친 뒤, 89 년 9 월에 일본어 학교에 입학했다. 그리고 90 년 4 월, 일본어는 많이 부족했었지만 운 좋게 동경의 사립대학에 입학하게 되었다.

집안의 장남이었기 때문에 남들보다 비교적 일찍 결혼을 했다고 한다. 91 년, 대학 2 학년 때 한국에서 부모님의 소개로 지금의 부인과 만나게 되었고, 결혼을 해서 오오츠카역 부근에서 신혼 살림을 시작했다. 92 년, 대학 3 학년 때에는 지금의 큰 아들이 태어났다.

◇ 귀국, 그리고 다시 일본으로 ◇

D 씨는 대학 졸업 후, 가족과 함께 한국으로 돌아왔다. 귀국 후, 한국에서는 건설회사의 전산실에서 기술 담당직으로 5 년 가까이 일을 하게 되었다. 둘째 아이도 태어났다.

27 살 때, 한국에서 처음으로 사업을 시작했다. 일본에서 배운 IT 기술을 바탕으로 여러가지 IT 기술 관련 일들을 해오며, 선두에서 초기에 IT 기술 개발을 하는 업체들과 함께 일을 하면서 메일 서버 개발과, 유명한 소프트웨어 개발에도 참여했었다.

2002 년까지 IT 기술 개발 사업을 하면서, 한국이 너무 낙후하다고 느꼈다고 한다. 「개발을 하면서 치열한 경쟁에 대부분의 업체가 망하고, IT 기술의 개발 스피드와 변화가 빠르다 보니 굉장히 낙후하고 힘들었어요. 한국은 변화가 빠르니까 제가 선두에 서서 IT 기술을 개발하는 데 지쳐던거죠.」 한국의 낙후함에 지쳐가는 반면, 일본의 안정감은 당시 D 씨가 다시 일본으로 오게 된 이유로 작용했다.

2003 년, 부인 그리고 두 아들과 함께 다시 일본에서의 생활을 시작했다.

「첫번째 왔을 때는 기술을 배우러 일본에 왔었지만, 두번째 왔을 때는 제가 만든 인터넷 방송 기술을 가지고 일본 시장을 공략하러 온 거죠.」

D 씨는 일본에서는 인터넷 방송 기술을 바탕으로 사업을 시작했다. 하지만, 당시 일본의 인터넷 환경 기술 개발에 대한 D 씨의 예상은 빗나갔고, 그로 인해 일본에서의 사업은 생각처럼 잘 되지 않았다. 사업 실패로 인해 D 씨는 일본 회사에 취직을 하게 된다. 그 회사에서 3 년 이상 근무를 했고, 그 후에는 한국계의 연예인 메니지먼트 회사에서 기술 담당으로 4 년 가까이 일했다. 지금은 IT 기술 개발과 한류 스타 메니지먼트 관련 회사를 경영하고 있다.

◇ 일본의 IT 기술 ◇

2003 년 인터넷 방송 기술로 일본의 IT 시장을 공략하고자 일본을 다시 찾은 D 씨는, 일본의 N 사가 광케이블 저가 보급을 시작할 것이라는 예상과 기대로 사업을 시작 했지만, 결국 일본은 그 당시 광케이블의 대중화가 이루어지지 않았다. 그 결과, 사업은 힘들어졌다.

인터넷 방송 기술과 함께 한국 콘텐츠의 인터넷 방송권도 함께 일본에 가져 왔던 D 씨, 「그 당시 가져온 인터넷 방송권은 사실상 빛을 못 받았어요. 한국에서는 최소한 다운로드받으면서 볼 수 있는 환경이었는데, 일본은 그때까지도 모뎀을 사용하는 곳이 많아서 인터넷 속도가 너무 느렸었거든요.」라며 당시의 아쉬움을 표현한다.

당시, 일본이 한국보다 광케이블 설비도 먼저 시작했고, 진행 상황도 훨씬 좋았다. 하지만, 일본은 코스트 삭감과 대중화라는 과제에 실패했고, 그것은 결국 앞서 있던 일본의 IT 기술을 한국이 앞지르는 결과를 가져 왔다. 그리고 이것은 일본의 IT 기술과 방송 기술마저도 뒤처지게 하는 결과를 가져오게 되었다고 D 씨는 지적한다.

D 씨는 한 가지 예로 한국의 건설회사에서의 경험담을 이야기했다. 건축 설계 프로그래밍을 하는 캐드 소프트웨어. 일본에서 배운 캐드는 한국에서는 쓸 수가 없었다고 한다. 전세제는 미국의 오토캐드라고 하는 공통된 건축 프로그램을 사용하고 있는 반면, 일본은 자국에서 이미 일본에 맞는 설계 프로그램을 만들어 설계를 하고 있었기 때문이다. 「일본은 전세제의 흐름보다 본인들이 빠르다라고 생각했는지 몰라도, 호환을 못하는 거예요. 일본의 데이터는 전 세계에서 호환 가능한 프로그램에서는 읽을 수가 없는 거죠.」라며, 여러 경험담을 들려 주었다. 「사실상, 일본이 IT 업계에서 늦은 것도 다 그런 이유예요. 일본은, 본인들만이 가지고 있는 독자적인 기술들을 믿고 너무 침체적으로 일을 한다고 할 수 있죠.」

일본인들은 하나의 제품을 시장에 내놓기 위해 수만가지의 테스트를 한다. 하지만, 그 테스트 기간이 너무 길어서 다른 회사에서 먼저 비슷한 제품을 출시해버리는 경우가 있다. 예전에는 일본 기업과 경쟁할 수 있는 외국 기업이 적었지만, 지금은 경쟁 상대가 많기 때문이다. 그리고 일본이 예전에 비해 새로운 기술 개발에 도전하는 정신이 많이 떨어졌다. 한국과 중국은 일본의 기술을 흉내내는 것 뿐이었는데, 이제는 매일매일 새로운 기술 개발에 도전을 시도하고 있다. 「한일간의 기술적 교류가 늘어나고, 한국의 기술 개발에 대한 도전 정신과 일본의 세밀함이 적당히 어우러진다면,

한국과 일본은 세계적으로 더 강한 국가들이 되지 않을까 생각합니다.」

◇ 자녀 교육 ◇

2003 년에 같이 와서, 2004 년에 비자를 처음 받고, 아들 둘은 일반 일본인 학교에 진학을 시켰다. 어렸지만 나름대로 굉장히 피나는 노력을 해서 중고등학교에 가고, 큰 아들은 올 해 동경에 있는 국립대에 입학했다. 작은 아들은 내년엔 고등학교에 입학한다.

초등학교에 다닐 때는 일본어를 가르쳐야 했기 때문에, 집에서도 가급적 일본어를 사용하게 했다. 지금도 아이들이 한국어를 사용하는 데 어려움은 없지만, 지금은 부모 보다 일본어도 잘하고, 한국어를 잊어버리면 안된다는 생각에, 집에서의 모든 대화는 한국어로 하고 있다.

앞으로도 아이들은 한국과 일본이 아닌, 또 다른 나라로 갔으면 좋겠다. 더 많은 세계를 경험하고, 계속 새로운 문화를 접하는 생활을 해 갔으면 한다. 예전 일본 유학 시절에는, 일본 이외에 다른 나라로 유학을 가고 싶었었지만, 결혼을 너무 일찍 했기 때문에 더 이상 유학 생활을 할 수가 없었다고 한다. 그때 만약 혼자였다면, 당연히 또 다른 곳으로 유학을 갔었을 것이다. 그렇기 때문에 아이들은 그렇게 공부를 시키고 싶은 마음이다. 전문을 넓히는 것도 중요하지만, 언어를 습득한다는 것 또한 굉장히 중요한 일이다.

◇ 신오오쿠보 ◇

D 씨는 처음, 大久保의 百人町에서 사업을 시작했다. 일본인이 아닌 한국인을 상대로 사업을 하고자 했고, 그 시장이 제일 공략하기 쉽다고 생각했기 때문이었다. 그리고 그 당시, D 씨는 한인들과 유학생들이 교류할 수 있는 웹 사이트를 만들었고 그 웹 사이트는 D 씨의 유학생 시절의 경험을 살려 일본 생활의 불편한 점이라든가, 비자문제 등... 한인들의 생활 전반에 대한 어려움을 공유할 수 있는 커뮤니티 역할을 했고, 이용자 수도 상당히 많았다.

예전의 신오오쿠보에는 지금처럼 이렇게 사람이 많지 않았다. D 씨의 대학생 시절, 신오오쿠보는 한인들은 살고 있었지만, 지금처럼 타운이 형성되어 있지는 않았고, 한국 가게나 식당들도 지금처럼 많지는 않았다. 2002 년 월드컵을 계기로 한일간의 교류가 많아지면서, 한인들도 많이 모이는 장소가 되었다.

D 씨는 신오오쿠보가 일본과의 교류가 많아졌기 때문에, 사람들도 많이 모이고 활성화 되어 있지만, 앞으로 더욱 발전될 것이라고 덧붙였다. 한류가 배용준씨를 통해서 시작되어, 일본에서 K-POP 과 한국 드라마까지 큰 인기를 얻고 있다. 특히 음악은 말이 통하지 않아도 음악 그 자체로 통하는 문화이기 때문에 K-POP 의 인기는 쉽게 식지 않을 것이다. 처음, 배용준씨로 인해 한류의 레벨이 많이 높아졌지만, 지금의 K-POP 은 배용준씨 때보다 더 크게 다가오고 있다. 「제가 전문가는 아니겠지만, 5 년 이상은 이 분위기가 계속 더 발전하지 않겠나 싶어요.」 라는 의견도 들려주었다.

일본인들에게 더 가깝고 발전적인 신오오쿠보가 되기 위해서는 우선, 신오오쿠보에 거주하고 있거나 장사를 하는 한국인들의 의식이 개선되어야

한다고 생각하고 있다고 말한다. 일본인들과 동일하게, 아니면 더 질 좋은 서비스로 손님을 맞이 하고자 하는 의식을 가져야 한다는 것이다.

예전에는 외국인에 대한 차별이 심했다. 특히, 한국인에 대한 차별도 심했다. 지금은 외국인에 대한 차별도 많이 없어졌지만, 일본 사회에서 일본인들과 동일한 조건으로 대우를 받으려면, 자기 스스로 의식이 바뀌어야 한다고 생각한다. 한국인들, 신오오쿠보의 한국인들이 먼저 조금 스스로를 고급화하는 쪽으로 의식구조를 바꾼다면, 반드시 더 좋은 발전된 신오오쿠보가 되지 않을까 생각한다.

◇ 한국과 일본 ◇

일본에서의 생활 중 가장 불편한 것은 외국인으로서 이사를 한다거나, 렌트를 하는 것이다. 예전보다는 많이 좋아졌지만, 아직도 여러가지 제약이 남아있어 조금 불편함을 느낀다.

반면, 이제는 한국보다는 일본 생활에 더 익숙해졌다. 일본인들이 한국인들보다는 조금 소극적이고 차가운 면이 있지만, 일본이라는 나라는 전세계에서 가장 조용하고 차분한 나라라고 생각한다. 이제는 나리타 공항에 도착하면, 마치 고향에 온 듯한 그런 느낌이다. 그것이 다시 일본에 오게 된 이유일지도 모른다.

앞으로도 아직까지는 한국에 돌아갈 생각은 없다. 일단, 사업적으로 이루고자 했던 목표를 달성하고 싶다.

<인터뷰 10>

G 씨 (30 대 중반 · 남성)

「어머니를 따라 오게 된 일본, 이제는 이 곳이 고향같은 곳」

2011 년 8 월 1 일, 서울 출신, 회사원, 일본체재 14 년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

◇ 일본에 오게 된 계기와 전문학교 입학까지 ◇

G 씨는 1975 년 생으로 36 세이다. 서울 출신으로, 어렸을 때 아버지가 돌아가셨기 때문에 어머니와 남동생과 함께 살아오고 있었다. 고등학교 졸업 후 공부에 관심이 없었기에 바로 군대에 갔다. G 씨가 군대 시절, 어머니와 남동생은 가게를 열어 장사를 하기 위해 먼저 일본에 왔다. 군 체대 후, 1997 년 1 월, 어머니와 동생을 따라 일본에 오게 되었다.

1997 년 1 월, G 씨는 어머니의 초청 비자로 일본에 왔다. 당시에는 일본어를 전혀 하지 못하는 상황이었다. 그해 4 월부터 일본어 학교에 입학해서, 일본어 공부를 시작하기는 했지만, 일본어 학교 입학 전까지, 거의 2 개월 정도 매일 집 안에서 일본어 공부에만 전념했었다. 「공부를 굉장히 싫어하는데, 그때는 일본어 공부부터 해야 되겠구나 싶더라고요.」

사실, G 씨는 새로운 것을 접하고 도전하는 것을 싫어하는 성격이라고 한다. 그래서 모든 것이 새로운 환경에서 모든 것이 새로운 도전 이었던 일본에서의 생활은 힘든 시간들이었다.

97 년 4 월, 2 개월 가량의 일본어 공부 덕택에 중급반으로 어학교에 입학했다. 같은 중급반의 다른 친구들보다 일본어를 알아듣지 못하는 것같아 많은 고민도 있었고, 힘들었다. 그때, 먼저 일본에 온 동생과 동생의 일본인 친구들의 도움을 많이 받았다. 동생의 친구들과 같이 많은 이야기를 나누고, 점점 귀가 트이면서, 일본어 공부가 재미있게 느껴졌다. 한국어와 일본어는 문법이 비슷하기 때문에, 다른 외국어보다 응용이 자유롭고, 자신의 일본어가 빠르게 늘고 있다고 느꼈다. 어학교 입학 1 년 후, 일본어 능력시험 1 급에 합격했다. 98 년에는 Y 전문학교 관광과에 입학했다.

◇ 전문학교 졸업 후, 일본에서의 사회생활 ◇

G 씨는 전문학교 관광과를 졸업 후, 전문학교에서 배운 지식과 자격증을 살려 일본의 여행사에 취직했다. 여행사에서 2 년 이상 근무 하면서, 당시 전문학교의 1 년 선배였지만, 동갑인 부인을 만나 결혼을 하게 되었다. 하지만, 여행사의 일은 자신의 성격과 잘 맞지 않았고, 직장 안에서의 작은 트러블들로 인해 여행사를 그만두게 된다. 여행사를 그만두면서, 작은 사업을 시작해 볼까 하는 계획도 있었지만, 사업을 시작하기에는 시기가 좋지 않다는 주위의 조언으로 인해 포기하게 되었다. 결혼을 빨리 한 편이기에, 가족을 책임지기 위해 전문학교 선배의 소개로 일본인이 경영하는 작은 회사에서 1 년 가까이 일을 했다.

2003 년에는 지금도 근무하고 있는 한국계 기업에 입사했다. G 씨가 입사할 당시에는 한국의 대기업 통신회사의 자회사였지만, 기업의 글로벌 비즈니스 정책 변화에 의해서 현재는 완전한 일본의 독립법인이 되었다.

◇ 가족 ◇

아버지가 일찍 돌아가셨고, 어머니쪽의 외가 친척분들도 대부분 미국이나 캐나다에 살고 계시기 때문에 한국에서 연락을 주고 받는 친척은 거의 없는 편이다. 현재, 어머니는 일본분과 재혼을 하셨고, 동생도 결혼을 해서 일본에서 살고 있다.

G 씨는 부인 그리고 딸 둘과 함께 江東区的 亀戸에 있는 3년 전에 구입한 맨션에서 거주중이다. 부인도 전문학교 졸업 후부터 지금까지 계속 사회생활을 해오고 있으며, 지금은 일본의 N사에서 일하고 있다. 큰 아이는 이제 초등학교 4학년으로 동경한국학교에 다니고 있고, 작은 아이는 여섯살로 집 근처 보육원에 보내고 있다. 사실, 큰 아이가 3학년 초까지는 지금 살고 있는 집 근처의 초등학교에 보냈었지만, 일본에서 태어나고 자란 아이의 한국어 교육과 조금의 공부 욕심 때문에 3학년 때부터는 동경한국학교에 보내고 있다.

「처음에 큰 아이가 일본인 학교를 다니다가 동경한국학교로 옮겼을 때는 너무 고생을 한 것 같아요..」라며, 동경한국학교는 일본 학교에 비해 전반적으로 교과 과정의 진도가 빠르다고 말했다. 처음에는 영어 수업도 많고, 진도도 빠르고, 그런 부분들을 따라 가려다 보니 과외 수업도 필요하게 되고 완전히 한국 사회가 되어버린 느낌이었다. 그리고 지금 살고 있는 있는 곳과 아이가 다니는 동경한국학교가 조금 거리가 있어서, 아이가 매일 자전거와 전철로 통학하는 모습을 보면서 기특하다라는 칭찬을 아끼지 않았다.

가정 내에서는 아이들의 한국어 교육을 위해서 되도록이면, 한국어를 쓰고자 노력하고 있다. 하지만, 대화가 항상 한국어로 시작해서 일본어로 끝난다는 점을 얘기하면서, 한국어 교육을 위해 동경한국학교까지 보내는데 생각대로 잘 되지 않는다면 아쉬운 표현을 하기도 했다.

◇ 신오오쿠보 ◇

신오오쿠보에는 가족들과의 외식이나, 거래처의 접대때문에 한달에 한두번 정도 가고 있다. 거래처의 접대와 같은 경우에는, 일본 고객들이 많기 때문에 한국 문화를 한번 보여주고 싶고, 또 일본에서 가장 쉽게 갈 수 있는 곳이 신오오쿠보라고 생각한다.

예전에는 유동인구가 적었는데, 최근에는 한류의 영향 때문에 주변에 가게들도 많아져서, 식당들도 다양해지고 좋은 점도 있지만, 오히려 너무 복잡해져 버린 느낌을 받는다면, 하지만 일본인들이 스스로 신오오쿠보로 발길을 돌린다는 점은 좋다고 생각한다고 덧붙였다.

◇ 앞으로 ◇

한국으로 돌아갈 계획은 전혀 없다. 일본 생활 14년, 아직 인생에서의 반이라고는 할 수 없지만, 철이 들고 부터는 일본에서의 생활이 더 길기 때문에, 일본 생활이 한국 보다는 더 편하다고 느낀다. 한국에 가족이나 친척이 없기 때문일지도 모르겠다.

회사 일로 한국으로의 출장이 잦은 편이지만, 출장을 갈 때도 욕심을 내서 4박 5일 정도 시간을 만들어도 보통 2박 3일만 지나면 정서적으로

불안감이 느껴진다. 그저 한국은 가끔 가서 오랜만에 옛날 친구들 만나서 술 한잔 하며 놀고 오는, 그냥 놀고 즐기다 오는 곳이다.

앞으로 아이들 교육을 생각해서 한국이나 일본이 아닌, 영어권이나 중국어권의 국가로 가고 싶다. 지금은 현재 하고 있는 일을 영어권이나 중국어권으로 이끌고 가려고 추진중이다.



<インタビュー 11>

キムさん (20代・女性) 「就職する前に日本語を身につけたい」

2011年8月3日、盆唐(ブンダン)出身、大学生、日本滞在歴1年1カ月

インタビュー担当：河合優子

◇ 日本に来日するきっかけ ◇

キムさんは、ソウル近郊の大学で観光経営学を専攻している4年生である。あと1学期を残し、2010年7月、大学を休学して来日した。日本語は中学校で学び始めた。キムさんの通っていた中学では、全員が学ぶ英語のほか、第二外国語のクラスで中国語と日本語の授業を選択することができた。あまり勉強が得意ではなかったそうだが、日本語の授業では、テストで100点や95点などの高得点をあげることができ、それがうれしくて日本語が好きになった。「とりあえず私、得意なことなかったんですけど、(中略)100点取った時、(中略)これだったらたぶん自信になるかなと思った」という。

中学、高校そして大学での日本語の授業を履修したが、授業内容のレベルには不満だった。中学で初級レベルの授業を取り、高校では中級レベルの日本語を勉強したいと思っていても、高校で初めて日本語を学ぶ人がいたり、受験勉強がどうしても中心になるため、授業のレベルもあまり高くはなかった。大学に入り、専門の勉強のほか、日本語の勉強も継続した。韓国では、就職先を見つける前に大学を卒業してしまうと、就職をするのがかなり難しいため、休学して語学力など就職の際に有利になる力をつけようとする学生が多いそうだ。キムさんも、日本語力をつける目的で、最初はワーキング・ホリデイビザを使って来日した。それについて、「今すぐ卒業するのも怖いし、もっと日本語習いたいし、だから、ちょっと逃げてこっちにきたかもしれない」という。

◇ 新宿・新大久保 ◇

住居は韓国の代理店を通して探し、最初の6カ月は新大久保に住んだ。しかし、せっかく日本に来たのだからと、韓国人の多い新大久保から新宿区内の別のところに引っ越しをした。新宿区にこだわったのは、他のところよりも韓国人がバイトを見つけやすいところであること、日本語学校や大学などが集まっていること、公共交通の面で便利なこと、などが理由である。そして、新宿のイメージを聞いてみると、「最初に来たとき、本当に韓国にいるのか、日本にいるのかわからないぐらい」だったという。しかし、新大久保に住んでいた時は、嫌な経験もした。真夜中に、酔っ払った日本人の上司らしき人が、韓国人の部下らしき人と大声でけんかをし、さらに、「朝鮮人、消えろ、消えろ」と叫んでいるのを聞いたときには、非常に驚くと同時に、怒りもこみあげてきた。

◇ アルバイト ◇

最初の1カ月間は、バイトが見つからなかった。せっかく日本に来たのだからと、韓国料理屋ではなく、ファミリーレストランやコンビニエンスストアなどの求人を見て電話した。しかし、日本に来て間もないことを伝え、「謙譲語も全部使えますか」などと言われて断られてしまったという。なんとかバイトを見つけなくてはと、新宿区内の韓国料理屋に電話したところ、あっさりと雇ってく

れた。ここでは6カ月働き、その後、日本人の経営する新宿区内の焼き肉店で仕事を見つけ、そこで働きはじめた。この焼き肉店では、接客担当で、注文を受け、料理を運ぶ仕事をしている。

接客をしていて難しいのは、客の話すことばに知らない単語が出てきた時だ。客によっては別の単語を使って説明してくれる人もいるが、中にはその単語を繰り返すだけの客もいるという。そのようなときに、客の表情などから「やっぱり外国人は・・・」というような感じが見てとれ、嫌な思いをすることもある。しかし、最近はK-POPや韓国ドラマの人気もあって、男性、女性問わず韓国に興味を示す客が多く、「本当に住みやすいというか、楽ですね」という。

◇ 日本語 ◇

日本語で難しいと思っているのは、電話の会話のなかで尊敬語が使われる時である。来日して3カ月たったころ、美容室に予約の電話をした。美容室の従業員に「何をなさいますか」と言われ、意味がわからずに困ったことがある。「なさる」が「する」という意味の尊敬語であることをその時は知らなかった。それを聞き返すと、その従業員は「お客様、何をなさるご予定ですか」とさらに尊敬語で対応してきた。このような時には、尊敬語をあえて使わず、通常の単語を使っ

てはなしでもらったほうがわかりやすいという。

日本語に慣れてくると話せるようにはなるが、「文法とかこれが本当にめちゃくちゃ。(中略)留学生の中で勉強してるから、私が間違えても、ちゃんと直してくれる人もいないし。(中略)そのまま帰っても、1年間で何をしたのか疑問」だということで、日本語力をもう少し高めるために、もう1年日本滞在を延長しようとした。ワーキング・ホリデービザは1年間しか有効でないため、もう1年日本で滞在しようと思うと、翌年は学生ビザに変更しなくてはならない。日本語学校の学費は安くはないため、それを稼ぐために、来日して6カ月は日本語学校に通ったが、あとの6カ月はバイトに専念し、昼のランチ時間と夜の営業時間の両方でバイトをしてお金を貯めた。

◇ 東日本大震災 ◇

翌年の計画を立て、そのためにバイトに励んでいたころ、3月11日の東日本大震災が起こった。両親は、早く韓国に帰ってきてほしいと毎日のように電話をかけてきてきたが、帰らなかった。知り合いの韓国人で帰国した人も多く、「一人になるのかな」と思い、かなり心細い思いをした。しかし、「日本っていう国がそんなにすぐ壊れてしまうわけではないし、東京は安全だったし・・・(中略)。放射能は怖いんですけど、日本と韓国は近いから、こっちが問題だったら、韓国も問題あるじゃないですか。これで逃げるのはちょっと嫌だと思って。中途半端だし、今帰ったら、また戻ってくるのも大変だし」とキムさんは言う。帰国した人のなかにも、再度、日本に戻ってきた人がかなりいるという。

◇ 友人関係 ◇

働いているため、なかなか同年代の日本人の友だちをつくるのは難しい。現在のバイト先の焼き肉店では、韓国人と中国人のバイトはいるが日本人のバイトはいない。中国人のバイトの人たちとは店では親しいが、店の外で会うまでにはい

かないという。来日する前に、ペンパルサイトで日本人の友だちを探し、その友だちとは今でも親しいという。さらに、韓国料理屋で働いていたときの常連客で韓国に興味をもっていたお客さんとも仲良くなった。

日本と韓国での友人関係の違いについて、日本人の友人は会う日にちを前もって決めようとするが、韓国人の友人は会いたいと思えばすぐに連絡をし、だめならそれであきらめるため、誘いやすいという。さらに断るときの、「ちょっと無理っぽい」というような間接的な言い回しにも違いを感じてしまうそう。日本人の親しい友人と歴史問題について話すことがあるが、それは難しいと感じている。「なぜ昔のことで私たちが嫌な思いをしないといけないの」ということを、その友人とはよく話すという。日本語学校の先生やバイト先の店長が歴史問題に触れることがあるが、やはり日本を中心に語るため、「聞くと、やっぱり違うって言いたい」とキムさんは言う。

◇ 現在の生活と将来 ◇

現在は、学生ビザに変更したため、朝 9 時 20 分から 4 コマの授業に出て、昼すぎには学校を終え、週 4 日、夕方から深夜までバイトをする生活をしている。バイトで稼ぐお金は、1 か月 10 万以上にはなるが、その約半分を家賃として払うと、それほど残るわけではないため、お金についてはストレスを感じている。北海道にも旅行に行ってみたいが、お金のことを考えると、帰国直前までは行けないと思っている。

将来は、専攻の観光経営学を活かし、観光関係で就職したいと思っている。最初は日本で日系の航空会社に就職したいと思ったが、いろいろと調べてみたところ、外国人であること、そして日本の大学に留学しているわけではないため、応募するのも無理だと言われたそう。もし航空関係で仕事が見つからなければ、ホテル業界なども考えている。現在は日本語を学ぶのに精一杯だが、韓国に帰国したら、英語も集中的にやるつもりだ。英語は「好きじゃない。面白くない」そうだが、就職のためには「必要だからしょうがない」とのことだ。

<인터뷰 11(한국어번역)>

김 모씨 (20 대 · 여성)

「취직하기에 앞서 일본어를 익히고 싶다」

2011 년 8 월 3 일, 경기도 분당출신, 대학생, 일본체제 1 년 1 개월째

인터뷰 담당자 : 카와이 유우코

◇ 일본에 오게되는 계기 ◇

김씨는 서울근교에 있는 대학에서 관광경영학을 전공중인 4 학년생이다. 졸업까지 한학기를 남겨둔, 2010 년 7 월, 대학을 휴학하고 일본으로 왔다. 일본어는 중학교때 배우기 시작했다. 김씨가 다녔던 중학교에서는 전교생이 배우는 영어외에 제 2 외국어반에서 중국어와 일본어 수업을 선택하는 것이 가능했다. 그다지 공부를 잘 하는 편은 아니었지만, 일본어 수업에서는 시험때 100 점 혹은 95 점 등 고득점을 올릴수가 있었고, 그것이 기뻐서 일본어가 좋아졌다. 「우선 저는, 자신있는것이 없었지만, (중략) 100 점을 받았을때, (중략) 이거라면 아마도 자신감이 생길거라고 생각했다」라고 한다.

중학교, 고등학교, 그리고 대학에서 일본어 수업을 이수했지만, 수업내용의 레벨에는 불만이였다. 중학교에서는 초급레벨의 수업이였고, 고등학교에서는 중급레벨의 일본어를 공부하고 싶다고 생각하고 있었지만, 고등학교에서 처음으로 일본어를 배우는 학생들이 있거나, 수험공부가 아무래도 중심이 되었기 때문에, 수업 레벨도 별로 높지않았다. 대학에 들어가서, 전공 외에, 일본어 공부도 계속했다. 한국에서는 취직 할 곳을 찾기 전에 대학을 졸업해 버리면, 취직하는것이 상당히 어렵기 때문에, 휴학을 하고 어학력등 취직할때 유리한 능력을 기르려고 하는 학생이 많다고 한다. 김씨도 일본어능력을 키울 목적으로, 처음에는 워킹 홀리데이 비자로 일본에 왔다. 그것에 관해서는 「지금 바로 졸업하는것도 무섭고, 좀더 일본어를 배우고 싶고, 그래서, 조금 도망쳐서 이곳으로 온 것인지도 모르겠다」라고 한다.

◇ 신주쿠 · 신오오쿠보 ◇

주거지는 한국의 대리점을 통해서 찾았고, 처음 6 개월은 신오오쿠보에 살았다. 하지만, 모처럼 일본에 온것이기예, 한국인이 많은 신오오쿠보에서 신주쿠구내의 다른 장소로 이사를 했다. 신주쿠구에 연연한것은, 다른 곳 보다도 한국인이 아르바이트를 찾기 쉬운 곳이라는 것, 일본어학교와 대학 등이 모여있다는 것, 공공교통의 면에서 편리하다는것, 등이 이유이다. 그리고 신주쿠의 이미지를 물어보았더니, 「처음 왔을때는, 정말로 한국에 있는지, 일본에 있는지 모를정도」였다고 한다. 그러나, 신오오쿠보에 살고 있었을때는, 싫은 경험도 했다. 한밤중에 술에 취한 일본인 상사인 듯한 사람이, 한국인 부하인 듯한 사람과 큰소리로 싸움을 했고, 게다가, 「조선인, 꺼져라, 꺼져라」라고 부르짖고 있는 것을 들었을때는, 상당히 놀람과 동시에, 분노 또한 끌어올랐다.

◇ 아르바이트 ◇

처음 1 개월간은, 아르바이트를 찾지못했다. 모처럼 일본에 왔으므로, 한국요리점이 아닌, 패밀리 레스토랑이나 편의점 등의 구인을 보고 전화했다.

그러나, 일본에 온지 얼마되지 않았다고 얘기하면, 「겸양어도 전부 구사할수 있습니까」라고 하면서 거절당했다고 한다. 어떻게든 아르바이트를 찾아야지라고, 신주쿠구내의 한국요리점에 전화했더니, 너무 간단히 고용해 주셨다. 이곳에서 6 개월 일하고, 그 후, 일본인이 경영하는 신주쿠구내의 야끼니꾸점에서 일을 찾아, 그곳에서 일하기 시작했다. 이 야끼니꾸점에서는接客담당으로, 주문을 받아, 요리를 나르는 일을 하고 있다.

접객을 하면서 어려운 것은, 손님이 하시는 말에 모르는 단어가 나왔을 때이다. 손님에 따라서는 다른 단어를 사용해서 설명해 주시는 분도 있지만, 개중에는 그 단어를 반복할 뿐인 손님도 있다고 한다. 그럴때에, 손님의 표정등에서 「역시 외국인은 . . . 」 이라고 하는 느낌을 눈치챌수 있고, 씁쓸한 기분일때도 있다. 그러나, 최근은 K-POP 이나, 한국드라마의 인기로 인해, 남성, 여성 불구하고 한국에 흥미를 보이시는 손님이 많고, 「정말로 살기 좋다고 할까, 편하네요」라고 한다.

◇ 일본어 ◇

일본어에서 어렵다고 느끼는 것은, 전화 회화에서 존경어로 답변을 받을 때이다. 일본에서 3 개월즈음 일때, 미용실에 예약전화를 했다. 미용실 종업원이 「어떻게 하시겠어요」라고 했는데, 의미를 모른채 곤란했던 적이 있다. 「하시다」가 「하다」라는 의미의 존경어라는 것을 그 때는 몰랐다. 그것을 되물었을때, 그 종업원은 「손님, 무엇을 하실 예정이세요」라고 더욱더 존경어로 대응해 왔다. 이럴때에는, 굳이 존경어를 쓰지않고, 평상시의 단어를 사용해서 말해주는 편이 알기쉽다고 한다.

일본어에 익숙해지면 말할수있게는 되지만, 「문법이나 이런것이 정말로 엉망진창. (중략) 유학생들 속에서 공부하고 있기에, 내가 틀려도, 제대로 고쳐줄수 있는 사람도 없고. (중략) 이대로 돌아가도, 1 년간 무얼 했는지 의문」이라는 이유로, 일본어 능력을 좀더 향상시키기 위해서, 일년 더 일본체재를 연장하려고 결심했다. 워킹 홀리데이 비자는 1 년간 만 유효하기 때문에 한해 더 일본에 체재하려고 하면, 다음 해는 학생 비자로 변경하지 않으면 안된다. 일본어 학교의 학비는 싸지 않기에, 그것을 벌기 위해서, 일본에서 6 개월간은 일본어 학교에 다녔지만, 그후의 6 개월은 아르바이트에 전념하고, 점심때의 런치타임과 저녁 영업시간, 양쪽 모두 아르바이트를 해서 돈을 모았다.

◇ 동일본 대지진 재해 ◇

다음해의 계획을 세우고, 그것을 위해 아르바이트에 열심이였을 무렵, 3 월 11 일 동일본 대지진의 재해가 일어났다. 부모님들은, 빨리 한국에 돌아오길 바라시고, 매일같이 전화를 걸어오셨지만, 돌아가지 않았다. 알고 지내던 한국인 중에 귀국한 사람도 많고, 「혼자 되는 걸까」라고 생각하고, 상당히 불안하기도 했다. 그러나, 「일본이라는 나라가 그렇게 금방 무너져 내릴 리도 없고, 동경은 안전했으며 . . . (중략) . 방사능은 무섭지만, 일본과 한국은 가까워서, 이쪽이 문제라면, 한국도 문제가 있지 않습니다. 이걸로도망가는 것은 좀 싫다고 생각했고. 어중간 하게 지금 돌아간다면, 또 다시 돌아오기도 어렵고」라고 김씨는 얘기한다. 귀국한 사람 중에도, 다시

일본에 돌아온 사람이 상당히 있다고 한다.

◇ 친구관계 ◇

일을 하고 있기에, 좀처럼 동년배의 일본인 친구들을 사귀는것은 어렵다. 현재의 아르바이트 장소인 야끼니꾸점에서는, 한국인과 중국인 아르바이트는 있지만, 일본인의 아르바이트는 없다. 중국인 아르바이트생들과는 가게에서는 친하지만, 가게 밖에서도 만날정도는 아니라고 한다. 일본에 오기전에, 펜팔 사이트에서 일본인 친구를 찾았고, 그 친구하고는 지금도 친하다고 한다. 게다가, 한국요리점에서 일하고 있었을때의 단골손님으로 한국에 흥미를 가지고 있었던 손님하고도 친해졌다.

일본과 한국에서의 친구관계의 차이점에 대해서, 일본인 친구는 만날 날짜를 미리 정해두려고 하지만, 한국인 친구는 만나고 싶을때 바로 연락해서, 안되면 그걸로 포기하기때문에, 부르기 쉽다고 한다. 게다가 거절할때의 「좀 안될것 같아」하는 간접적으로 돌려표현하는 법에도 차이를 느낀다고 한다. 일본인 친한 친구와 역사문제에 대해서 이야기 할때가 있지만, 그것은 어렵다고 느끼고 있다. 「왜 옛날 일로 우리들이 싫은 생각들을 하지않으면 안되는거지」라는 것을, 그 친구와 자주 이야기 한다고 한다. 일본어학교의 선생님이나 아르바이트 장소의 점장이 역사문제를 건드릴때도 있지만, 역시 일본을 중심으로 이야기 하기때문에, 「들으면, 역시 다르다 라고 말하고 싶다」 고 김씨는 말한다.

◇ 현재의 생활과 장래 ◇

현재는, 학생비자로 변경했기에, 아침 9 시 20 분 부터 4 시간의 수업을 하고, 점심때쯤 학교를 마치며, 주 4 일, 저녁부터 심야까지 아르바이트를 하는 생활을 하고있다. 아르바이트에서 버는 돈은, 한달에 10 만엔 이상은 되지만, 그 반정도를 집값으로 내기 때문에, 그다지 남는 편이 아니라, 돈에 대해서는 스트레스를 받고 있다. 홋카이도에도 여행가고 싶지만, 금전적인 것을 생각하면, 귀국 직전까지는 갈 수 없을거라고 생각하고 있다.

장래는, 전공인 관광경영학을 살려서, 관광관계로 취직을 하고 싶다고 생각한다. 처음에는 일본에서 일본계 항공회사에 취직하고 싶다고 생각했지만, 여러가지로 조사해본 결과, 외국인이라는 것, 그리고 일본의 대학에 유학하고 있는 것도 아니기 때문에, 응모하는 것도 무리라고 했다고 한다. 만약 항공관계에서 취직할 곳을 찾지못한다면, 호텔 업계등도 생각 중이다. 현재는 일본어를 배우는 것으로도 버겁지만, 한국에 귀국하면, 영어도 집중적으로 할 생각이다. 영어는 「좋아하지 않는다. 재미없다」 라고 하지만, 취직을 위해서는 「필요하니까 어쩔수 없다」 라고 한다.

<인터뷰 12>

L 씨 (30 대 후반 · 남성)

「한국 식품을 유통하는 업자로서 신오오쿠보에 대한 작은 바람」

2011 년 8 월 6 일, 경기도 안양 출신, 회사원, 일본체재 13 년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

L 씨는 1972 년생으로 경기도 안양 출신이다. 현재, 부인과 두 자녀와 함께 동경의 江戸川区에 거주중이며, 한국 식품점과 음식점에 한국 식자재를 유통하는 회사에서 근무 중이다.

◇ 일본에 오게 된 계기와 대학교 입학까지 ◇

L 씨는 1998 년 일본에 왔으며, 현재 13 년째 일본에 거주중이다. 1998 년, 처음에는 어학연수를 목적으로 일본에 오게 되었다. 한국에서는 고등학교 졸업 후 바로 군대에 갔고, 군 제대 후에는 한국의 S 전자회사 계열사에서 품질관리를 하며 2 년 가까이 근무 했다.

26 살의 L 씨가 회사를 그만 두고 일본에 오게 된 계기는 경제적인 것이었다. 당시 한국 경제 상황의 악화로 인해 다니던 회사가 힘들어졌고, L 씨는 여러가지 고민 끝에 자신을 위한 일본 유학길을 결심하게 된다. 당시 일본에 살고 있던 친척들과 먼저 일본에서 어학연수를 하고 있던 친구들의 조언이 많은 도움이 되었다. 하지만, 집안 형편이 여유롭지 않았던 L 씨는 부모님의 도움을 받아 가며 해외에 어학연수를 가는 일은 생각할 수도 없었다고 한다.

그래서 돈을 벌면서 학교도 다닐 수 있고 생활도 가능하다는 친척들과 친구들의 조언은 L 씨가 일본으로 어학연수를 오게 된 결정적인 계기가 된다. 당시 2 남 1 녀의 장남이었던 L 씨가 일본으로 어학연수를 가겠다는 결정에는 부모님과 형제들 모두 응원해 주었다고 한다.

일본에 온 후, 처음에는 친척들의 도움을 받았다. 하지만, 바로 아르바이트를 시작해 학비와 생활비를 모두 혼자 힘으로 해결하며 지내왔다. 어학교에서 2 년간 어학공부를 마친 뒤에는, 동경 근교의 사립대학에 입학했고 4 년간 유통 마케팅을 공부하고 졸업했다.

◇ 일본에서의 사회생활 ◇

대학 졸업 후 전공을 살려, 지금도 근무하고 있는 회사에 취직했다. 현재까지 7 년간 일하고 있는 이 회사는, 한국 식료품을 한국 식품점이나 음식점에 유통하는 회사로 이 업계에서는 가장 규모가 큰 회사라고 한다. 한국계 회사이며, 한국에서 한국 식품을 수입해서 일본에 판매하고 있다. 직원은 60 명 정도로 대부분 한국인이지만, 재일교포, 일본인, 조선족들도 함께 일하고 있다. 한국 식품을 유통하는 업체이다 보니, 가장 거래가 많은 곳은 신주쿠, 그리고 신오오쿠보이다.

일본에서 사회생활을 하다 보니, 일본에 있는 한국 회사들은 일본 회사들보다 근무 조건이 열악하다는 것을 느낀다. 기본적으로 기업이 사원에게 지켜야 할 노동기준법이 무시되는 경우도 많다. L 씨가 가지고 있는 무엇보다 가장 큰 걱정은, 모든 일본 기업들이 다 하고 있는

후생연금제도조차 제대로 지켜지지 않고 있다는 점이라고 한다. 「누구나 일본에서 열심히 일하며 생활하고 있는데, 이곳에서 노후를 보낼 아무런 연금도 없이 지내는 게 가끔 불안하죠.」라며 걱정을 표현했다.

◇ 가족과 자녀교육 ◇

L 씨와는 현재 부인, 그리고 두 아들과 함께 江戸川区의 飛来에서 2010년에 구입한 맨션에서 거주중이다.

98년부터 일본에서 지내 온 L 씨가 부인을 만나게 된 것은, 대학교 시절이었다. 방학 동안 한국에 갔다가 부인을 알게 되었고, 2002년 결혼했다. 결혼 후, 바로 일본에서의 신혼 살림이 시작되었지만, 당시 외국에서의 생활이 처음이었던 부인은 굉장히 힘들어 했다고 한다. 「학생이라서 돈도 없었고, 한국에서 부모님한테 지원을 받을 형편도 아니어서 경제적으로 굉장히 힘들었어요. 그리고 집사람이 일본에 대해서 잘 아는 것도 아니었고, 일본어도 잘 하지 못했으니까요.」라며 신혼 때의 어려움을 이야기했다. 처음에는 적응하지 못했던 L 씨의 부인도 시간이 지나면서 점차 일본 생활에 익숙해졌다. 지금은 오히려 회사생활때문에 바쁜 L 씨 보다 부인 쪽이 이웃이나 아이들 친구들의 부모님같은 일본인들과의 교류는 훨씬 많은 편이라고 한다. 「특히 요즘은 한류 덕분에, 아이들 학교 친구 엄마들하고 만나서 한국 음식도 먹으러 가기도 하고, 한국 요리도 가르쳐 주기도 하며 친하게 지내고 있더라고요.」라며 흐뭇해하는 듯한 미소를 보여 주기도 했다.

L 씨는 초등학교 1학년생(7살)과 유치원에 다니고 있는 4살의 두 아들의 아버지이다. 두 아이 모두 일본에서 태어나서, 잠시 한국에 다녀온 경험 이외에는 일본을 떠나 본 경험이 없다. 아이들은 일본인 초등학교와 유치원에 다니고 있다. L 씨 부부는 두 아들이 가질 정체성이 가장 큰 고민이라고 한다. 외국에 살고 있는 자식 가진 사람들이 다 같은 고민을 하고 있을 지는 모르겠지만, 한국어보다는 일본어가 더 편하다고 느끼고 있고, 부모가 한국인으로서 가지고 있는 생각들을 아이들에게 전달할 수 없게 되는 것이 걱정이라고 한다. 지금은 아직 아이들이 어리기 때문에 잘 모르는 부분이지만, 아이들이 조금 커가면서 사춘기가 되면 본인들도 정체성 문제로 힘들어 하지 않을까 하는 걱정이다. 더군다나 아이들에게 사춘기가 오고, 계속 일본 사회 안에서 살아가다 보면, 운동 경기를 보면서 왜 한국을 응원해야 하는지, 학교 친구들과 자신이 왜 성이 다른지에 대해 심각하게 고민을 하게 된다는 이야기들을 주위에서도 많이 들었다.

그런 정체성의 문제 때문에, 집에서 가족들간의 대화는 모두 한국어로 하고 있다. 아이들도 한국어로 듣거나 말하는 데는 문제가 없지만, 아직은 한글을 읽거나 쓰지는 못한다. 한국어를 따로 교육시키고 싶지만, 지금은 조금 여유가 없기 때문에 한국어를 따로 가르치고 있지는 않다. 하지만, 부인과 함께 계획 중이라고 한다. 동경한국학교 라는 선택이 있기도 하지만, 앞으로도 한국 학교에 보낼 생각은 없다. 동경한국학교에 아이들을 보내고 있는 사람들의 이야기를 들어 보면, 좋은 점도 많지만, 개인적으로 한국 학교에 대해 안 좋은 이미지가 많기 때문이다.

일본에 살면서 불편한 점이 있다면, 정기적으로 갹신해야 하는 비자 문제다. 일본은 한국에 비해 외국인에 대해 많이 관대한 편이다. 2010년

2 월에 가족 모두 영주권을 받기는 했지만, 그렇다 하더라도 외국인은 외국인이기 때문에 비자를 5 년마다 갱신해야 한다는 것은 일본생활 중에서 가장 번거로운 일이다.

◇ 신주쿠・신오오쿠보 ◇

한국 식품을 유통하는 업체에서 일하다 보니, 가장 거래가 많은 신주쿠와 신오오쿠보에는 일주일에 2, 3 번으로, 자주 가는 편이다. 예전에 비해서 일본인들도 많아지고, 한국 음식점이나 식품점들의 경기가 많이 좋아진 편이다. 예전의 신오오쿠보는 한국인 손님이 대부분이었고, 음식 가격 자체가 비싼 편이었다. 음식 가격이 비싸서, 한정되어 있는 손님 대상으로밖에 장사를 할 수 없었다. 하지만, 요즘은 여러 손님들이 늘어나면서 음식점들 사이에서도 경쟁이 심해 졌고, 가격도 많이 저렴해진 편이라고 생각한다.

앞으로도 한국 음식점들과 한국 가게들이 많이 늘어날 것이다. 하지만 신오오쿠보 거리는 아직은 코리아 타운이라고 불리기에는 많이 부족하다고 생각한다. 요코하마 중화거리처럼 그 곳을 한국 거리라고 말 하기에는 분위기가 많이 틀린것 같다. 지금 신오오쿠보의 모습은, 단지 한류라는 유행을 따라 가기에 촉박해 하는 모습에 지나지 않은 것 같다. 모든 유행은 잘 될 때가 있으면 안 좋을 때가 있는 법이고, 지금은 가장 전성기이기 때문에 모든 게 좋아 보이지만 그 전성기가 지난 후에는, 어떤 모습으로 신오오쿠보가 다시 한번 변하게 될 지 한편으로 걱정이 된다.

<インタビュー 13>

Hさん (20代・女性) 「今はただ深く考えずに絵を描きたい」

2011年8月8日、釜山出身、アルバイト、日本滞在歴6カ月

インタビュー担当：河合優子

◇ 一度目の長期滞在と二度目の来日まで ◇

Hさんが初めて日本に長期滞在したのは、2008年の4月である。高校3年の時、卒業したら日本に留学しようと、日本の大学を受験し、都内の大学に合格した。専攻は法律だったが、これはHさん自身の希望というより、父親や高校の先生に勧められたことが理由だという。しかし、法学部に入学したものの、法律の勉強にあまり興味を持つことができず、さらに外国人であるため、法学部であっても日本での就職は簡単ではないことがわかり、将来の展望が持てずに1学期で退学した。それから、6カ月間、日本語学校に通い、合わせて1年間日本に滞在した後、帰国した。将来の進路のことで悩んでいたHさんは、釜山の高級ホテルで受付の仕事をしたり、日本食のレストランで働きながら、2年間を過ごした。日本からの観光客も多いため、日本語をよく使っていたという。日本食のレストランでは、個室に日本食のコース料理を運ぶ仕事だったが、客からHさんの働きが評価され、韓国ではチップを渡す習慣はないにもかかわらず、1か月働くと給料よりもチップの額のほうが多いぐらいになったこともあるという。

進路に悩みながら、カナダに英語を学びに行こうと考えていたが、日本でのワーキング・ホリデービザに応募した。このビザは年間に出入数が決まっており、3月の東日本大地震の前まではかなり競争倍率が高かったのだそうだ。「ちょっと日本に未練が残っていて。(中略) できるかどうかかわかんないけど、ちょっとやってみようかなと。落ちたら、まあしょうがないって、そんな感じで行こうと思ったんです」とHさんは言う。ワーキング・ホリデービザの抽選に当たったことで、2011年1月に二度目の日本での長期滞在をすることになった。

◇ 日本での生活と東日本大地震 ◇

日本での最初の住居は、韓国人のブログで、都内でのルームメイト募集の案内を見たことがきっかけで連絡をすることで見つけた。最初のバイトは、何か募集はないかと家の周りを歩きながら探していて見つけた小さな焼き肉バーである。バイト募集のビラにあった電話番号を書きとめ、そこに電話したところ、次の日からそこで夜8時から深夜2時ごろまでバイトをすることになった。客は年長の人が多く、職業もさまざまで、接客をしながら「そのおかげでちょっといろいろ勉強になった」そうだ。

現在は、新宿区内の焼き肉店でランチと夜の営業時間の両方でバイトをしている。朝、8時ごろには起きて、10時から2時まで仕事をし、少し仮眠をとった後、4時から深夜までさらに仕事をする。家に帰ると深夜の1時ぐらいになってしまうという。韓国人がバイトを探すとき、韓国人留学生向けのインターネットのサイトを利用するが、求人はやはり新宿、中でも新大久保が多いそうだ。飲食店のほうも求人を出すのに、日本の求人サイトなどを使って募集すると料金がかかるが、「ここ(韓国のサイト)はタダだから。ここに募集をあげるんですよ。それで外国人は早く仕事を探さないとだめじゃないですか。それを利用して全部外

国人になったんですよ」という。バイト先に近い新宿区内でアパートを探すと家賃が高くなることと、将来の進路が見えてきたこともあり、現在は都内の別の区に引っ越し、そこから通勤している。今の不満は、バイト先に通うための交通費が半額しか出ないことだ。

バイト先で、客が「日本が韓国に行って、鉄道とか道とかいろいろつくってあげたから、逆にありがたいことでは」と言われたことがある。Hさんは、「そういう時、私はできれば歴史の話はしたくないです」という。日本の若者には、日本が韓国を植民地化していたことも知らない人も多く、歴史について興味がある人も少ないという。独島／竹島の領土問題についても、政治家や年長者が騒いでいるだけだと思っている。「たぶん、年を取った人が全部死んじゃったら、その話はなくなるかもしれない」と未来に希望を寄せている。現在の日本におけるK-POPや韓国ドラマの人気で、韓国人のイメージが良くなっていることを感じる。バイト先でも韓国のアイドルグループ「KARA」や「少女時代」の話で親しくなり、話をするきっかけにもなっているという。

3月の東日本大地震が起こったときは、渋谷にいたが、たまたま建物の地下にいたため、そこまで大きな揺れだと感じなかったそうだ。地震を体験したのは初めてだったこともあり、「普通かなと思った」そうだ。しかし周りの人たちがの反応がかなり激しかったため、これは深刻だと思い始めたという。両親からは帰ってきてほしいと言われたが、「大丈夫だって。未来も大事だから、私のことは尊重して」と言って両親を説得した。

◇ 将来について ◇

日本に来る前までは、ワーキング・ホリデイビザで1年間、日本で過ごし、そのまま韓国に帰ろうと思っていた。しかし、日本に滞在する中で、美術大学への進学を考えるようになった。あまり勉強は好きではなかったが、小学生の時から絵を描くのが好きだった。そして絵の大会などでいつも賞をもらい、周りの母親たちも、Hさんの母親に対して、Hさんを美術の道に行かせたらどうか、と勧めるほどの腕前だった。しかし、「お母さんがだめだって反対したんです。それで途中でやめたんですけど、結局は戻ってきたんですね」と語る。

1年後には、日本語だけでなく芸術関係の科目も学べる専門学校にまずは入学し、美大受験の準備をする予定だ。そのために、その専門学校に近いところに引っ越しをした。韓国ではなく、日本で美大に入りたいと思うようになったのは、同じようにワーキング・ホリデイビザで日本に滞在していた韓国人女性から、韓国の美大の話聞いたことがきっかけだ。その女性は美大生だったが、「韓国より、日本とか外国で美術を勉強したほうがいい」と言われた。その女性の通う美大は、学生はあまり勉強しないし、美大なのにほかの普通の大学とあまりかわらない、ということだった。

美大で何を専攻するのかはまだわからない。それも含めて専門学校に入学して考えてみたいという。Hさんは模写が得意だが、そのような絵の才能は、「お父さんからもらったんです」という。Hさんの父親は建築の設計士だ。美大を卒業し、会社で3年働いた後、企業ロゴのデザインなどを手掛ける個人事務所を経営している親戚の男性の影響もある。デザインにも興味はあるが、「今はただ深く考えずに絵を描きたい」という。釜山の日本食レストランで働いていたときに、

「サービスが私に合うのかな」と思ったというが、「人間と人間の仕事だから、ここでちょっと疲れたんです」とHさんは言う。接客業を経験したことで、「私の世界で、一人でできる仕事がほしい」と思うようになった。そして、「結婚してもやっぱり仕事をしたいんです」という。

◇ 友人関係 ◇

日本に以前、留学していたこと、そして高校生の時にも長崎でホームステイを経験していることもあり、その時の友人に時々連絡したり、会ったり、友人を紹介してもらったりすることはあるが、なかなか親しい日本人の友人をつくるのは難しい。日本人と話すのは、今のところバイト先であることが多い。外国人だからと興味を持って話してくる客もいるが、「見えない壁がありますよね。(中略)もし私が大学生になったら違うかもしれないですけど、やっぱりバイト先とかで出会ったから・・・」と語る。Hさんは、まだ来日して半年であるため、「今からスタート」だそうだ。日本に住んでいると、「日本と韓国は近いけど遠い」ということを実感するという。特に食事や飲みに行ったときの「割り勘」にはなかなか慣れない。韓国では「今回は私が払うから次払って」ということが多いが、日本では「割り勘」が主流であるため、「ちょっと寂しいというか、冷たく感じる」のだそうだ。

<인터뷰 13(한국어번역)>

H 씨 (20 대 · 여성)

「지금은 단지 깊이 생각하지 않고 그림을 그리고 싶다」

2011 년 8 월 8 일, 부산출신, 아르바이트, 일본체재 6 개월째

인터뷰담당 : 카와이 유우코

◇ 첫번째의 장기 체재와 두번째로 일본에 오기까지 ◇

H 씨가 처음 일본에 장기체재를 한 것은, 2008 년의 4 월이다. 고등학교 3 학년때, 졸업하면 일본으로 유학하려고, 일본 대학을 수험했고, 도내의 대학에 합격했다. 전공은 법률이었지만, 이것은 H 씨 자신의 희망이라기 보다, 아버지와 고등학교 선생님께서 권하셨기 때문이라고 한다. 하지만, 법학부에 입학은 했지만, 법률공부에 그다지 흥미를 가지지 못하고, 게다가 외국인이었기 때문에 법학부라고 해도 일본에서의 취직은 간단한 것이 아니라는 것을 알고, 장래의 희망을 가지지 못한채 1 학기로 퇴학했다. 그리고 나서, 6 개월간 일본어 학교에 다니며, 모두 합해서 1 년간 일본에 체제한 후, 귀국했다. 장래의 진로에 대해 고민하고 있던 H 씨는, 부산의 고급호텔에서 접수처의 일을 하거나, 일본식 레스토랑에서 일하면서, 2 년간을 지냈다. 일본 관광객도 많았기 때문에, 일본어를 자주 사용했다고 한다. 일본식 레스토랑에서는, 개인실에 일본식 코스요리를 나르는 일이었지만, 손님들로부터 H 씨의 일하는 것이 인정받아, 한국에서는 팁을 주는 습관이 없음에도 불구하고, 한달 일하면, 급여보다도 팁 액수가 더 많을 정도가 되었다고 한다.

진로에 대해 고민하면서, 캐나다로 영어를 배우러 가려고 생각하고 있었지만, 일본의 워킹 홀리데이 비자에 응모했다. 이 비자는 연간 허락하는 수가 정해져 있어서, 3 월의 동일본 대지진 전에는 상당히 경쟁율이 높았다고 한다. 「조금 일본에 미련이 남아있었고 (중략) 될지 어떨지 모르겠지만, 한번 해볼까 라고. 떨어지면 뭐 어쩔수 없지, 라는 그런 느낌으로 가려고 생각했죠」 라고 H 씨는 말한다. 워킹 홀리데이 비자의 추첨에 뽑힘으로써, 2011 년 1 월에 두번째로 일본에서 장기체재를 하게 된다.

◇ 일본에서의 생활과 동일본 대지진 ◇

일본에서의 첫 주거는, 한국인 블로그에서, 도내에서 룸메이트 모집안내를 본 것이 계기가 되어, 연락해서 구하게 된다. 처음 아르바이트는, 뭔가 모집하는 곳이 없을까 하고 집 주위를 걸으면서 찾아보다가 발견하게 된 조그만 야끼니꾸 바 였다. 아르바이트 모집이라는 광고지에 적힌 전화 번호를 적어서 전화했는데, 다음날 부터 그곳에서 밤 8 시부터 심야 2 시경 까지 아르바이트를 하기로 했다. 손님은 연장자가 많고, 직업도 각양 각색으로, 접객을 하면서 「그 덕분에 조금 여러가지로 공부가 되었다」 고 한다.

지금은, 신주쿠내의 야끼니꾸점에서 점심과 저녁 영업시간 양쪽모두 아르바이트를 하고 있다. 아침 8 시에 일어나서, 10 시부터 2 시까지 일하고, 조금 선잠을 자고 난 후, 4 시부터 심야까지 더 일한다. 집에 돌아가면 심야 1 시정도가 된다고 한다. 한국인이 아르바이트를 찾을때, 한국인 유학생 대상의 인터넷 사이트를 이용하지만, 구인은 역시 신주쿠, 그 중에서도

신오오쿠보가 많다고 한다. 음식점 쪽도 구인을 내지만, 일본 구인 사이트등을 이용해서 모집하면 요금이 들지만, 「여기 (한국사이트) 는 공짜니까. 이곳에 모집을 올려요. 게다가 외국인은 빨리 일할 곳을 찾지 않으면 안되잖아요. 그것을 이용해서 전부 외국인이 되었죠」라고 한다. 아르바이트 하는 곳에서 가까운 신쥬쿠구내의 아파트를 찾으면 야짱이 비싸지는 것과 장래의 진로가 보이기 시작한 것도 있어서, 현재는 도내의 다른 구로 이사를 하고, 그곳에서 통근하고 있다. 지금의 불만은, 아르바이트 하는 곳에 다니기 위한 교통비가 반액 밖에 나오지 않는다는 것이다.

아르바이트 하는 곳에서, 손님이 「일본이 한국에 가서, 전철이나 도로등 여러가지를 만들어줬으니까, 반대로 고마운것이 아니냐」고 하신 적이 있다. H 씨는, 「그럴때, 저는 가능하면 역사이야기는 하고 싶지 않은데요」라고 한다. 일본의 젊은이들 중에는, 일본이 한국을 식민지화 한 것도 모르는 사람도 많고, 역사에 대해 흥미가 있는 사람도 적다고 한다. 독도/타케시마의 영토문제에 대해서도, 정치가나 연장자가 떠들고 있는 것 뿐이라고 생각하고 있다. 「아마도, 나이드신 분들이 전부 돌아가시면, 그 이야기는 없어질지도 몰라요」라고 미래에 희망을 걸고 있다. 현재의 일본에 있어서 K-POP 이나 한국드라마의 인기로, 한국인의 이미지가 좋아지고 있는걸 느낀다. 아르바이트 하는 곳에서도 한국의 아이돌 그룹인 「KARA」나 「소녀시대」의 이야기로 친해지기도 하고, 이야기를 할 계기가 되고 있다고 한다.

3 월의 동일본 대지진이 일어났을때는, 시부야에 있었는데, 우연히 건물의 지하에 있었기 때문에, 그렇게 까지 크게 흔들렸다고는 느끼지 못했다고 한다. 지진을 체험한 것이 처음이기도 했기에, 「보통 이런가 하고 생각했죠」라고 한다. 그러나 주위사람들의 반응이 상당히 격해있었기 때문에, 이걸 심각한거구나 라고 생각하기 시작했다고 한다. 부모님께서는 돌아오길 바란다 고 하셨지만, 「괜찮아요. 미래도 중요하니까, 저를 존중해주세요」라고 부모님을 설득했다.

◇ 장래에 대하여 ◇

일본에 오기 전까지는, 워킹홀리데이 비자로 일년간, 일본에서 지내고, 그대로 한국으로 돌아가려고 생각했다. 하지만, 일본에 체재하는 중에, 미술대학으로의 진학을 생각하게 되었다. 별로 공부하는 좋아하지 않았지만, 초등학교 때부터 그림 그리는 것을 좋아했다. 그래서 그림대회등에서 언제나 상을 받고, 주위의 엄마들도, H 씨의 엄마에게, H 씨를 미술의 길로 보내면 어떨까, 라고 권유할 정도의 실력이었다. 그러나, 「엄마가 안된다고 반대하셨어요. 그래서 도중에 그만두었는데, 결국은 돌아왔네요」라고 말한다. 일년뒤에는, 일본어 뿐만아니라, 예술관계의 과목도 배울수 있는 전문학교로 우선 입학하고, 미대 수험 준비를 할 예정이다. 그러기 위해서, 그 전문학교에 가까운 곳으로 이사를 했다. 한국에서가 아닌, 일본의 미대에 입학하고 싶다고 생각하게 된 것은, 똑같이 워킹 홀리데이 비자로 일본에 체재하고 있던 한국인 여성으로 부터, 한국의 미대에 대한 이야기를 들은것이 계기이다. 그 여성은 미대생이었는데, 「한국보다 일본이나 외국에서 미술을 공부하는 편이 좋다」고 하셨다. 그 여성이 다니는 미대는,

학생은 별로 공부하지 않고, 미대인데 다른 보통 대학과 별반 다르지 않다, 는 것이었다. 미대에서 무엇을 전공할지는 아직 모르겠다. 그것도 포함해서 전문학교에 들어가서 생각해 보고 싶다고 한다. H 씨는 묘사가 가장 자신있지만, 그러한 그림의 재능은, 「아버지 한테서 물려받았어요」라고한다. H 씨의 부친은 건축설계사 이시다. 미대를 졸업하고, 회사에서 3 년 근무한 후, 기업로고 디자인등을 다루는 개인 사무소를 경영하고 있는 친척분의 영향도 있다. 디자인에도 흥미가 있지만, 「지금은 단지 깊이 생각하지 않고, 그림을 그리고 싶다」라고 한다. 부산의 일본식 레스토랑에서 일하고 있을때에, 「서비스가 나에게 맞는구나」라고 생각했다고 하지만, 「인간과 인간 간의 일이기에, 이점에서 조금 지쳤어요」라고 H 씨는 말한다.接客업을 경험했기에, 「저만의 세계에서, 혼자 할수있는 일이 하고싶다」고 생각하게 되었다. 그리고, 「결혼해서도 역시 일을 하고 싶어요」라고한다.

◇ 친우관계 ◇

일본에 이전에 유학했었던 것, 그리고 고등학교 때에도 나가사키에서 홈스테이를 경험했던 적도 있고 해서, 그때의 친구에게 가끔씩 연락도 하고, 만나기도 하고, 친구를 소개받거나 하는것은 있지만, 좀처럼 친한 일본인 친구를 만드는 것은 어렵다. 일본인과 이야기하는 것은, 지금현재로서는 아르바이트 하는곳에서 일때가 많다. 외국인이기에 흥미를 가지고 이야기해오는 손님도 있지만, 「보이지않는 벽이 있잖아요 (중략) 만약에 내가 대학생이 되면 다룰지도 모르지만, 역시 아르바이트 하는곳에서 만났기에 . . .」라고 말한다. H 씨는, 아직 일본온지 반년이기 때문에, 「지금부터 시작」이라고 한다. 일본에 살고 있으면, 「일본과 한국은 가깝지만 멀다」라는 것을 실감한다고 한다. 특히 식사나 한잔 하러 갔을때의 「각자 부담」에는 좀처럼 익숙해 지지 않는다. 한국에서는 「이번에는 내가 낼 테니까 다음에 내」라는 식이 많지만, 일본에서는 「각자 부담」이 주류여서, 「조금 쓸쓸하다 라고 할까, 냉정하게 느껴진다」고 한다.

<インタビュー 14>

シンさん (20 代・男性) 「自分が今やりたいことをやりたい」

2011 年 8 月 8 日、ソウル出身、大学生、日本滞在歴 5 カ月

インタビュー担当：河合優子

◇ 来日のきっかけ ◇

シンさんは、ソウル近郊の大学で経営学を専攻する 4 年生である。あと 1 学期を残して、2011 年 2 月にワーキング・ホリデイビザを利用して来日した。日本語を学び始めたのは、高校生のときだ。ゲームに凝っていたが、当時、流行していたゲームは、日本のものが多かったそう。ゲームに出てくる日本語の意味が知りたいと思い始め、家にたまたまあった日本語の辞書を使い、ひらがなを覚えた。「(ゲームの) キャラとかの名前が読めるようになって、それが楽しくて、それで続けたんですね」という。「ただ趣味で」日本語を勉強し、高校や大学でも日本語の授業は履修したことがない。6 カ月間、語学学校で日本語の基本的な文法を学んだことはあるが、後にも先にも、日本語を正式に学んだのはこれが全てである。あとは、日本の映画やドラマを見たりすることで日本語力を伸ばした。

初めて日本に来たのは 2008 年である。大学に入学し、2 年間大学で勉強した後、軍隊で 2 年間の兵役に従事した。そして、除隊後、復学する時期まで少し時間があつたため、バイトをしてお金を貯め、友人 3 人と大阪に旅行に来た。旅行ではなく、今回は、ワーキング・ホリデイビザで日本に長期滞在しようと思った理由について、「たまたまじゃないですか。真剣に思って来たわけじゃないんですよ」という。英語もやりたいと思っていたため、カナダやオーストラリアに行くことも考えていたが、「ワーキング・ホリデイっていうビザは、日本から韓国に行くにはそんな難しくないんですけど、韓国から日本に来るには競争が厳しいんですよ、みんな行こうとするから。それで、一応やってみようかなと思って何げなく応募したんですよ。それで受かったちゃって、せっかくだからもったいないし、日本語の実力をもっと磨きたいから、ちょっと行ってみようかな」ということで来日することになった。

◇ 日本での生活と東日本大地震 ◇

日本に来る前に、インターネットで契約ができる韓国人経営の不動産業者を通して、アパートを探した。アルバイトは新宿区内で探したが、住居は「やっぱり高いから、さすがにちょっと無理かな」と思ったという。バイト先は新宿で探した理由について、「繁華街だし、いろいろな人が来るじゃないですか。それがいいかなという感じで」という。しかし、最初から韓国人の人が経営する店ではバイトは探さなかった。「せっかく日本に来たのに、同じ韓国人の人と一緒に働いても意味がないと思って。どうせやるんだったら、日本のお店で日本の人たちと働いたほうがいいかな」とシンさんは語る。バイトを探すのに約 1 カ月かかったが、現在は新宿区内の焼き肉店の厨房で肉を切る仕事を、ランチ時間は週 4 回、夜の営業時間は週 3 回やっている。旅行が好きだというシンさんは、暇があれば自転車を使い、浅草や台場、渋谷など、さまざまな場所に出かけている。「そろそろほかのバイトも探してみようかなと思っているんですけど。今は休みが多いんで、結構楽しんでいます」という。

日本に来て1カ月が過ぎたころ、東日本大地震とそれに伴う福島原発事故が起きた。その時は、自宅のアパートにいたが、お皿や食器が割れ、いろいろな物が落下し、余震の際に、机の上にあったパソコンも落下して壊れてしまった。両親もかなり心配をし、今でもシンさんの祖母は「危ないから早く帰りなさい」と言っているという。しかし、「これも自分の勝手な考えなんですけど、今それが本当に危ないかどうかわからないじゃないですか。だから危ないという人もいれば、逆にそれは危なくないかもしれないっていうことになるじゃないですか。それで自分がやりたいことがあるから、確かじゃないことに惑わされるんじゃないくて、自分が今やりたいことをやりたいと、意地張って今いるんですけど。(中略)例えば、自分が明日、交通事故で死ぬかもしれないんですよ。それは、人のことって誰もわからないじゃないですか。だから、自分が一番やりたいことをやろうと思って。それで今もいます」と言う。

◇ 人間関係など ◇

ワーキング・ホリデイビザで来日しているため、日本の大学生と知り合う機会はありません。2010年の夏、関東地方の大学の日本人留学生が、シンさんの家に1カ月間、ホームステイしたこともあり、その友人が「大事なつながり」だという。その他、ミクシィなどのインターネットのコミュニティサイトを利用して、韓国に興味をもつ日本人と韓国人の交流グループのオフ会に参加することで日本人の友人をつくっている。最近では、ほぼ週に1回は交流会があり、集まる場所はだいたい新大久保だ。交流会では飲みに行ったり、カラオケに行ったりする。

シンさんは、「新大久保にいと、(中略)日本にいるのかどうかわからなくなるんです。韓国の明洞ってところも結構、雰囲気が似ているんで」という。韓国人同士で集まるときにも、新大久保が多い。「韓国のお酒や韓国料理が食べたいと思うと、新大久保に行くしかない」そうだ。ただ、物価の違いもあるが、新大久保では、韓国と比べると韓国の食べ物がかなり高く売られているという。例えば、屋台で売られているホットク（揚げ焼きパン）は4倍、韓国料理屋のサムギョプサル（豚の三枚肉を使った焼肉料理）は倍ぐらいの値段で売られているが、量は韓国で出されるものに比べて少ないという。

歴史問題については、日本人の友人や知り合いと語ることはあまりない。「昔の話だから、僕はあんまり今は関係ないと思うんですよ。(中略)昔の話をあんまりしてもしょうがないんじゃないかなと思うんですけど。今の日本が悪いわけじゃないですから。今は若い子は、できればそのほうがいいんじゃないかと思う」のだそうだ。「僕も今は気にしない、過去の話ですからあまり気にしない」が、日本が韓国を植民地化していたことは知っていてほしい。日本が韓国を植民地化していたことには触れずに、「日本がどんなにアメリカにやられて、何か日本は被害者だって言う、被害者だからアメリカが悪いとか、そういう話をする。それはちょっと嫌ですね」という。

K-POP や韓国ドラマが日本で人気があることについては、「昔よりは韓国人のイメージがよくなった」という印象を持っている。日本のテレビで韓国のドラマが放送されていたりすると、やはりうれしくなるそうだ。韓国や韓国文化に興味を持つ日本人が増えたことで、友人をつくるきっかけにもなっている。6月に韓国

に一時帰国した時、日本に戻る飛行機の中で、以下のような経験をした。「僕は寝てたんですけど、隣の席の人が韓国語で『チョギョ、チョギョ』って。(中略)自分呼んでるのかな、と思ってたんですけど、それが違ったんですよ。韓国語の話をしてたんですよ」。その隣の席の人たちは「チョギョ」の意味を話し合っていたそう。韓国ドラマなどに興味を持っている若い日本人女性で、その韓国語の意味を教えてあげたことがきっかけで話がはずみ、今でも連絡を取り合っているという。

◇ 将来について ◇

将来については、まだはっきりとは決めていない。「自分でもちょっと情けないことなんですけど、(中略)自分が将来何がしたいのか決めてないんですよ、正直。それで、一応今、外国語を勉強しているんですけど、日本語と英語と。結構、外国語を勉強するのが楽しくて」とシンさんは語る。日本でワーキング・ホリデイビザで1年過ごした後、カナダかオーストラリアに再度、ワーキング・ホリデイビザで行き、英語力を伸ばすことを考えている。現在、時間があるときには、インターネットで英語の講座も受講している。昔は英語は好きではなかったそうだが、「今は結構好きになって、ちょっと本気でやってみようと思って」という。もともと大学で経営学を専攻したのは、「たまたまですね」というが、それ以外にも、就職に有利であること、「やっぱり就職のできる幅が広いっていうか、いろんな分野の仕事ができる専攻だから」という理由もあった。韓国の大学に復学するのは、カナダかオーストラリアに行った後になるが、将来は、海外出張の機会が多く、日本語と英語が両方使えるような仕事をしてみたいという。

<인터뷰 15>

JI 씨 (30 대 후반 · 남성)

「세번째로 일본에 와서 일본전도의 사명을 안고」

2011 년 8 월 10 일, 전라남도 출신, 전도사, 일본체재 6 년째

인터뷰 담당 : 이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

◇ 삼세번의 도전 ‘일본생활’ ◇

98 년 신문장학생으로 처음 일본땅을 밟게 된다. 하지만, 익숙하지 않은 나라에서 아르바이트와 함께 시작하는 1 월은 춥고, 아주 서툰 일본어로 인해 제대로 의사소통도 못한채, 들어가는것은 자전거로인한 타박상의 상처뿐이었다.

처음 온 일본은 일본어를 모르는 외국인에 대한 차별이 심하구나라는 인상만 안은채, 자동차 사고가 날 뻔했던 일로, 계획했던 것 보다 조금 빠른 10 개월 만에 귀국한다. 두번다시는 오고 싶지 않은 나라라는 느낌만을 안은채로.

하지만, 10 개월간 일본생활에서 익히게 된 일본어로 인하여, 일본어학과로 편입하게 되고, 4 학년때 교환학생으로 다시금 일본에 오게되는 기회가 주어진다. 처음과는 많이 다른 입장에서 이번에는 일본어를 제대로 한번 배워보자 라는 다짐을 안고, 두번째의 일본생활이 시작된다. 그후, 교환학생이 끝나면서 귀국하지 않고, 일본의 백화점에 취직을 하게된다.

그러나, 학교생활과는 달리, 직장생활이라는것은 또 다른 세계였다. 즉, 자신의 모든것을 쏟아 부었다고 생각했는데, 결국은 직장안에서 나까마에 들어가는것이 좀처럼 힘들었다. 결국은 낯설고 겉돌게 되는 자신이, 외국인이라는 어쩔수없는 자괴감을 맛보게 된다.

직장에서의 어려움과 미래에 대한 불안함을 겪으면서 절대자에 대한 의지, 즉, 모태신앙의 힘이 자신을 버티게 해주었다고 한다. 무엇보다도 이 일본땅에서 외국인인 자신이 일본인을 위해서 할수 있는게 있다면, 내가 아는 멋진 하나님을 소개하는 것 뿐이라는 결 깨닫게 된다. 그럼에도 불구하고 한국으로 돌아가게 되지만, 만약 다시 일본으로 올 기회가 있다면 그때는 정말 선교를 위해서 오겠다는 마음의 씨앗을 뿌리고 귀국하게 된다.

한국에 돌아가서 행복했던 것도 한순간, 결혼의 약속이 무산되면서, 하나님과 약속했던 일본선교를 새삼 떠올리게 된다. 그래서, 더 깊이 일본사회에 들어가고 싶은 마음에 한국에서도 신학교를 들어갈수 있음에도 불구하고, 일본 신학교를 들어가려고 결심하게 된다. 삼 세번이라고 했던가. 이번엔 정말로 자신이 일본을 위해 할수 있는 일본선교를 위한 꿈을 실현하기 위한 도전을 하려고, 세번째로 일본의 신학교에 오게 된다.

◇ 외국에서 신앙인으로 살아간다는 것의 의미 ◇

어느나라 이진 외국인은 이방인 이거든요. 따라서 외국에서 종교를 가진다는 것은, 쉬운일이 아니다 라고 먼저 결론 지으신다. 복음이라는 것이 엄밀히 말하면 민폐,즉 항상 진리는 박해를 받게 되어 있기에, 더욱이 기독교에 대해 우호적인 편이 아닌 일본사회에서, 게다가 외국인이 크리스찬으로 살아간다는 것은, 넌 크리스찬으로 살아간다는 것보다 훨씬 더

힘들다.

왜냐하면, 이방인으로서도 살아가야하며, 또한 그리스도인답게 살아가야 하는, 두가지 일을 해야 하기에 그만큼의 십자가를 지어야 갈수 있는 길이 외국에서의 크리스찬이라고 하시며, 성도님들의 고충 또한 살짝 들려주신다.

반면, 외국에서 생활하면서, 같은 한국사람이면서, 같은 신앙을 갖고 있는 사람들끼리의 교감은 남다르기에, 같은 신앙을 소유한 사람들끼리 의지하고, 서로 도움을 나누는 것은, 외국생활에서 마음의 평안과 위로가 되고, 많은 도움이 된다고 하신다.

일본 신학교를 다니면서, 물론 신학생들도 인간이기에 일본사회의 어떠한 것들이 묻혀있지만, 하나님을 향한 신앙이 얼마만큼 사람에게 도전을 주고 힘을 주는지, 그곳에서 많은 동기들을 만나면서 느낀다.

그런 전도사님의 일본에서의 선교는, 무엇보다도 닫혀있는 일본사람들의 마음을 하나님이 많이 어루만져 주기를 바란다는 것이 기도 제목이다. 일본에 800 이 넘는 신들이 있다고 하지만, 내가 아는 하나님이 그들을 어루만져주시고, 하나님을 믿는 사람이 늘어나기를 바라며 기도한다고 한다.

◇ 3·11 재해이후의 변화와 사명감 ◇

3·11 의 대지진은 여러가지 면에 있어서 다시금 생각을 굳히게 되는 계기가 된다.

마침 그날은 1 시반부터 신학교 졸업식이 있는 날이었다. 흔들리는 졸업식장, 졸업생들, 축하객들 모두 돌아가지도 못하고, 그 다음날 학교에서 있을 졸업생의 결혼식도 할지 말지의 여부를 두고 많이 당황했다고 한다. 「그땐 전쟁이었잖아요」라는 군대를 다녀온 한국남자 다운 표현에서 그날의 당혹함이 일면 엿보인다.

그러한 것들을 겪으면서 과연 일본에 살수 있을까, 특히 여자친구도 일본사람이고,

솔직히, 일본에서 내가 무엇을 해야하는지, 선교를 위해 삼 세번의 역경을 딛고 온 일본인데, 다시는 돌아가는 일은 없을거라 다짐했었는데, 이번의 지진은 그마음을 조금 흔들며 고민을 하게 했다는 것이 첫 마음이다.

하지만, 처음 잠시나마 그런 생각을 했다는 것이 부끄럽게 느껴질 만큼, 오히려

끝까지 일본사람편이 돼야 되겠다 라고 다시금 마음을 굳건히 다잡는 계기가 된다. 일본으로 나를 보내신 하나님의 목적이 분명히 있고, 내가 이곳에 살아야하는 이유, 곧 선교라는 것을.

그러고 나서 일본사람들을 바라보니, 참 불쌍하게 느껴졌다고 한다. 좋은 인프라를 가지고 있음에도 불구하고, 부럽지 않은 그런 나라에 살고 있음에도 불구하고, 어쩔수 없는 자연재해 앞에 무력할수 밖에 없는 사람들.

그래서 나 자신이라도 남아서 더 열심히 기도해야겠다는 마음이 들었다고 한다.

전도사님이 어려서 부터 듣고 자란 이야기중 하나가, 결혼식에는 못가도 장례식장에는 꼭 가야한다는 이야기이다. 즉, 기쁜일보다 슬프고 힘든일 일수록 옆에 있어주는게 사람에게 대한 정이고 도리이다 라고 배웠다. 하물며 신앙이 없는 사람도 그렇게 서로 격려하며 살아가는 지혜가 있는데, 신앙이

있는 사람은 더 본을 보이는 것이 당연하다고 하신다.

그리고 성경에서 이야기 하는 사랑이, 함께 있어주는 것, 힘들수록 옆에 있어주고,

꼭 무언가 말을 안해도 옆자리를 지키는 것 만으로 친구가 되어주는 것, 그런모습을 그리스도 인들이, 종교인들이 많이 보여주는것이 당연하다고 하신다. 박애정신, 신학적 표현을 빌리자면, 일반적인 은총, 즉, 하나님은 모든 사람에게 평등하시다 라고 하는 것. 성경말씀 중에, 동일한 해를 비취주시고, 동일한 비를 내려주시고, 동일하게 공기를 주시는 그런 하나님이시라는 것. 그러기에 하나님 말씀대로 슬퍼할때에 옆에 있어 주는것은 당연한 것이고, 더 해야하는 일이라고 덧 붙이신다.

◇ 신오오쿠보의 매력에 빠지다. ◇

요즘은 그 어느때보다도 신오오쿠보의 매력에 빠져있다. 왜냐하면,어릴때 간식으로

자주 먹었던 호떡을 먹을수 있고, 무엇보다 맛있는 한국음식이 많이 있기 때문이다. 인도카레를 제일 좋아하던 일본인 여자친구도 지금은 김치찌개,호르몬 나베를 제일 좋아한다고 한다. 여자친구에게 손수 김치찌개를 만들어 주는 자상한 일면을 보이시는 전도사님, 아마도 한국음식을 좋아할수 밖에 없겠다.

하지만, 그 무엇보다도 요즈음 더욱 절실히 피부로 느끼는 신오오쿠보의 매력을 알려주셨다. 몇년전만해도 느끼지 못했던, 신문장학생으로 와서 고학했던 첫 일본 생활 에서는 느낄수도 없었던, 일본사람들이 한국을, 한국의 음식을, 한국의 문화들을 이렇게나 좋아해 주니까, 그것이 너무 좋아서 더욱 자주 신오오쿠보 거리를 들러신다고 한다.

한국음식점에 긴 줄을 서서 기다리는 모습을 보면, 한국이 자랑스럽고, 내가 돈을 버는 것도 아닌데도 웬지 뿌듯하고, 스스로가 대접받는 기분이 들게 해주는 그러한 곳으로 바뀌었기 때문에 이곳이 더욱 좋다고 하신다.

미래의 선교를 생각할때, 부모님들이 더 일본을 사랑하고, 섬기는 모습을 자녀들에게 보여주며, 신쥬쿠의 일터에 나와서 맛있고 멋진 한국음식, 문화를 소개해 나간다면, 앞으로의 우리의 2 세들은 자연스레 일본과 친숙해져서 진정한 화해를 위한 중요한 가교 역할들을 잘 감당해 내리라 본다며, 신오오쿠보의 변화된 모습에서 일본 선교의 가능성을 엿보신다.

이곳 신쥬쿠가 그러한 장으로서 자리잡아 나가길 바란다.

이번의 지진재해 또한 많은 일본 분들의 가치관에 영향을 미쳤을 테고, 정치적 리더쉽의 부재, 엔고 현상, 힘들어지는 경제, 등으로 인하여 뭔가 바뀌어야 한다는 열망이 내부에서 많이 일고 있을테고, 그것이 전향적인 사고로 연결되어, 일본인의 생각들이 많이 열리며, 좀더 적극적으로 바뀌어 갈 것으로 기대된다고 하신다.

◇ 앞으로의 선교의 비전 ◇

일본인의 남에게 무신경함, 뭔가 초월한 것 같은 느낌을 주는, 가는 사람은 가고, 남아있는 사람은 남아있지 않을까 하는 그런 모습에서, 아무도 믿지 못하는 그들의 외로움이 더욱 아프게 느껴진다고 한다.

한일간의 독도 문제가 생기긴,역사적 문제가 다시 거론되건, 감정에 상관없이, 사랑함에 있어서 부족함이 있어서는 안된다고 하시며, 사랑할수 있을만큼 사랑하고 오히려 모자람이 있을까 걱정하는 것이 종교인들의 모습이라고 하신다.

전도사님이 만들고자 하는 교회상은 , 성도님들과 함께 만들어가는 교회이다. 그리고 무엇보다 일본사람이 중심이 되어 리더하는 교회를 만드는 것이다. 한국사람 또한 일본사람을 위한 마음을 품고, 돕는 역할을 하는, 일본의 일본인이 중심이 되는 교회이다. 왜냐하면, 일본땅이기에 일본인이 중심되는 교회가 되는것이 이상적이라고 하신다.

전도사님이 꿈꾸는 선교는 다음 세대가 나설수 있는 장(토대)을 만들어 주는 것이다. 즉, 우리같은 뉴커머들의 다음세대가 이땅에서 잘 정착해 나갈수 있도록, 좋은 장점들을 잘 흡수해서, 이땅의 한국사람/ 일본사람을 연결하는 다리가 될뿐만 아니라, 예수님이 하나님과 우리를 화해 시켰듯이, 일본사람과 한국사람들을 화해 시켜, 진정한 동반자로 만들어 갈수 있는 역할을 감당할 수 있기를 바란다. 그것이

뉴커머 1 세대들이 해야할 일이라고 생각한다며 미션을 말씀하신다.

창의적이지 못한, 자기만을 위한, 남을 많이 배려하지 못했던 그러한 우리세대의 아쉬운점을 극복할수 있는 교육이 필요하다고 하신다. 즉, 우리의 2 세대들에게는 우리의 한계적인 생각들을 뛰어넘을수 있도록, 우리들이 더욱 일본을 위해 기도하고, 사랑하며, 의연한 모습들을 보여줄때, 그 모습을 보며, 자연스레 일본을 사랑하며 기도하며 , 일본사람들에 대해 좋은 감정을 가지는 긍정적인 사고를 가지는 세대로 자랄 것이라 생각된다고 설명하신다.

따라서 그런 모습들을 보여주려고 노력을 많이 해야 하는것이 우리 1 세대가 마지막으로 남겨야 할 유산이지 않을까 생각한다고 덧붙이신다.

이땅의 일본인이 잘 돼야 함께사는 외국인들도 좋은 것이라며, 섬기는 마음을 보여주셨다.

<インタビュー 15（日本語訳）>

JI さん（30 代後半、男性）

「三度目の来日で、日本伝道という夢の道へ」

2011 年 8 月 10 日、全羅南道出身、伝道師、日本滞在 6 年目

インタビュー担当：李 埈鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇ 三度目の挑戦 ‘日本生活’ ◇

1998 年、新聞奨学生という立場で始めて日本に来る。しかし、慣れない国でアルバイトと共に始まる 1 月の生活はとても寒かった。しかも、とても下手な日本語のせいで、ろくに意思疎通もできないまま、増えるのは自転車による打撲の傷跡だけだった。

初めてきた日本は、日本語を分からない外国人に対して差別が酷いという印象だけを抱いたまま、車と衝突事故になりかけたことをきっかけに、計画より少し早めの 10 カ月ぶりに帰国する。「二度と来たくない国」という印象を抱いて。

しかし、10 ヶ月間の日本生活で学んだ日本語のおかげで、日本語学科に編入でき、4 年生になった時、交換留学生として再び日本に来る機会が与えられた。最初とはだいぶ違う立場で、「今度こそ、まともに日本語を学んでみよう」と心に決め、二度目の日本生活が始まる。その後、交換留学が終わり、そのまま日本のデパートに就職することになる。

しかし、学校生活とは異なり、職場生活というのはまた違う世界だった。自分の全てを出しきったと考えていたが、職場での仲間入りは相当難しかった。結局は、なかなか慣れず、周辺人的な自分が、外国人というどうしようもない自己恥辱感を味わうことになる。

職場での難しさと未来に対する不安感を経験しながら、絶対者に対する意志、すなわち、母胎信仰の力が自分を支えてくれたという。何よりも、ここ日本の地で外国人である自分が日本人のためにできることがあるとしたら、自分が知っている素晴らしい神様を紹介することだけだということを悟る。それにもかかわらず、韓国に帰国することとなるが、もし、再び日本に来るチャンスがあったら、今度こそ絶対に宣教のために来るという心の種をまいて帰国する。

韓国に帰って幸せだったのも一瞬、結婚の約束が失敗に終わり、その時、神様と約束した日本宣教を再び思い浮かべる。そして、もっと深く日本社会に入りたいという気持ちから、韓国でも神学校に入ることができるにもかかわらず、日本の神学校に入ることを決心する。三度目の正直というのであろうか、今度こそ本当に日本のためにできる日本宣教という夢を叶えるための挑戦をしようと、三回目の来日で神学校に入ることになる。

◇ 外国で信仰人として生きるということの意味 ◇

どの国であろうと外国人は異邦人である。だから外国で宗教をもつということとは、やさしいことではないと先に結論から話す。福音というもの、真理はいつも迫害を受けてきた。さらに、「キリスト教に対して友好的ではない日本社会で、しかも外国人がクリスチャンとして生きるということは、ノン・クリスチャンで生きるより遥かに大変だ」という。

なぜならば、異邦人として生きていかなければならないことと、クリスチャン

らしく生きていくことという二つのことをしなければならないわけで、それだけの十字架を背負ってこそ実現できるものが外国でクリスチャンとして生きることであると言いながら、聖徒の苦痛をさりげなく聞かせてくれた。

反面、外国で生活しながら、同じ韓国人で同じ信仰をもつ人々との交流や理解は格別である。同じ信仰を有した人同士で頼り、互いに助け合ったりするのは、外国生活で心の平安と慰めになり、大いに役立つという。

日本の神学校に通った経験については、もちろん神学校の生徒たちも人間である以上、日本社会のあらゆる姿をみせているが、「神様に向かった信仰がどれほど人に挑戦を与え、力をくれるのか」そこでたくさんの同期と付き合いながら感じたという。

そんな伝道師の日本での宣教は、「何よりも堅く閉ざされた日本の人々の心を神様がたくさん慰めてくれることを願っている」と、祈りの題名について話してくれた。日本には800を超える神様が存在すると聞いているが、自分が知っている神様が彼らを慰めてくれて、神様を信じる人が増えることを願い、祈っているという。

◇ 3・11 震災後の変化と使命感 ◇

3・11の大震災はいろいろな面において再び心を決めるきっかけとなった。

ちょうどその日は、一時半から神学校の卒業式があった。揺れる卒業式場、卒業生たち、祝い客、皆帰れず、その次の日に予定していた卒業生の結婚式もやるか止めるかの可否でだいぶ慌てたという。「その時は、戦争だった」という軍隊を経験した韓国男子らしい表現からも当日の当惑する一面がうかがわれた。

そのようなことを経験しながら、「果たして日本で暮らせるのか」、正直に、「日本で私に何ができるのか？」。

宣教のために逆境を乗り越え、三度目の来日をしたのに、二度と帰ることはないだろうと誓ったのに、今回の地震はその心をわずかにだが揺さぶって、悩んだという。

しかし、最初、少しの間だけでもそんなことを思ったのが恥ずかしくなるほど、むしろ、最後まで日本人側に立つ人になろうと再び心を強く決心する。「日本に私を送った神様の目的は明確である」と信じ、「私がここで生きなければならない理由は宣教である」と確信したという。

それから、日本の人々を見ると、良いインフラを持っているにもかかわらず、羨ましい国であるにも関わらず、どうしようもない自然の災害の前では無力であるしかない、ということが痛ましいという。だから、自分一人でも残って、より頑張って祈らなければならないという気持ちになったという。

伝道師さんが小さい頃から聞いた話の中には、結婚式には行けなくても、葬儀場には必ず行くべきだということがある。すなわち、喜ばしい時より悲しくて大変な時に、そばにすることが人に対する情であり、道理であると教わった。まして、信仰のない人もそのように互いに励まし合いながら生きるという知恵があるのに、信仰がある人はより模範を見せるのが当然だという。

聖書でいう愛は、ともにいること、苦しいときほどそばで支えることである。何か話さなくても傍で見守るだけでも友だちになれる。そんな姿をクリスチャンたちが、宗教人たちが多く見せるのは当然のことだという。博愛の精神、神学的

な表現を借りると、一般的な恵み、すなわち、神様は全ての人に平等であるということ。聖書の中には、全ての人に同一の太陽を昇らせ、同一の雨を降らせ、同一の空気を送るそんな神様であること。ゆえに神様の御言葉どおり、悲しい時に傍にしながら助け合うのは当然のことで、よりすべきことであると付け加えた。

◇ 新大久保の魅力にはまる ◇

最近、以前よりまして新大久保の魅力にはまっているという。なぜならば、「小さい頃間食でよく食べた懐かしい「ホトック」が食べられる、何よりおいしい韓国料理がたくさんあるから」だと話す。インドカレーが好きだった日本人の彼女も、今はキムチチゲ、ホルモンなべが好きだという。時々彼女にキムチチゲの手料理を作ってあげるといふ優しい一面を見せる伝道師さん。韓国料理が好きになる彼女の気持ち分かるような気がする。

しかし、何よりも最近もっとも切実に肌で感じる新大久保の魅力について話した。何年前までには感じられなかった、新聞奨学生として来日し苦学した最初の日本生活では感じられなかったことがあるという。それは、日本の人々が韓国を、韓国の食べ物を、韓国の文化を、こんなにも好きになってくれたことである。それがあまりにも嬉しくて、もっと頻繁に新大久保の町に寄るといふ。なによりの新大久保の魅力であるという。

韓国料理の店に長い列で待っている日本の方の姿をみると、韓国が誇らしく思えて、自分がお金を稼いでいるわけでもないが、何となく満たされる。自分が優遇されるような気持ちになる、そんなところが変わったので、ここがもっと好きになったという。

「未来の宣教を考えると、親たちがもっと日本を愛し、仕える姿を子どもたちに見せながら、新宿の仕事場に出て、おいしくて素晴らしい韓国料理、文化を紹介していくならば、これからの我々二世たちは、自然と日本に慣れしんで、本当の和解のための重要な懸け橋としての役割を担うことができる」といいながら、新大久保の変化する姿から日本宣教の可能性を予測していた。

ここ、新宿がそんな場として位置づいていくことを願う。

今回の震災は多くの日本の方たちの価値観に影響しており、政治的なリーダーシップの不在、円高現象、苦しくなる経済等によって、何か変わらなければならないという熱望が内部から噴き出ているだろう。それが前向きな思考につながって、日本人の考えがより開いて、もっと積極的に変わっていくことを期待するという。

◇ これからの宣教のビジョン ◇

日本人が他人に無関心であること、何かを超越したかのような様子、去る人は去る、残る人は残るだろうというそんな姿から、誰も信じられなくなった彼らの悲しみがもっと痛ましく感じられるという。

「日韓の竹島問題が起きようが、歴史的な問題が再び論議されようが、感情に惑わされず、愛することにおいては不足することがあってはならない」といふ。「愛せる限り愛して、それでも足りなさが心配することが宗教人としての姿である」といふ。

伝道師さんが描く教会像は、聖徒とともに創っていく教会である。日本の方が

中心となってリードしていく教会を創ることである。韓国の方も日本の方のためという心を抱き、助ける役割をする教会である。なぜならば、ここは日本の地で、だからこそ、日本人が中心となった教会になるのが理想的だと話した。

伝道師が夢見る宣教は次の世代が頑張れる土台を作ってあげることである。すなわち、「我らニューカマーの次世代がこの地で定着していくために、長所を吸収し、この地の韓国人・日本人をつなぐ懸け橋になるだけではなく、イエスさまが神様と私たちを和解させたように、日本人と韓国人を和解させ、真の同伴者とさせていく役割を担えること」が願いだという。それは、ニューカマー第一世代がやるべきことだとミッションを話してくれた。

「創意的でなかった、自分だけを思った、他人を配慮できなかった、そんな我ら世代の惜しいところを克服できる教育が必要だ」という。つまり、次世代が我らの考えの限界を乗り越えられるように、我らがもっと日本のために祈り、愛し、毅然とした姿を見せることが大事だという。我々の子どもたちは、そのような親の姿をみて、自然と日本を愛し、祈り、日本人に対して良い感情を抱く肯定的な思考をもつ世代として育っていくと話してくれた。

したがって、そんな姿を見せるためにたくさんの努力をしなければならないのが、我ら第一世代が最終的に残すべき遺産であると付け加えた。

このように、この地の日本人がよくなれば、ともに生きる外国人にとっても良いことであると、仕える心を見せてくれた。

<인터뷰 16>

H 씨 (20 대 중반 · 여성)

「한국으로 돌아가기 위한 일본에서의 취업」

2011 년 8 월 17 일, 경기도 수원 출신, 회사원, 일본체재 6 년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

H 씨는 1986 년, 경기도 수원 출신이다. 현재 24 살인 H 씨는 19 살 때 홀로 일본에 유학을 와서 대학을 졸업한 뒤 취직을 했다. 일본계 통신 회사에서 신입사원으로 당당하게 사회생활을 시작한 H 씨를 소개하고자 한다.

◇ 어머니의 권유로 오게 된 일본 유학 ◇

H 씨는 1 남 2 녀의 장녀로 태어났다. 어렸을 때부터 할아버지, 할머니, 부모님, 그리고 형제들의 대가족과 함께 살아 온 H 씨는 어렸을 때부터 그림 그리는 것을 좋아했고 장래에는 미술 관련 일을 하는 것이 꿈이었다. 고등학교 때까지는 미대에 가기 위해 계속 준비를 해 왔지만 대학 입시에 실패한 후, 어머니의 권유로 일본 유학을 결심하게 되었다고 한다. 당시, H 씨의 어머니께서는 자립심이 없고 겁이 많았던 H 씨에게 재수보다는 외국으로의 유학을 권유하셨다. 하지만, 미대에서 꼭 당시의 꿈을 이루고 싶었던 H 씨는 한국에서 재수를 하겠다고 했지만, 어머니의 「재능도 없는 것 뻔히 아는데, 고생 그만하고 여기보다 넓은 세상에 나가서 혼자서 살아 봐라」라는 어머니의 설득에 결국 유학을 결정하게 되었다.

2005 년, H 씨는 나가노현에 살고 있던 친척 집에서 신세지면서 2 년간 어학교에서 일본어를 공부했다. 외가쪽의 친척인 오바상은 일본 사람과 결혼해서 일본에 왔고, 자녀가 없어서 H 씨를 딸처럼 귀엽게 아껴주셨다. 하지만, 익숙치 않은 다른 나라에서 친척이라고는 하지만 가깝지 않은 사람들과 시작된 새로운 생활은 많이 힘들었다고 한다. 「그 친척 오바상께서 일본분과 결혼해서 살고 계셨고, 일본에 20 년 가까이 살아 오신 분이래... 일본의 문화와 생활이 익숙치 않았던 저에게는 너무 힘든 생활이었어요.」라며 그 당시의 힘들었던 이야기를 들려 주었다.

대학교 입시를 준비하면서 다시 미대를 준비해 볼까 하는 꿈을 가져 보기도 했지만, 「미대에 가겠다면, 학비와 생활비를 지원해 줄 수 없다.」라는 부모님의 말씀을 듣고 결국 그 꿈은 완전히 포기하게 되었다. 하지만, 지금은 그런 결정을 내리도록 이끌어 주신 부모님께 오히려 감사함을 느낀다고 한다.

◇ 대학 생활과 취업, 그리고 신입사원이 되기 까지 ◇

H 씨는 일본의 사립대학에 입학했다. 대학에서는 국제학부에서 개발도상국에 관한 공부를 했다. 그리고 4 학년 때 다른 일본인 친구들과 같이 취업준비를 시작하게 되었다. 지금 다니고 있는 회사는 2011 년 1 월에 내정을 받아 4 월부터 근무 중이다.

대학생이 되고 부터는 독립해서 혼자 생활을 해왔다. 어머니가 독립심이 없고 겁이 많아서 걱정하셨던 것처럼, 처음 하는 독립 생활은 많이 무서웠다. 「말이 없는 편이기 는 하지만, 집에서 자주 벽보고 이야기하곤

했어요。」라며, 많이 외로웠지만 오랜 시간 혼자서 지내오니, 이제는 익숙해졌다고 한다.

대학 졸업을 준비하면서, 한국에 돌아가서 한국에서 취업을 준비할 생각도 있었지만, 일본어 공부도 부족한 것같았고, 아직은 한국에 돌아가기에는 너무 이르다고 생각했다. 「한국으로 돌아가기 위한 일본으로의 취업」이라며, 이 곳에서 조금 더 경력을 쌓고 싶었다고 한다. 「대학교를 막상 졸업하려니, 부족한 실력도 느껴졌고 일본에서 대학을 졸업했다는 것만으로 한국에서 적극적으로 취업 활동을 할 자신이 없었어요。」라며 일본에서의 취업을 결정한 이유를 설명해 주었다. 그리고 일본에서 학생으로만 있던 자신이 어떤 사회생활을 할 수 있는지에 대해서도 스스로를 한 번 시험해 보고 싶었다. 아버지는 한국에 돌아가서 가족 모두 함께 지내길 원하셨지만, 어머니는 끝까지 H 씨를 믿고 아끼지 않고 지원해 주셨다고 한다.

대학 4 학년 때부터 시작한 취업 활동은 생각보다 만만치 않았다. 같이 취업을 준비하던 한국 친구들 중에는 일본에서의 취업을 포기하고 한국으로 돌아간 친구들도 많았다. 끝까지 포기하기 않고 최선을 다해서 취업 활동을 한 결과, 2011 년 1 월 지금 근무하는 회사에 내정을 받게 되었고 열심히 사회 생활을 해보겠다는 굳은 결심을 했다.

3 월 11 일 지진 이후, 잠시 한국에 돌아갔던 H 씨의 부모님은 딸이 다시 일본으로 돌아가는 걸 반대하셨다. H 씨도 한국에서 보도되고 있던 뉴스나 신문을 보면서 다시 일본으로 돌아가는 것에 조금 불안을 느꼈지만, 힘들게 일본에서 취업 활동을 해서 내정을 받은 만큼 그걸 포기하고 싶지 않았다. 그래서 그런 의지를 부모님께 전했고, 부모님 또한 힘든 시간을 보내 왔던 H 씨를 잘 알고 있었기에 이해해 주시고 응원해 주셨다고 한다.

2011 년 4 월부터, H 씨가 신입사원으로 일하고 있는 회사는 일본계 통신회사이다. 핸드폰과 와이파이라 같은 데이터 통신 기기를 렌탈하는 회사이며, 직원은 200 명 정도 이다. H 씨 이외에도 한국인, 재일교포, 중국인, 조선족, 프랑스인 등 각국의 직원들이 함께 일하는 회사라고 한다. 일본 통신 렌탈 업계에서는 업계 1 위를 차지하고 있는 회사이다. 이 회사에서 H 씨는 국제업무팀에서 한국과의 영업을 담당하고 있다. 한국 기업들간의 영업에서는 한국어를 사용하지만, 회사에서의 모든 업무는 일본어를 사용하고 있다. 아직 회사 업무에 익숙하지 않아 매일 선배들에게 혼나면서 일을 배우고 있다고 한다. 다행히 회사에의 분위기가 딱딱하지 않아 편안하게 일을 할 수 있지만, 지금은 아직 일에 익숙하지도 않고 남들 보다 시간이 오래 걸리는 작업 때문에 일에 대한 부담감이 크다. 「출근을 시작하고, 처음에는 많이 울었어요. 일본어의 부족함도 절실히 느꼈고, 한국과 영업을 하면서 한국어도 부족하다는 점을 많이 느꼈 거든요。」라면서 사회생활을 막 시작했던 신입사원의 어려움을 이야기했다.

지금 다니는 회사의 일이 자신의 적성과 맞는 일인지는 아직 확신이 없지만, 이 회사의 일을 배우면서 자신이 성장해 가고 있음을 느끼고 있다. 그래서 앞으로 3 년 정도 지금 일하고 있는 회사에서 확실하게 일을 배우고 사회를 배워 나가고 싶다고 한다. 하지만, 통신 업계이다 보니 정보가 빨라야 하는데, 그런 부분에서 잘 모르는 부분이 많아 걱정이 되기도 한다.

한국 친구들보다 일본 친구들이 더 많이 있다는 H 씨는 이제는 오히려 한국에 가면 더 불편함을 느낀다고 한다. 「이제 친구들도 모두 사회생활을 하니까 만날 사람도 없고요. 가족들과도 너무 오랫동안 떨어져 지내서 조금 시간을 보내다 보면 오히려 불편해져요. 지하철이나 버스도 잘 모르겠고, 길도 잘 모르겠더라고요.」라면서, 한국에서의 생활이 오히려 낯설고 어색하다고 했다. 일본은 자신이 힘들게 만들어 온 생활 터전인 만큼 더 애착이 가고 한국 보다 집같이 느껴 안심하게 된다고 한다.

◇ 일본에서의 생활 ◇

일본에서의 생활은 심리적으로 안정감을 느낀다. 오랜 기간 동안 혼자 살아오면서 느끼는 외로움은 어쩔 수 없지만, 한국인보다 조금 더 차분한 일본인들과 지내는 게 더 편안하다. 한국에서는 개인적인 삶이 힘들지만, 일본에서는 개인적인 삶이 가능하다고 생각하기에, 그런 점을 생각한다면 일본을 떠나 한국에 가는 것이 두렵기도 하다.

반면에, 일본이 외국인도 많고 외국인에 대한 대우가 많이 좋아졌다고는 들어 왔지만, 아직은 이곳에서 외국인은 외국인이구나 라는 생각을 할 때가 많다. 새로운 집을 구할 때 보증인을 구하는 어려움과 여러 행정 절차의 어려움 등은 때론 버겁게 느껴졌다.

◇ 신주쿠·신오오쿠보 ◇

H 씨는 회사 생활을 시작하고 직장 동료들과 함께 자주 신오오쿠보에 가게 되었다고 한다. 일본인인 직장 동료들이 한국 음식이 먹고 싶다며 자주 안내를 부탁해 가끔 식사를 하러 가고는 있지만, 사실 별로 가고 싶지 않은 곳이라고 한다. 일본에서 가장 한국같은 곳이라고는 하지만, 지저분한 거리와 정돈되지 않은 느낌 때문에 가끔 인상을 찌푸리게 된다.

예전에 비해 일본인들이 늘어나고, 한국 음식점들이 늘어남으로써 주위의 일본인 친구들에게 함께 신오오쿠보에 가자는 권유를 받게 되어 새삼, 신오오쿠보가 일본인들에게도 낯설지 않게 갈 수 있는 곳이 되었구나 라는 생각에 점차 조금씩 친근감을 느끼는 중이라고 한다. 하지만, 신오오쿠보의 분위기가 한류 붐의 일환으로만 치우지는 것 같으며 작은 아쉬움을 표현했다. 「신오오쿠보를 보고, 신오오쿠보에 찾아가는 일본인들에게는 그 곳이 한국의 전부일지도 모르잖아요. 그런데 신오오쿠보는 한류와 음식점에만 치우쳐서 분위기가 너무 상업적으로만 변하고 있는 것 같아요. 그것보다는 일본인들이 신오오쿠보에 가되면, 한국 문화를 알 수 있고 한국 역사를 알 수 있는 곳이 되었으면 좋겠어요.」

그리고 한국인에게, 신오오쿠보는 일본에서 살아가는 한국 사람들을 위해 꼭 필요한 곳으로 존재했으면 좋겠다. 음식을 먹고, 술을 마시는 장소로만 존재 하는 공간이 아니라, 한국인들의 삶을 공유할 수 있는 공간으로 존재했으면 좋겠다고 생각한다. 외국에서 외국인으로서 살아가면서 힘든 점을 함께 공유하고, 서로 조언을 할 수 있는 커뮤니티가 가능한 장소로 발전했으면 좋겠다.

◇ 앞으로의 계획 ◇

회사에 입사해서 사회생활을 시작한지 얼마 지나지 않았기에, 아직 확실한 미래의 계획을 세우지는 않았지만, 앞으로 3 년에서 5 년 정도 일본에서 사회 경험을 쌓은 후, 다시 한국으로 돌아가고 싶다. 가족들과 함께 살아보고 싶기도 하고, 일본에서 쌓은 사회 경험을 바탕으로 한국에 돌아가서 다시 한번 도전해 보고 싶다.

다른 한편으로는, 한국과 일본이 아닌 다른 영어권 국가에서 다시 영어 공부를 시작해 보고 싶은 마음도 있다. 사회생활을 시작해 보니, 일본어보다는 영어의 중요성이 더 많이 느껴지기 때문이고, 더 넓은 세상에서 새로운 경험도 해보고 더 많은 곳을 여행해 보고 싶다. 미국이나 다른 영어권 국가에 가게 된다면, 영어 공부와 함께 인재 개발에 관한 공부를 다시 해 보고 싶지만, 부모님이 반대하실 것 같아 실현성이 가장 낮은 꿈이라고 생각한다.

◇ 인터뷰를 통해서 ◇

이번 인터뷰를 통해서 H 씨 이외에 일본에서 살고 있는 한국 사람들의 살아가는 모습을 알고 싶다고 한다. 사회생활에 익숙치 않고 회사생활에도 모든게 서툰 신입 사원으로 지내고 있지만, 다른 한국인들이 어떻게 일본에 와서 어떤 과정을 거쳐 살아 왔는지 또 어떤 꿈을 안고 일본에서 살고 있는지 많은 이야기를 듣고 싶다고 한다.

<インタビュー 16（日本語訳）>

Hさん（20代中盤、女性）「韓国に帰るための日本での就職」

2011年8月17日、京畿道水原出身、会社員、滞在歴6年

インタビュアー：李 恵美（インタビューは韓国語で行われた）

Hさんは1986年生まれ、京畿道水原出身である。現在24歳のHさんは、19歳のとき、一人で日本に留学に来て大学卒業後就職した。日本の通信会社に新入社員として堂々と社会生活を始めたHさんを紹介したい。

◇ お母さんの薦めで日本に留学 ◇

Hさんは、1男2女の長女として生まれた。小さいときからお爺さん、お婆さん、お父さん、お母さん、兄弟の大家族といっしょに暮らしてきたHさんは、子供のときから絵を描くのが好きで、将来には美術関連の仕事をするのが夢であった。高校までは美術大学に行くために勉強をしてきたが、大学入試に失敗して、お母さんの薦めで日本への留学を決心することになったそうだ。Hさんのお母さんは、自立心が足りず臆病だったHさんに、浪人するより外国への留学を薦めた。美術大学で夢を実現したかったHさんは韓国で浪人したいと粘ったが、お母さんの「才能がないのは認めて、より広い世界で一人で新しい可能性を試して」という説得に、結局留学を決めることになった。

2005年、Hさんは長野県に住む親戚の所ところにお世話になって2年間日本語学校に通った。母方の親戚であるお婆さんは、日本人と結婚していたが、子供がなく、Hさんを娘のように可愛がってくれた。しかし、慣れない異国で、親戚とはいえ親しくない人と暮らすことはかなりつらい経験だった。「そのお婆さんは、日本人と結婚して20年近く日本で暮らしている人だから…。日本の文化と生活に不慣れだった私には毎日がつらい日々でした」と、当時のことを語ってくれた。

大学入試を準備しているとき、また美術大学にトライしてみたい気持ちも残っていたが、「美術大学に行くなら、学費と生活費を支援できない」という親の反対で結局その夢は諦めることになった。今はその決断に導いてくれた親に感謝しているという。

◇ 大学生活と就職、新入社員になるまで ◇

Hさんは日本のある私立大学に入った。大学では国際学部で開発途上国について勉強した。4年生のとき、他の日本人の同期といっしょに就職準備にとりかかり、今の会社に合格して働いている。今の会社は2011年1月に内定をもらって、4月から働き始めた。

大学生になってからは一人暮らしをしてきた。お母さんが、独立心がなく、臆病だから心配していたように、初めての一人暮らしは寂しかった。「口数が少ない方だけど、家で壁に向かって独り言をしたりした」と当時を振り返るが、今は一人暮らしが長くなって慣れてきたという。

卒業を前に、韓国に帰って就職することも考えたが、日本語の勉強も足りないと感じ、まだ韓国に帰ることは時期尚早だと思った。「韓国に帰るための日本での就職かな」、と言い、日本でもう少し経験を積んでみたいという。「大学を卒業する直前になって、自分の実力の足りなさを自覚して、日本で大学を出たという

ことだけでは韓国で就職活動に成功する自信がなかった」と、日本で就職することを決めた理由を説明してくれた。また、今までずっと学生だった自分にどんなことができるのかについても、自分を試してみたいともいった。お父さんは韓国に戻って家族みんなで暮らすことを希望したが、お母さんは最後までHさんを信じて支援してくれたそうだ。

4年生から始めた就職活動は思ったほど簡単ではなかった。いっしょに就職を準備していた韓国人の同期のなかには、日本での就職を諦めて韓国に帰った人も多かった。最後まで諦めないでベストを尽くして就職活動を続けた結果、2011年1月、今働いている会社から内定をもらうことができたので、一所懸命社会生活をしてみたいという。

3月11日の震災後韓国に里帰りしていたHさんの親は、愛娘が地震と放射能の心配が残る日本に戻ることに反対した。Hさんも韓国で報道されていたニュースや新聞を見て、日本に戻ることにに対して少し不安を感じていたが、つらい就職活動でもらった内定を簡単に諦めたくなかった。その意思を親に伝えて、親も、これまで苦労して頑張ってきたHさんを理解して応援してくれたそうだ。

2011年4月からHさんが新入社員として働いている会社は日本の通信会社である。携帯とWiFi等のデータ通信機器をレンタルする会社で、社員は200名程度である。Hさん以外にも、韓国人、在日韓国人、中国人、朝鮮族、フランス人等、外国人が多く働いているそうだ。この会社でHさんは、国際業務チームで韓国との営業を担当している。韓国企業との取引では韓国語を使うが、会社ではすべて日本語で話す。

まだ業務に不慣れで毎日先輩たちに怒られながら仕事を学んでいる。幸い会社の雰囲気がそれほど固くないため明るい環境のなかで仕事ができているが、まだ熟練度が低く業務処理が人より遅いため、周りに迷惑をかけているというストレスを感じるという。「働き始めの頃はよく泣きました。日本語が足りないことを切実に感じたし、韓国と営業をしていて、母国語の韓国語もまともに使えていないことを感じたからです」と、社会生活したての新入社員としての苦労を語った。

Hさんは、今の会社の仕事が自分の適性に合っているかについてはまだ確信は持っていないが、この会社で仕事を通して自分が成長していることを感じているという。そのため、今後3年程度は今の会社で社会人としての基礎をはっきり学んで社会も勉強していきたいという。しかし、変化の激しい通信業界のため、早い情報収集能力が必要だが、まだわからないことが多すぎて心配のようだ。

韓国人の友達より日本人の友達が多いというHさんは、今は韓国に行くとは不便を感じる人が多いそうだ。「もう友達も社会人になっているからなかなか会えないし、家族とも離れていた時間が長いせいか、いっしょにいてもすぐ気まづくなります。地下鉄やバスの路線も疎くなって、道もよくわからなくなりました」と、韓国の生活がむしろ不便で不慣れに感じることもあるという。日本では自分が苦労して作ってきた生活の場だからこそなのか、愛着が持てて、韓国の実家より日本の方が自分の家に思われて安心感があるという。

◇ 日本での生活 ◇

日本での生活は心理的に安心感を覚える。長いこと一人暮らしをしていて感じる寂しさは仕方ないが、韓国人より落ち着いている日本人といえると楽に感じるこ

とが多い。韓国ではプライバシーを保つことが難しいけど、日本ではプライバシーを確保できると思うから、それを考えると日本を離れて韓国に戻ることが少し怖くなったりするという。

反面、日本には外国人も多く待遇もよくなったと聞いているが、まだここは外国に違いないし自分は外国人だと思わされることも多いという。新しいアパートを探すとき保証人を見つける苦労と様々な行政手続きがその一例だそうだ。

◇ 新宿・新大久保 ◇

Hさんは、社会人になってから職場の同僚とよく新大久保に行くようになったという。日本人の同僚が韓国料理が食べたいと、よく案内を頼まれるので、たまにいっしょに行っているが、正直あまり行きたくないという。日本で最も韓国的なところと言われるが、汚い街と整頓されていないイメージが強く、目に余るときがあるそうだ。

以前に比べて日本人の往来が増えて、韓国料理屋が多くなって周りの日本人に、いっしょに行きたいまたは紹介してほしいと誘われると、新大久保が日本人にも気軽に行ける場所になったなと思い、少しずつ親近感がわいてきているそうだ。しかし、新大久保の雰囲気が、韓流ブームだけに偏っているようで残念と思うことがあるという。「新大久保を訪れる日本人には、新大久保は韓国の代わりかも知れないじゃないですか。しかし、新大久保は韓流とレストランだけで商業的すぎています。それよりは、新大久保に行けば、韓国の文化と歴史に接することができるようになってほしいです」。

またHさんは、新大久保が、日本で暮らす韓国人になくてはならない場所になってほしいという。料理を食べ、酒を飲むだけの空間ではなく、韓国人同士のライフを共有できる空間になってほしいという。外国で外国人として暮らす悩みを共有して、お互い助言しあえるコミュニティとして発展してほしいそうだ。

◇ これからの計画 ◇

社会人になって日が浅いためまだ未来の計画と言えるものは持っていないが、これから3年か5年程度日本で経験を身につけてから韓国に戻りたいと考えているという。家族といっしょに暮らしたいし、日本で培った社会経験をもとに韓国で再チャレンジしてみたいという。

一方、韓国でも日本でもない英語圏の国で再度英語の勉強にトライしてみたいという希望もある。社会人になってみたら、日本語よりは英語の方が重要度が高いことがわかったし、もっと広いところで新しい経験を積んで、いろんなところを旅してみたいという。アメリカか他の英語圏の国に行くことができれば、英語といっしょに人材開発について勉強してみたいが、親が反対すること間違いないなからあまり期待していないそうだ。

◇ インタビューを終えて ◇

今回のインタビューを通して、Hさん以外に日本に住んでいる韓国人たちの暮らしについて知りたくなったという。まだ社会生活に慣れていない新入社員ではあるが、他の人たちが、どん背景で日本に来て、どんな過程を経て暮らしているのか、またどんな夢を抱いているのか知りたくなったという。

<인터뷰 17>

CH 씨 (20대 중반 · 여성)

「어느 곳보다 나에게 잘 맞는 일본 생활」

2011년 8월 22일, 서울 출신, 대학원생, 일본체재 2년 반

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

CH 씨는 1987년생으로 서울출신이다. 2009년 4월부터 일본의 국립대학의 대학원에 다니고 있다. 현재 아르바이트로 동경의 한 한국어 교실에서 매주 1-2회 정도 일본인에게 한국어를 가르치고 있는 CH 씨를 소개하고자 한다.

◇ 일본으로의 유학 ◇

CH 씨가 일본을 처음 접하게 된 계기는 일본의 아이돌 그룹인 아라시의 팬이 되면서 부터이다. 고등학교 시절 친구로부터 우연히 아라시를 알게 되었고, 굉장한 팬이 되었다고 한다. 아라시의 팬이 되고 부터는 자연스럽게 일본에 관심을 가지기 시작했고, 일본어 공부도 시작했다.

한국에서는 법학과에 입학했던 CH 씨는 입학 후에 법학과와 일본어학과의 복수 전공을 선택했다. 아라시의 팬이 되었던 것을 계기로 자연스럽게 일본어 공부를 시작했는데, 시작해 보니 재미있고 처음부터 체계적으로 일본어 공부를 시작해 보고 싶었다. 대학 1년 여름방학부터, 일본 여행을 자주 해왔던 CH 씨는 일본 여행을 통해서 자신이 일본의 생활과 잘 맞는다고 느꼈다고 한다. 「일본의 친절함이 너무 좋았어요. 그리고 항상 차분하다는 느낌때문에 일본을 더 좋아하게 된 것 같아요.」

일본어 이외에 중국어 공부도 해오던 CH 씨는, 운 좋게 대학 1학년 때는 중국으로 6개월 동안 교환학생도 다녀 온 경험이 있다고 한다. 6개월 동안의 중국에서의 생활은 너무 힘들었다고 한다. 「가장 힘들었던 건 입에 잘 맞지 않는 음식이었어요.」라며, 한국과 일본의 요리에 비해 중국의 요리는 향이 강하고 기름진 음식들이 많아서 힘들었다고 했다. 반면, 일본 음식 중에 아직 낯뜨나 우메보시같은 음식은 먹지 못하지만, 깔끔하고 담백한 맛이 많은 일본 음식은 대체로 다 좋아하는 편이다.

어렸을 때부터 해외 유학을 꿈꿔오던 CH 씨는 중국의 교환학생을 마치고 한국에 돌아와서부터는 일본으로의 유학을 더욱 확고하게 결정했다. 일본어만큼 중국어 공부는 재미있지도 않았고 적성에 맞지 않았기 때문에 교환학생 후에도 중국어 실력은 많이 늘지 않았다. 그리고 중국보다는 일본이 자신에게는 더 맞는 나라라고 느꼈기 때문이라고 한다. 그래서 전보다 더 적극적으로 일본어 공부를 시작했다. 부모님께서도 당시 외동딸이었던 CH 씨의 유학 결정을 적극적으로 지지해 주셨다. 「더 넓은 세상에서 많은 경험을 하면서 꿈을 크게 가지고 살아라」라며 어렸을 때부터 부모님이 항상 해주시던 말씀 또한 CH 씨의 유학 결정에 큰 영향을 끼치게 되었다.

대학 3학년을 마친 뒤, 조기 졸업을 하게 된 CH 씨는 출신 대학 교수님의 소개로 현재 다니고 있는 대학에 연구생으로 왔다. 연구생 때는 대학원 입시 준비에 많은 스트레스도 받고 힘들었지만, 다행히 입학을 해서 열심히

대학원 생활을 하고 있다. 지금은 석사 과정 2 학년생으로 석사 논문을 쓰면서 같은 대학원의 박사과정 진학을 위해 준비 중이다. 「박사과정에 합격해서, 박사과정을 시작하게 된다면 앞으로 최소한 3-5 년 정도는 일본에 더 남아 있어야 하겠죠.」라며, 박사과정을 마친 후에도 가능 하다면 일본에 남아 일자리를 구하고 싶다고 했다.

현재, CH 씨의 남자친구는 같은 대학원에서 함께 공부하고 있는 중국인 유학생이다. 두 사람은 결혼을 약속했으며, 처음에는 국적이 다른 사람과의 결혼을 반가워하지 않았던 부모님도 지금은 CH 씨의 남자친구를 좋아하신다. CH 씨의 남자친구는 동경에 있는 한 기업에 내정을 받아 2012년 4월부터는 사회생활을 시작할 예정이다. 남자친구 역시, 중국으로 돌아가지 않고 일본에서 자리를 잡고 계속 살기를 희망하고 있다고 한다. CH 씨의 부모님과 남자친구의 부모님 모두, 두 사람의 계획을 믿고 지지해 주고 있다. 「처음에는 남자친구가 일본에서 사회생활을 몇 년 하고 중국으로 함께 돌아가자고 했었어요. 하지만, 제가 오랜 시간 설득을 해왔죠. 지난 봄방학 동안 서로 부모님에게 인사를 드렸는데, 남자친구 부모님이 중국에 돌아오는 것보다 둘이 결혼해서 함께 일본에서 사는 게 어떠냐고 먼저 말씀해 주시더라고요.」라며, 행복한 미래에 대한 계획을 이야기했다.

◇ 일본에서의 생활 ◇

일본의 차분하고 조용한 생활은 편리함이 더 많고, 본인에게 잘 맞다고 생각한다. 한국 대중교통 중에서 버스를 이용하면, 너무 빠르고 험한 운전 때문에 조금 무섭게 느껴지는 데 비해 일본 버스 기사들은 안전 운전을 하는 편이라며, 정류장 앞에서 버스가 정지를 해야만 승객이 차분하게 자리에서 일어나는 일본 버스의 습관은 한국과는 많은 차이를 느낀다고 한다. 한국도 많이 변하고 있지만, 정류장에 버스가 도착해서 정지하기 전에 승객이 자리에서 일어나 내릴 문 앞에서 내릴 준비를 하고 있어야 하는 한국의 습관은 너무 위험한 것같다면서, 「한국에서, 일본처럼 차분하게 자리에서 일어나 내릴 준비를 하면 운전수가 화를 내요.」 생활 일부분에서 느껴지는 한일간의 차이를 얘기했다.

반면에, 한국보다 느린 일본의 행정 처리가 불편하다. 모든 일을 꼼꼼히 처리하는 일본인들의 습관은 본받을 만하지만, 가끔은 효율적으로 일을 하지 않는다는 느낌을 받을 때가 많고 조금 답답하다. 그리고 일본인들의 상냥한 것같지만 조금 차가운 듯한 면을 얘기하며, 「한국인들은 쉽게 가까워질 수 있잖아요. 하지만 일본인들은 아무리 노력해도 가까워지기가 쉽지 않고, 가까워져도 가끔 차갑게 느껴질 때가 많아요.」라고, 유학생으로서 가끔 외로움을 느끼고 있다고 한다.

◇ 신주쿠·신오오쿠보 ◇

아르바이트로 2 명의 일본인에게 한국어를 가르치고 있는 CH 씨는 일주일에 한번 정도 신주쿠·신오오쿠보에 간다. 한국어 수업을 마친 뒤 학생들의 희망으로 학생들과 함께 한국 요리를 먹기 위해 가는 것이다.

2005 년 처음 일본에 여행을 왔을 때도, 신오오쿠보에 있는 한국인이 운영하는 민박집에서 머물렀다. 그 당시, 신오오쿠보는 단지 조용한 일본

주택가라는 느낌을 받았다. 「일본의 조용한 주택가에 한국어 간판이 많구나」라며, 일본의 다른 곳들 보다 한국어 간판이 많이 보였지만, 요즘처럼 사람도 많지 않았고 조용한 분위기 였다고 한다. 하지만, 요즘 느끼는 신오오쿠보는 상업적인 요소만 존재하고 문화적인 요소는 하나도 존재하지 않는 것 같다. 예전에 느끼던 조용한 마을의 이미지는 하나도 남아있지 않는 것 같다고 한다.

학생으로서 신오오쿠보 한국 식당 음식의 가격은 많이 부담스러운 편이다. 함께 신오오쿠보에 가는 일본인들이 떡볶이와 삼겹살을 좋아해 자주 먹으러 가고 있지만, 항상 「아, 너무 비싸다.」라는 말을 하게 된다. 음식의 맛과 서비스의 질이 비슷한 가격의 다른 일본 식당에 미치지 못하는 아쉬움을 느끼고 돌아온다.

한류 덕분에 본인도 일본인에게 한국어를 가르칠 수 있는 기회를 가지게 되었지만, 한류가 인기가 있다고 해서 신오오쿠보의 거리 문화 자체가 한류 스타 위주로만 바뀌어 가는 것은 일본인에게도 상업적인 이미지로만 비치는 것 같아 걱정이 된다. 신오오쿠보는 단지 개인 사업자의 이익을 위해서만 변해가고 있는 게 아닌가 싶다.

요코하마의 차이나 타운은 일본에서 중국 문화를 대표할 수 있는 거리로, 하나의 유명한 관광지라고 알고 있다. 것처럼 신오오쿠보도 일본에서 한국을 대표할 수 있는 하나의 관광지로 발전해 갔으면 좋겠다. 그러기 위해서는 너무 한류에 의존하지 않고 한국의 인사동과 같이, 한국의 전통적인 분위기를 느낄 수 있는 소품을 파는 가게, 그리고 거리의 작은 한국 전통 문화 공연 같은 것들을 볼 수 있는 장소가 된다면 신오오쿠보도 일본에서 좋은 관광 명소가 되지 않을까 생각한다.

<인터뷰 18>

J 씨 (30 대 후반 · 남성)

「일본에서 시작한 사회생활, 이제는 이 사회의 일원으로…」

2011 년 8 월 24 일, 전라도 광주 출신, 회사원, 일본체재 14 년

인터뷰: 이혜미 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

J 씨는 1973 년생으로 전라도 광주 출신이다. J 씨는 부인 그리고 두 아이들과 함께 치바현에 거주중이며, 일본에서는 14 년째 생활 중이다. 현재 스웨덴계의 전자통신설비 회사에서 근무하고 있는 회사원인 J 씨를 소개하고자 한다.

◇ 일본에서의 어학연수 ◇

J 씨는 91 학번으로 서울에 있는 한 사립대학의 전자공학과에 재학중이었다. 제대 후, 대학 3 학년 말에 한국의 대기업인 H 전자에 내정을 받았던 J 씨는 그대로 그 회사에 취직을 하기보다는 잠시라도 새로운 도전을 해보고 싶었다. 당시 주위의 모든 친구들이 미국이나 영어권 국가로 어학연수를 선택했던 반면, J 씨는 남들이 잘 선택하지 않았던 일본으로의 어학연수를 선택했다. 3 개월의 짧은 어학연수였지만, 처음으로 해보게 된 외국 생활이었다. 「어학연수를 가는 거니까 일본어도 잘 못해서… 일본에 가면 굶어 죽을지도 모르겠다는 생각에 가져올 수 있는 건 다 가져왔어요.」라며, 여러 가지 걱정때문에 쌀과 반찬 등 최소한 한달 정도 먹을 수 있는 모든 식료품까지 챙겨왔다고 얘기했다.

당시 어학원의 기숙사에 살고 있었던 J 씨는 일본의 오래된 목조건물인 기숙사 생활에 여러가지로 불편함을 느꼈다. 하지만, 3 개월 동안 지내면서 느끼게 된 일본에서의 생활은, 언젠가 다시 와서 보다 더 많은 경험을 해보고 싶은 계기를 마련해 주었다고 한다.

◇ 일본에서 시작된 사회생활 ◇

어학연수 후, 한국에서 대학 4 년을 보내면서, J 씨는 다시 돌아가서 많은 경험을 해보고 싶었던 일본으로의 취업을 준비했다. 일본으로의 취직은 생각보다 쉽게 이루어졌다. 전공을 살려, 일본의 중소기업에 취직이 결정되었다. 전자제품을 만드는 중소 설비 업체로서 직원은 100 명 정도의 작은 회사였지만, J 씨는 한국에서 대기업의 취직을 포기하고 일본에서의 사회생활을 선택했다.

J 씨는 99 년도에 일본에서 첫 사회생활을 시작했다. 하지만, 처음 들어간 회사에서 장래에 대한 불안감을 느끼기 시작한 J 씨는 2 년 동안 근무한 뒤, 다른 일본계의 전자 회사에 전직했다. 「당시 입사 동기 중에 한국인이 한 명 있었는데, 몇 개월 함께 일을 하다가 다른 외국계 회사로 옮겼어요. 그 사람을 보고 조금 자극을 받기도 했지만, 조금 더 큰 회사로 옮기고 싶은 욕심이 생기더라고요.」. 2 번째 회사지에서도 1 년 정도 일한 뒤, 다시 전직을 하게 된 J 씨는 한국계 대기업의 자회사에서 근무를 하게 되었다. 한국의 모바일 통신사업자 계열이었던 3 번째의 회사는 국제전화 서비스를 개발하는 회사로 국제로밍 서비스를 담당하는 회사였다. 그 곳에서 5 년간 일한 뒤,

다시 전직을 했고 지금 다니고 있는 곳은 스웨덴계의 회사로 전자통신 설비회사이다. 일본 자회사의 직원은 2000 명 정도이고, 글로벌 기업이기 때문에, 전체적으로 보면, 직원은 5 만-6 만 정도 된다.

J 씨가 현재 근무하고 있는 회사는 데이터 통신의 전반적인 설비를 담당하고 있다. 특히, J 씨는 이 회사에서 비상대책과 관련된 업무를 담당하고 있기 때문에, 지난 3 월 11 일 대지진 직후에는 몇 주 동안 집에도 돌아가지 못한 채 비상 업무를 해야만 했다.

◇ 가족과 자녀교육 ◇

현재, 부인 그리고 두 아이들과 함께 치바현에 거주중인 J 씨는 2 년 전에 가족 모두 영주권을 받아 일본에 재류중이다. 부인과 2000 년, J 씨가 일본에서 사회생활을 하고 있을 때 인터넷을 통해 만났고, 부인도 일본으로 오게 되면서 본격적으로 연애를 시작했다. 2002 년 결혼을 했고, 현재는 6 살의 아들과 5 살의 딸이 있다. 아이들은 모두 일본에서 태어났다.

일본에서 태어나고 자란 아이들의 한국어 교육이 제일 걱정이다. 아이들에게도 한국어가 모국어가 되기를 바라고 있지만, 일본 유치원에 다니고 있는 아이들은 한국어로 어느 정도 대화는 가능해도, 읽고 쓰는 교육을 시키기에는 부모의 노력 만으로는 힘들다고 느끼고 있다. 집에서 가족들간의 대화는 모두 한국어로 하고자 노력하고 있지만, 한국어로 물어봐도 일본어로 대답을 하거나, 모든 대화를 일본어로 하는 아이들을 보면, 한국어 교육의 필요성을 많이 느끼고 있다. 「주말마다 신주쿠 에서 하고 있는 한국어 교실이나 한글 교실들도 이곳저곳 다니면서 한국어를 가르쳐 봤지만, 별로 효과가 없더라고요.」 라면서, 외국에서 태어나고 자란 아이들에게 한국어를 모국어로 교육하는 부모의 어려움을 이야기했다.

내년에 초등학교에 입학해야 하는 큰 아이와, 내후년에 입학해야 하는 작은 아이 모두 동경한국학교에 보낼 계획이라고 한다. 주위에서 동경한국학교에 대한 좋지 않는 평도 많이 듣고 있지만, 영어 교육을 중심으로 수업을 하는 방식과 높은 교육열, 그리고 무엇보다도 일본인 학교에 비해 한국어를 접할 수 있는 기회가 많다는 점을 고려해서 동경한국학교에 보낼 것을 결정했다. 지금은 치바현에서 3 년 전에 구입한 맨션에 살고 있는 J 씨는 「아이들을 동경한국학교에 보내려면, 학교 가까운 곳으로 이사를 해야 하지만, 가급적이면 신주쿠의 동경한국학교 근처는 피하고 싶어요.」 라면서, 한국인들이 너무 많은 곳은 오히려 불편한 점이 많이 때문에 주재원 가정이 모여 살고 있는 동경한국학교 주변은 가급적 피해서 이사를 하고 싶다고 했다.

하지만, 두 아이의 중고등학교는 동경 내에 있는 외국인학교에 보내거나 영어권 국가로 유학을 보낼 계획이라고 한다.

◇ 신주쿠 ・ 신오오쿠보 ◇

신오오쿠보에는 적어도 두 달에 한번 정도 가고 있다. 항상 친구들과의 술모임으로 신오오쿠보에 가지만, 신오오쿠는 언제든지 마음이 편안해지는 장소이다. 눈앞에 보이는 한국 간판들과 자주 마주치게 되는 한국인들, 그리고 한국에 호기심을 가지고 있는 일본인들이 찾아주는 곳이기에 언제나

친근감을 느끼는 장소이다.

97 년도 일본에 처음 왔을 때, 일본어가 잘 통하지 않았기 때문에 한국인 미용실에 가기 위해 신오오쿠보를 찾았다. 그때도 신오오쿠보에는 한국 식당들, 조그마한 한국인 병원, 한국인 미용실, 그리고 한국 식품점들... 지금과 비교하면 굉장히 작은 규모이고 적은 수 였지만, 최소한 갖추어야 할 것들은 갖추고 있는 장소였다.

2002 년 부터, 한국계 회사에 다니기 시작 했을 때부터 한국인들과의 모임이 많이 생기기 시작했고, 자연스럽게 신오오쿠보를 찾기 시작했다. 2002 년과 지금의 신오오쿠보는 많은 변화는 없지만, 지금의 신오오쿠보는 식당들이 많이 늘어나면서 선택할 수 있는 메뉴가 다양해졌다. 갑작스럽게 생긴 큰 변화는 없지만, 매번 새롭게 조금씩 변해가는 장소라고 생각한다.

신오오쿠보에 대해 항상 아쉽다고 생각하는 것은, 단지 먹고 마시고 놀자는 분위기라는 점이다. 요코하마의 차이나 타운은, 먹는 것 이외에 문화도 접할 수 있는 곳인데 반해, 신오오쿠는 코리아 타운이라고 내세울 수 있는 문화적인 면이 결여되어 있다. 신오오쿠보를 오고가는 일본인들 뿐만 아니라, 일본에 살고 있는 다른 외국인들 에게도 「차이나 타운 하면 요코하마, 코리 아타운 하면 고기집, 막걸리, 먹는 것, 먹고 노는 것이라고 생각되어 지는 게 아닌가 싶어요.」라며, 장사를 위해 팔아야만 하는 문화가 아니라 보여줄 수 있는 문화를 조금 더 중요시했으면 좋겠다는 의견을 들려 주었다.

지금은 먹고 즐기는 것이 신오오쿠보 문화의 주류가 되어 있지만, 신오오쿠보에 살고 있는 한국인들의 노력 뿐만이 아니라, 일본정부에서 신오오쿠보를 코리안 타운으로 발전할 수 있도록, 문화공연시설 등 한국 문화를 체험할 수 있는 시설들을 지원해 줬으면 좋겠다.

◇ 일본에서의 생활과 앞으로의 계획 ◇

14 년 전, 일본에 처음 왔을 때와는 다르게 일본사회에서 한국인으로서 받는 차별은 거의 없어졌다. 예전에는 한국인이라고 먼저 앞서서 말하고 싶지 않았지만, 지금은 반대로 한국인이라고 말하는 것이 아무렇지도 않다. 물론 아직도 행정적으로 조금의 불편함이 남아 있긴 하지만, 일본이라는 사회는 한국과는 달리 외국인에 대한 차별이 적고, 일본인과 비교적 동등한 입장에서 생활할 수 있는 나라라고 생각한다.

일본생활에 큰 어려움과 불편함을 느끼지는 않는다. 하지만, 일본에 생활하면서 다른 일본인들과 똑같이 세금을 내면서 함께 생활을 하고 있는데, 투표를 할 수 있는 권리가 없다는 것에 아쉬움을 느낀다. 물론 외국인의 한표가 큰 영향을 끼치지지는 않겠지만, 일본이란 나라와 개인이 살고 있는 지자체를 이끄는 사람에 대해서 투표를 할 수 없다는 것은 앞으로도 변해야 할 필요성이 있다고 생각한다.

앞으로, 아이들이 크고 퇴직을 해 노후를 맞이하게 되면 한국과 일본이 아닌 제 3 의 국가로 가기를 희망한다. 일본에 남아 있고 싶거나 한국에 돌아가고 싶은 마음이 없는 건 아니지만, 가능하다면 동남아시아쪽의 비교적 물가가 저렴한 국가에서 조금 여유로운 삶을 살고 싶다.

<인터뷰 19>

P씨 (40 대 · 남성)

「일본의 기업정신에 반해서 일본에 오게되고, 현재는 한일 관광 교류업을 하며, 좀더 깊은 문화 교류를 기획하는 사업가로」

2010 년 8 월 25 일, 전라남도 출신, 여행사경영, 일본체재 16 년째

인터뷰 담당 : 이호현 (인터뷰는 한국어로 이루어짐)

◇ 일본에 오게된 계기와 회사설립까지의 과정 ◇

한국에서 대학 졸업 후 입사한 회사에서 일본으로 해외연수오는 분들을 인솔하는 일을 맡았고, 그때 함께 일본의 여러회사를 견학하면서 일본에서 공부하고 싶다고 결심한 후, 1994 년 일본 유학 길에 오른다. 견학중에 동행해 준 현지통역원이 대부분 유학중인 대학원생들로, 그때의 인연이 계기가 되어 일본에 와서 석사과정을 밟는 중에 여러가지 통역 아르바이트를 소개받는 등 많은 도움을 받게 된다. 이런 계기로 자연스럽게 학교 공부중에 가이드 길에 들어서게 되고 현재 여행사를 경영하는 일에 까지 연결이 된것이다.

일본으로 유학오는 학생들이 거치는 과정이 대부분 똑 같겠지만, 저도 처음에 일본어 학교 마치고, 연구생으로 입학했고, 그 후 석사과정을 마치고, 박사과정을 준비하면서 2 년동안은 비자 문제 때문에 여행사에 근무 하면서 회사에서 비자를 받는다. 그때까지만 해도 현장에서의 통역 아르바이트만 했었는데, 회사에서 근무하면서 실제로 여행업에 관련된 실무를 배우게 되고, 여러 지인들의 도움으로 2008 년 현재의 여행사를 설립하게 된다.

2008 년 처음 서울때만 해도 회사운영이 괜찮았는데, 금융위기로 그해 10 월부터는 내리막길로 들어서고, 엔화의 급등으로 여행업에 많은 타격을 받았다. 그때는 한국에서 일본으로 오는 인바운드만 취급해서 회사재정이 바닥까지 갔는데, 사람이 죽어라는 법은 없는지, 금년초부터 한국의 여행사에서 제의를 받고, 방향을 바꾸어 일본에서 한국으로의 여행인 아웃바운드를 시작하게 되어 조금씩 일어서고 있다.

◇ 신오오쿠보의 매력 때문에 회사의 거점을 둔다 ◇

제가 굳이 조그만 사무실에 비싼 야청을 내면서 신오오쿠보역 앞에 사무실을 둔것은 많은 생각 끝에 결정한 것이다. 그 이유로는 일단 많은 사람들이 와야되므로, 교통이 편해야 해요. 신오오쿠보는 호텔맨들이 영업하다가 지나치면서 교통이 좋아서 내릴수가 있어요. 또 한국사람들이 일본에 오면 꼭 한끼 이상 한식을 먹게 되는데, 그게 쇼쿠안 도오리하고 오오쿠보 도오리 예요. 그래서 제가 그분들과의 컨택에서 움직임이 좋다는 거죠. 또한 호텔맨을 포함해서 그동안 저에게 도움을 줬던 여러 방문 기관의 일본사람들을 제가 초대하기가 좋아요. 신오오쿠보에 오시면 제가 맛있는 한국식당에서 밥 한번 대접하면서 접대하기도 좋아요. 예전에는 한국식당 가자고 하면 별로 안좋아했는데, 지금은 한류붐으로 오히려 더 좋아해요. 김치도 막걸리도 잘 먹고 좋아들 해요.

일본분들의 한국에 대한 인식이라던지, 신주쿠에 대한 인식은 누가 말할것도 없이, 이쪽 동네에 한류 물건 파는 가게만 봐도 눈으로 바로 확인

돼요. 신오오쿠보라는 곳은 외국인이 모여살던 동네지 일본인들이 이렇게 많이 관광이나 쇼핑을 하러 오는 장소가 아니예요. 근데 지금은 평일이나 주말 같은경우 일본분들이 너무 많아요. 따라서 한국과 연관된 일을 하기에는 신오오쿠보가 출발점으로 제격일거예요. 왜냐하면 많은 한국 사람들이 모여 살고있고, 서로 정보를 교환하며, 어려울때는 이 한국사람들에게 도움을 청할 수도 있고, 또 내가 도와줄수도 있어요.

이곳은 한국인사회의 커뮤니티가 형성된거죠. 따라서 처음의 모든 사업은 불안감이 적은 이곳에서 시작하려는 사람들이 많은것 같아요.

◇ 두 아이를 키우는 부모 마음은, 신오오쿠보의 교육적 환경을 재고려 ◇

저는 좀 특이한 케이스죠. 학업을 마치고는 처음엔 하찌오우지에 삶의 터전을 잡고 두 아이를 낳았어요. 그후 신주쿠로 옮겨 일하면서, 신주쿠의 구립초등학교와 보육원에 아이들을 맡기고, 한국인 가사도우미를 고용했어요.

아이들 학교문제도 한국학교와 일본학교를 두고 고민했는데, 지금은 일본학교를 보내길 잘했다는 생각을 많이해요. 그게 지나친 제 혼자만의 생각인지 모르겠지만, 한국학교는 들어가면서부터 애들끼리 경쟁이 심하잖아요. 한국식 교육을 그대로 하고, 부모들의 지나친 관심과 방과 후 과외랑 학원도 많이 다녀야 하는 실력위주 경쟁위주의 교육이잖아요. 근데 일본학교의 교육방식은 먼저 사람답게 살아갈수 있는 공중도덕과 질서를 강조하고, 항상 선생님들과 PTA 또는 개인상담을 통해서 아이들과의 관계를 많이 유지하려고 하는게 좋아요. 물론 학교를 자주 가야하는게 힘들지만, 애들의 학교생활에 대한 얘기를 듣고, 누구랑 어떻게 노는지, 애들 키우는데 많은 정보와 도움을 받아요.

하지만, 신오오쿠보라는 지역환경이 유흥가이다보니 어른들의 술취한모습, 여성들의 화려한모습, 욕하고 싸움하는등 안좋은것들이 애들눈에 많이 보여지다 보니 호기심을 넘어서서 그런것들을 흉내내는 등, 안좋은 방향으로 영향을 주는거 같아요. 특히 부모들이 다 일하느라 바빠서 귀가후에도 혼자있는 친구들이 많아요.

이러한 이유들로 더이상 이런환경에 두면 안되겠다는 결심을 했어요. 맹자엄마가 3번 이사를 했다고 하잖아요. 지금은 아다치구의 주택가에 있는 학교로 옮겼는데 밝게 친구들과 잘 지내고 학생수도 많아 서로 경쟁이 되다보니 공부도 열심히 따라하고 좋아요.

◇ 일본과 한국의 다른점을 고려한 장래의 계획 ◇

관광으로 잠시 일본에 오신분들은 잘 모르겠지만, 일본사람들이 얼마나 실력있고 무서운 민족인지 몰라요. 잠시 관광오셔서 일본사람들이 줄서 있는것, 친절하것, 깔끔한거 이런것만 보고 가잖아요. 그런데 실제로 생산 현장이나, 관리직 현장에서 일하시는 모습들을 보면, 정말 기계같이 일해요. 회사에 불만도 있겠지만 표출도 안하고 오로지 좋은 제품을 만들어야겠다는 그 목표하나로 일하는 모습들을 보면서 무서운 민족이라는 걸 느꼈어요. 한국은 자주 파업을 하잖아요. 저는 이러한 곳을 많이 보면서 한국사람들에게 이런 현장들과 종사자들의 모습들을 많이 알려주고 싶어요.

3 박 4 일의 짧은 관광여행이 아니라, 이 사람들의 실제 생활들, 그리고 자신들의 일에 희생하면서 열심히 하는 모습들을 알려주고 싶어요. 관광때 잠시보는 일본은 껍데기만 보는 거예요. 아마 여기서 10 년 넘게 사시는 분들은 저하고 대동소이 할거예요.

저는 일본에서 15 년이상 살아서 거의 일본화됐다고 봐도 과언이 아니예요. 지금 하고 있는 일이 한일간의 여행,관광, 연수지만, 앞으로 좀더 밀접한 관계로, 즉 걸만 홀터보는 관광이 아니라 한번을 와도 열번 20 번 온 사람들 보다 더 많이 알고 갈수 있도록 프로그램을 만드는게 제 계획이예요. 물론 일본 사람들이 한국 가서도 마찬가지예요. 그냥 한국 가서 불고기등 먹거리만 보는 것이 아니라, 한국사람들이 어떤 사람들이고 한국생활상이 어디까지가 깊이 있는 맛이 있는지를 알려주고 싶은거예요. 더 나아가서는 중국 한국 일본 이렇게 3 개를 묶는 문화컨텐츠 관광상품을 만들고 싶어요. 비슷하면서 조금씩 다른 문화를 서로 공유하며 체험할수있는 문화교류라던가, 학생들의 문화교육교류 등, 그런 컨텐츠 상품이 어떨까 고려중이예요.

애를 키우다 보니까 초등학교 학생들이 다른나라의 또래학생들이 어떻게 공부하는지, 어떤 놀이를 하는지 궁금해 하는걸 보고, 서로간에 교류를 통한 문화교육을 통해서 좀더 가까운 한일관계를 만들어가는 것이 이루어지게끔 하고 싶은것이 현 단계의 꿈이예요. 애들은 말이 안통해도 서로 그림이나 손짓발짓으로 잘 놀아요.

즉 말이 안통한다는 것은 처음뿐이지 서로간에 알고싶은 마음이 가장 중요하다며 미래의 사업계획에 대한 꿈을 들려주셨다.

<インタビュー 19（日本語訳）>

Pさん（40代・男性）

「日本の企業精神に惚れて来日し、現在は日韓の観光交流を、より深い文化交流として企画する事業家に」

2010年8月25日、全羅南道出身、旅行社経営、滞日16年目

インタビュー担当：李 埈鉉（インタビューは韓国語で行われた）

◇ 来日のきっかけと会社設立までの道のり ◇

韓国で大学卒業後に入社した会社では、日本に海外研修に来る方たちを引率するのが担当だった。その時、たくさんの日本の会社と一緒に見学しながら、「日本で勉強したい」と決心し、1994年日本に留学する事になる。見学中に同行した現地の通訳員のほとんどが留学中の大学院生たちで、その時の縁がきっかけとなって、来日してからも修士課程在籍中に色々と通訳のバイトを紹介してもらったりして助けられた。このような流れで自然とガイドの道に入ることとなり、現在の旅行社を経営する仕事にまでつながったという。

「日本に留学するほとんどの学生たちがたどる過程は大半似ている」というが、初めは日本語学校に通って、次は研究生として入学し、その後、修士課程を経た。博士課程を準備する2年間、ビザの更新の問題もあり、旅行会社に勤務しながら、会社で就労ビザをもらう。その時までは現場での通訳アルバイトはしていたものの、その他の業務に関しては会社に勤務して始めて学ぶようになる。たくさんの知人からの助けもあって、2008年現在の旅行社を設立した。

2008年、会社を始めた頃には運営も順調だったが、金融危機が来てその年の10月からは下り坂に入ってしまう。円高等の影響で旅行業は大きな打撃を受けた。その時までは、韓国から日本に来るインバウンドだけを扱ったが、会社の財政が底をつきかけた時、韓国の旅行社から、日本から韓国へと旅行するアウトバウンドを扱う仕事の誘いがあって、方向を変えた。これを始めてから、少しずつ持ち直している。

◇ 会社の拠点を置く町として新大久保の魅力 ◇

敢えて、高い家賃を払いながら新大久保駅前に小スペースの事務所を開いたわけは、たくさんのことを考えた末に出した結論である。その理由として、まず多くの方々に来られるように交通が便利でなければならない。そういう面で、新大久保は交通が便利で、ホテルマンたちが営業回り中にちょっと立ち寄ることができる。また、日本に来る韓国からの方たちは、必ず一回以上韓国料理を食べる。その場所の大半は職安通りと大久保通りである。そのため、韓国からのお客さんとのコンタクトを取るための動きに好都合の場所が新大久保である。

さらに、ホテルマンを含め、今まで色々と助けしてくれた様々な日本の方を招待するにも良い場所である。「新大久保に寄ってください。私がおいしい韓国食堂でごちそうしますよ」とも言える。

以前は、韓国食堂に行こうと誘うとあまり良い反応ではなかったが、今は韓流ブームのおかげで、むしろ喜ばれるようだ。「キムチもマッコリも好きで、みんな喜びますよ」と話からも十分想像できる。

日本の方たちの韓国に対する認識や新宿に対する認識は、この町で韓流グッ

ズを売る店を見るだけで、すぐに確認できる。従来、新大久保というところは、外国人が集まって住んでいた町であって、こんなにたくさんの日本人が観光やショッピングのために来る場所ではなかった。しかし、今は平日も週末も日本の人たちが溢れている。

このようなこともあって、「韓国と関連した仕事をするためには、新大久保が出発点として一番適している」と話していた。

なぜならば、多くの韓国人が集まって住んでいるし、お互いに情報を交換している。「困った時にはここにいる韓国人に助けを乞うこともできるし、自分が助けることもできる」という。ここは韓国人社会のコミュニティが形成されているのである。したがって、初めてやる事業のほとんどは、不安感の少ないここで始めようとする人が多いようだ。

◇ 二人の子どもを育てる親心から、新大久保の教育的な環境を再考慮 ◇

彼の場合、学業を終えて、最初は八王子に生活の基盤を置き、二人の子どもをもうける。その後、新宿に移り、働きながら、新宿の区立小学校と保育園に子どもを送る。家庭の事情もあり、家事と子守りを手伝ってくれる韓国人を雇って協力してもらいながら子育てをする。

子どもが学校に就学する頃、東京韓国学校と日本の小学校という二つの選択肢で悩んだが、今は「日本の小学校に送ったが、それが良い判断だったと思う時が多い」という。それは、「私の行き過ぎた思い込みかも知れないが、韓国学校は入学してから子ども同士の競争が激しい。現在の韓国式教育をそのまま行われていて、親たちの行き過ぎた関心と放課後にたくさんのレッスンや塾にも通わなければならない実力優先の競争中心の教育をしている」というのが大きな理由だという。

一方、日本の学校の教育方法は、「まず、人として生きていくための公衆道徳と秩序を強調していて、いつも先生たちとPTA、そして、個人相談を通して子どもたちとたくさんの関係を維持しようとするのが好きだ」という。勿論、学校に頻繁に行かなければならないのが大変だが、子どもたちの学校生活について話し合い、誰とどのように遊んでいるのか、子どもを育てることにおいて多くの情報とアドバイスをもらえるという。

しかし、新大久保という地域環境が歓楽街であるため、大人たちの酒に酔った姿、女性たちの派手な姿、悪口や喧嘩をする姿等、あまり良くない光景が子どもたちの目にたくさん入る。「好奇心を超えて、それらを真似したりする」という子どもによくない影響を与えている一面を話してくれた。特に、「親が働くのに忙しくて、放課後にもカギ子だったり、子どもたちだけで家で遊んだりする友たちが多い」という。

これらの理由もあって、これ以上こんな環境においたらいけないという決心をする。「孟子のお母さんが3回も引っ越しをしたとも言うでしょう。今は、足立区の住宅街に引っ越して、転校した学校で明るく友たちと仲良くしている」という。そこは、生徒数も多くて、お互い競争心も湧くようで勉強も頑張っているし、とても良いと語ってくれた。

◇ 日本と韓国の相違点を踏まえた将来の計画 ◇

観光で日本に来た方たちは良く分からないだろうが、日本の人々がどれほど実力があって、凄いい民族であるか、分からない。短時間の観光では、日本人がきちんと列を並んでいること、親切であること、きれいであること、こんなことだけを見て帰る。しかし、実際に生産の現場や管理職の現場で働く姿をみると、本当に機械のように働くという。「会社に不満もあるでしょうが、表に出さず、ひたすら良い製品を作るというその目標だけで働く姿を見ながら、怖い民族であることを感じた」という。韓国は頻繁にストライキを起こす。「私はこんなところをたくさん見学しながら、韓国の人たちにこれらの現場と従業員たちの姿をたくさん見せてやりたい。三泊四日の短い観光旅行ではなく、彼らの実際の生活、そして、自分を犠牲にしながら仕事に没頭している熱心な姿を見せてやりたい。観光の際に垣間見る日本はうわべだけ見ることだから」と語った。多分、ここで10年以上生活している方は、彼の意見に大同小異だろうと確信していた。

「私は日本で15年以上生活していて、ほぼ日本化されたと言っても過言ではない。今、やっている仕事が日韓の旅行、観光、研修だが、これからより密接な関係で、即ち、うわべだけをみる観光ではなく、一回しか来なくても、10回、20回来た人たちより多くのことを知って帰るようなプログラムを作ることだ」と彼の事業計画についても語ってくれた。

勿論、日本の人々も韓国に行って同じ状況である。「ただ韓国に行き、ブルゴギを食べる等のグルメ旅行になるのではなく、韓国の人とはどんな人たちで、韓国の生活状がどこまで深みのあるものであるかを知らせてやりたい。そして、中国、韓国、日本、3カ国を結ぶ文化コンテンツ観光商品を作りたい」という。似ていながらも少しずつ異なる文化をお互い共有しながら体験できる文化交流とか、学生たちの文化教育交流など、そのようなコンテンツ商品を考慮中であるようだ。

「我が子を育てながら、他の国の子どもたちはどのように勉強し、どんな遊びをするのかを気にしている子どもたちの様子をみて、お互いに交流を通じた文化教育をすることで、より近い日韓の関係を築くことができるようにさせたい」と思ったと語ってくれた。

子どもたちは言葉が通じなくても互いに絵や身振り手振りで良く遊ぶ。

つまり、ことばが通じないということは最初のことだけであって、互いに知りたいという心が一番大事であると未来の事業計画に対する夢を語ってくれた。

<인터뷰 20>

YJ 씨(20 대/여성) 「집주인 아저씨의 따뜻한 마음」

2010 년 9 월 14 일, 부산출신, 대학원 박사과정, 일본체재 10 년

인터뷰어: 오세연

◇ 약력, 가족 ◇

YJ 씨가 일본에 오게 된 데는 어머니의 영향이 컸다고 한다. “어머니가 45년 전에 일본에서 유학생활동을 하셨는데, 그때 어머니의 유학생활동은 너무도 힘들었지만, 자식이 생기면 일본에 유학을 보내서 공부를 시켜야겠다고 결심하셨다고 해요. 특별히 일본어 공부를 하라고 시키신 적은 없지만, 어릴 때부터 “너는 나중에 크면 일본으로 유학을 갈 거다.”라고 항상 말씀하셨어요. 어머니는 고등학교 때나 더 어릴 때 유학시키려 했는데 당시 상황이 그럴 수가 없어서...” YJ 씨는 언젠가 한 번쯤은 일본에 가겠다는 생각을 했지만, 당시의 유학에 대한 규제, 그리고 IMF 등 여러 상황 때문에 고등학교를 졸업하고 일본으로 유학 오게 되었다고 한다.

현재(2010 년) YJ 씨가 일본에 온 지 10 년이 지났고, ○○대학 박사과정에서 조직과 경영에 대한 연구를 하고 있다. 학부 입학 전부터 친언니와 같이 생활하다가, 도중에 친언니는 대학원을 졸업하고 현재 교토에서 일하고 있다. 그리고 미국에서 유학을 마치고 온 친오빠도 언니와 같은 회사에서 일하고 있다고 한다. YJ 씨는 학부 3 학년 때부터 일 년 반 정도 혼자 살다 몇 년 전부터는 고등학교 동창이 일본으로 유학을 와서 함께 살고 있다. YJ 씨의 일본에서의 유학 생활은 ‘의식주’ 중에서도 특히 ‘주’에 관한 일화가 있다고 한다.

◇ 주거에 관한 에피소드 ◇

지금 사는 곳은 요요기 근처다. 여기 집주인 아저씨를 만나게 된 후 일본 그리고 일본인에 대한 이미지가 크게 바뀌었다고 한다. 지금 사는 곳으로 이사하기 전에 그녀는 친언니와 함께 기숙사 생활을 했다고 한다.

YJ 씨는 처음 유학에 대해서 특별한 관심이 없었다고 한다. “어머니가 유학원을 통해서 알아봐 주셨고, 유학을 가더라도 한국사람이 많아야 적응이 빠를 거라는 생각이 들어 한국 유학생 기숙사로 갔어요. 그때 환율도 아주 비싸고 해서 학업뿐 아니라 아르바이트까지 열심히 생활하는 분들이 참 많았어요. 저도 마찬가지였지만, 자기 생활에 쫓겨 심적으로나 경제적으로나 여유가 없어 보이는 사람들이 많았어요. 타지 생활하며 자신을 돌봐 줄 부모님도 가족도 없는 상황에서 어떻게든 혼자 살아남아야 한다는 그런 느낌이라고 할까요. 그래서 서로 쉽게 친해지고 믿고 의지하기 보다는 경계하는 부분이 더 많았던 거 같아요. 경제적으로 힘든 사람도 좀 있는 편이라 도난 사건도 많았고...”라고 말하며 옛 일을 회상하는 YJ 씨에게 자세한 상황을 물었다. 당시 O 지역에 있던 기숙사는 몹시 오래된 건물에 시설도 열악했다고 한다. 3조반 정도인 2인실이 1인당 4만 5천 엔에서 5만 엔 정도의 집값과 광열비는 따로 내야 했다고 한다.

당시 일본 나이로 18 살이었던 YJ 씨는 기숙사에서 제일 어리다는 이유만으로 기숙사 사람들에게 주목의 대상이 되었다고 한다. 당시 일본

유학생은 주로 한국에서 대학을 졸업하거나 군대를 제대한 사람들이 대부분이라 그랬는지 자신을 두고 20 살(한국 나이)짜리가 도대체 뭘 알겠느냐 말하는 사람들이 많았다고 한다. 열악한 주거 그리고 생활 환경, 제대로 대화도 한 번 나눠보지 못한 사람들이 자신을 바라보는 시선을 비롯해 도난 사건 등을 겪은 후, YJ 씨는 일본 유학 생활에 대한 회의까지 느꼈다고 한다.

그러나 혼자 방을 구해 생활하는 것에 대한 어머니의 걱정을 덜어드리고자 다른 곳으로 옮기지 않고 계속 기숙사 생활을 했다고 한다. 그러다가 기숙사 자체가 사이타마 현으로 이사 가게 되어서 사이타마에서 학교(신주쿠)까지 통학을 시작했고, 사이타마에서 2,3 년 동안 통학하는데 애로가 많았다고 한다. 기숙사 근처 역에서 학교 역까지는 전철로는 25 분 정도밖에 걸리지 않지만, 기숙사까지 역까지 자전거로 20 분, 전철 편성 시간 때문에 한번 전철을 놓치면 수업에 한 시간 정도 늦게 도착할 때도 있었다. 그래서 틈틈이 시간이 날 때마다 부동산 앞에 붙어진 맨션, 빈방 등의 정보를 체크 하곤 했다고 한다. 때마침, 친언니가 대학원을 졸업하고, 기숙사 계약 만료 기간이 되어, 학교에서 운영하는 주택센터를 찾았다. “그냥 별 기대 없이 가봤는데 정말 마음에 드는 곳이 나와 있더라고요, 집도 넓고 지어진 지 얼마 되지도 않았고, 가격도 시세보다 많이 싸어요. 집주인한테 연락해서, 그날 밤 7 시 정도에 바로 한국 친구 두 명이랑 같이 집을 보러 갔어요. 직접 보고 나니 이 집에서 꼭 살고 싶다는 생각을 하게 됐죠. 그리고 어떻게 이렇게 좋은 집을 싸게 빌려 줄까 궁금하기도 했고요. 나중에 알고 보니 집주인 아저씨가 의학부 입시 전문학교를 운영하시는 분인데 국제 의료 공헌에 관심이 많으셔서 일부러 집을 지으실 때 1 층 건물 면적의 3 분의 1 정도를 유학생들에게 빌려 주려고 따로 지으신 거래요. 돈벌이를 위해 집을 빌려주는 게 아니라, 다른 뜻이 있으신 거였죠. 그렇게 계약을 하고, 3 일 만에 바로 이사했어요. 여기에서 산 지 5 년쯤 됐어요.”라고 말하는 YJ 씨를 보며 지금까지의 일본 생활에서 주거 때문에 힘든 점이 많았다는 것을 느낄 수 있었다.

YJ 씨의 어머니께서 집을 따로 빌려서 사는 것을 반대한 이유가 하나 더 있었다고 한다. 그것은 YJ 씨가 일본에 온 지 8 개월째 때, YJ 씨의 친언니도 일본으로 유학을 와서 함께 살기 위한 집을 알아볼 때의 일이라고 한다. “집 구하다가 사기당할 뻔 한 적도 있어요. ... 부동산에서 분명히 언니랑 저에게 결정권이 있는 게 아니라 어머니가 오시면 결정하겠다는 의사를 전달했는데도 불구하고 빨리 결정해달라는 연락을 받았어요. 일본 온 지 저는 7,8 개월밖에 되지 않았고 언니도 온 지 얼마 안 되어서 말이 안 통했어요. 그래도 돈을 내라는 정도는 알아들었는데 계속 빨리 계약해야 한다고만 하고, 인기 있는 물건이라 금방 다른 곳에서 계약해버릴 수 있으니까 한 달 치 집세나 소개비를 내면 그 집 계약할 수 있다고 아니면 다른 사람이 계약해버린다고 몇 번이나 재촉하는 연락이 왔어요. 처음부터 나는 일본어도 잘 못하고 당신이 말해도 잘 모르니 3 일 후에 어머니가 오시면 어머니가 일본어 잘하니까 그때 얘기하라 하고 집으로 왔어요. 그런데 기숙사로까지 자꾸 전화가 와서 빨리 돈을 내라는 거예요. ... 그때는 일본 사정에 대해 잘 모르는 상황이었고 돈 안 내면 무슨 일이 생길 것 같은

분위기여서 8 만 엔 정도를 그쪽에서 청구하길래 이사하려면 내야하는 돈이라 생각하고 돈을 썼어요. 근데 나중에 알고 봤더니 그 부동산 사람이 제가 살고 있던 기숙사까지 찾아왔었다는 거예요. 학교부터 집 주소까지 부동산에서 알고 있으니 점점 무서워지기도 하고 이 사람들하고 엮이는 것보다 어떻게든 빨리 마무리 짓는 게 낫다고 생각했죠. 그러다가 보증인을 부탁했던 일본분이 뭔가 이상하다고 일본에서는 이런 식으로 일이 처리되지 않는다는데 대신 처리를 해주셨는데...”라고 말했다. 그나마 다행이었던 것은 그때 YJ 씨가 일본 나이로 18 살이라 계약이 무효가 되어 돈은 돌려받을 수 있었다고 한다. 하지만, 이러한 경험 때문에 어머니를 안심시켜 드리기 위해서 몇 년은 계속 이사를 포기했었다고 한다. 또 “물론 일본에 있는 모든 부동산이 그렇다고는 생각하지 않지만, 학교를 통해서 찾는 게 더 낫겠다고 생각했어요. 어머니 걱정 때문이죠. 지금은 좋은 집도 결과적으로는 매우 잘 됐죠. 그때 이사 갔더라면 지금 집주인 아저씨는 못 만났을 테니까요”라고 말하면서 주거에 관한 에피소드를 들려줬다.

◇ 친구들과의 교류 ◇

처음에 학부 때는 같은 과 일본인 친구들과 가치관의 차이가 있어 친하게 지내던 친구는 없었다고 한다. 대학원에 들어가서는 비교적 규모가 작고 클래스에서 자주 만난 친구들이 있어서 몇몇 일본, 중국, 대만 친구들과 자주 연락을 하며 지낸다고 한다. 일본인 친구를 사귄 때 힘들거나 다른 점은 “가장 쉽게 말하면 신입생환영회처럼 한번 모임을 하고 술 마시거나 식사하면서 즐겁게 대화하고 나면 그 자리에서는 정말 친해진 것 같고 앞으로도 친하게 지낼 것 같아요. 그런데 정작 다음에 다시 만나려고 하면 일본 친구들 같은 경우는 보통 만나기 위해서 연락도 많이 해야 하고 스케줄 잡기도 어렵고 해서 결국은 그냥 그렇게 없던 일이 되어버려요. 반면에 한국인이나 중국인은 그런 얘기 나오면 바로바로 다음 약속을 정하거나 즉흥적으로 만나서 식사하거나 차를 마시는 때도 있어요. 일본인은 별로 그러지 않아서 같이 어울리기가 힘들다고 느꼈어요. 만나고 싶을 때 만나지 못한다고나 할까요.”

하지만, 그녀는 처음 일본생활에 적응하기가 쉽지 않아 사람들과의 관계에도 적극적이지 못했던 것이 후회된다고 했다. “‘의식주’ 특히 ‘주’가 정말 중요한 거 같아요. 그리고 상황이라는 것도요. 전에 살던 집(기숙사)이 안정적이지도 편하지도 않으니깐 그게 다른 데까지 영향을 줬던 거 같아요. 지금 생각하면 아무 일도 아닌데, 그때는 제 상황이 경제적으로도 심적으로도 너무 혼란스럽고 힘들었거든요. 경제적으로 풍요롭고 만족할만한 생활을 말하는 게 아니라 그냥 사소한 것 때문에 스트레스받고 싶지 않았어요. 학교 다니고 그냥 공부만 하면 되는데 그게 너무 그때는 제가 감당하기 벅찼던 거 같아요. 제 자신이 힘드니까 굳이 학교 친구들이랑 힘들게 친해지고 싶다는 생각도 없고, 그냥 다 귀찮아 했던 거 같아요. 한마디로 얘기하면 마음의 여유가 없었죠. 이사하고 나서는 일본 온 지도 꽤 되어서 적응도 되었고, 혼자 사니까 기숙사에서처럼 다른 사람 시선을 크게 신경 쓸 일도 없고... 다른 면에서도 마음의 여유가 생기니까 내가 좀 더 적극적으로 상대방에게 먼저 말을 걸어볼까하는 생각도 들고 부정적으로

보이던 것들이 긍정적으로 보이기 시작했던 거 같아요. 물론 다른 요소들도 있지만, 지금 사는 집으로 이사하고부터 제 생활도 마음도 너무 편해졌다는 걸 느껴요. 결국 마음가짐이 어떤가에 따라 좋은 일도 나쁘게 보일 수 있고, 나쁜 일도 좋아 보일 수 있는거겠죠.”

YJ 씨는 평소에 친구들을 만나면 신주쿠나 신오오쿠보를 자주 간다고 한다. “집이 요요기고 학교도 신주쿠구에 있어서 그런지 거의 신주쿠 아니면 신오오쿠보에서 친구를 만나요. 성격이 좀 남성스러워서 그런지 주위에 남자 친구들이 많아서 보통 한국 음식을 많이 먹으러 가요. 여자 친구들 만나면 스파게티 같은 걸 먹으러 가도 되는데 남자 친구들은 그런 걸 싫어하더라고요. 일본 생활이 오래 되다 보니 아는 사람들이 좀 있어서 감자탕, 해물보쌈, 통닭 등 여기저기 많이 가요.” (웃음)

10 년 전의 신오오쿠보와 지금의 신오오쿠보의 분위기는 많이 변했다고 한다. “한류 붐이 생기고 나서 분위기도 많이 좋아지고 많이 발전도 한 것 같아요. 주변 일본인 친구들이 한국 음식 먹고 싶다 해서 한 번씩 같이 가는데 아직까진 일본사람들이 신오오쿠보에 대해 일반적으로 좋은 이미지를 가지고 있진 않은 거 같아요. 인식이 많이 바뀌긴 했지만 아직까지 이미지 개선을 위한 노력이 더 필요하다는 생각이 들어요. 개인적으로는 같은 한국 사람들끼리 더 돕고 상호보완 할 수 있도록, 예를 들어, 삼겹살이 인기가 많다고 해서 신오오쿠보의 거의 대부분이 삼겹살을 팔 필요는 없잖아요? 서로 같은 메뉴를 두고 경쟁하기 보다는 신오오쿠보를 디즈니랜드 같은 하나의 테마파크로 만들었으면 하는게 개인적인 기대라고나 할까요. 좀 더 다양한 한국을 맛볼 수 있도록 변한다면 단순한 붐에서 그치는게 아니라 일본의 코리아 타운으로서의 입지를 더 좋은 이미지로 굳힐 수 있지 않을까 하는 생각이 들어요. 경영학 전공이라 이런부분까지 생각하는데 들리는 얘기로는 신오오쿠보에서 사업하시는 분들 인식도 많이 바뀌고 있다고 하니 기대해볼만 한 것 같아요.”(웃음)

◇ 장래에 대하여 ◇

지금은 조직론, 경영학 분야 중에서도 특히 조직 아이덴티티라는 개념에 대해서 연구하고 있다고 한다. 그러나 이 개념은 일본에서 거의 연구가 되지 않은 미개척 분야이기도 하다. 그래서 YJ 씨는 조직 아이덴티티라는 개념을 학문적으로 정착시키고 싶다고 한다. 그 한 가지 방법으로 연구자나 교육자의 길을 생각하고 있다고 한다. 부모님 때문에 언젠가는 한국에 가야겠다는 생각도 항상 하고 있지만, 취업 후 부모님을 일본에 모셔와서 함께 살고 싶다고 한다.

◇ 일본사회에 바라는 점 ◇

“특pecially 일본 사회에 바란다고보다 전공 쪽 이야기를 하자면, 세계적으로 전자제품 시장을 봤을 때, 지금 현재 상황은 한국 기업이 그동안 우위를 지키던 일본 기업을 뛰어넘은 상황입니다. 제가 만난 일본의 학자들 그리고 보통 일본 사람들은 항상 일본 기업이 다시 한국 기업을 이길 수 있을지에 대해서만 관심이 있는 것 같습니다. 그리고 항상 시장 점유율과 같은 숫자로는 한국 기업이 이기고 있을지 몰라도 기술적인 면이나 다른 면에서는

아직 일본 기업이 뛰어나다고들 합니다. 물론 일본으로서는 그렇게 생각하는 것이 당연합니다. 그게 사실일 수도 있고요. 하지만, 그렇게 뛰어넘어야지, 이겨야지가 아니라 공생관계, 이웃처럼, 아시아 연합(AU)이라는 관점에서 세상을 바라보면 다른 대답이 나오지 않을까요? 일본뿐만이 아닌 한국사람도 한국과 일본만이 아닌 더 넓은 시야로 세상을 바라봤으면 좋겠다고 생각합니다. 단순한 탁상공론이라 한다면 그 뿐이겠지만요.” 이 아시아 연합이라는 시점에 관심을 가지게 된데에는 집주인 아저씨의 영향이 크다는 YJ 씨. 그녀가 가지고 있던 일본인에 대한 이미지 변화와 긍정적인 마인드, 사물을 바라보는 시각 등 많은 영향을 받았다고 한다.

아마도 집주인 아저씨와의 만남은 YJ 씨에게 있어서도 귀중한 경험이 되었을 것이다. 또한 그 만남에서 더욱 더 의식주 중에서 <주>의 소중함을 느꼈을 것이다.

<インタビュー 20 (日本語訳) >

YJ さん(20 代/女性) 「大家さんの優しい心」

2010 年 9 月 14 日 プサン出身、大学院 博士課程、 日本滞在 10 年

インタビューア：呉 世蓮

◇ 役歴、家族 ◇

YJ さんが日本に来たきっかけはお母様の影響が大きかったそうだ。「お母さんが 45 年前に日本で留学生生活をして、その時お母さんの留学生生活はとても苦しかったが、子供が出来れば、日本で留学をさせて、勉強をさせようと決心をしたそうです。特に日本語の勉強をしないさいと言われた事は無いが、幼い頃から『貴女はやがて大きくなれば日本で勉強をするのよ。』といつも仰ってました。お母さんは高校の時やもっと小さい頃に留学をさせたかったが、当時は状況が良くななく…。」YJ さんはいつか一回は日本に行こうと思っていたが、当時の留学に関する規制、そして IMF 等の色々な事により、高校を卒業をして日本に留学に行くことになった。

現在(2010)YJ さんが日本に来て 10 年が過ぎて、大学の博士課程で組織と経営に関して研究をしている。学部入学前からお姉さんと一緒に生活していたが、その後お姉さんは大学院を卒業して、現在、京都でお仕事をなさっている。そして、アメリカで留学を終えて来たお兄さんとお姉さんは同じ会社でお勤めされている。YJ さんは学部 3 年から一年半ぐらい一人で暮らしていたが、何年か前からは高校の友達が日本に留学に来て一緒に暮らしている。YJ さんには日本留学生生活の‘衣食住’の中でも、特に‘住’に関してのエピソードがある。

◇ 住居に関するエピソード ◇

今住んでいる所は代々木の近くだ。ここの大家さんに会ってから、日本と日本人に関するイメージが大きく変わったという。今住んでいる所に引越す前はお姉さんと一緒に寮生活を送っていた。YJ さんは最初、留学に関しては特に関心が無かったそうだ。「母に留学院を通して情報を仕入れてもらいましたし、留学に行っても、韓国の人が多い所に行けば、生活の慣れが早いと思い、韓国人留学生寮に行ったんですよ。当時は為替も低く勉強だけでは無く、アルバイトまでして、一生懸命に暮らしている人達が多かったです。私もそうでしたが、自分の生活に追われて心や経済的に余裕が無さそうな人達が多かったです。家を離れて生活をして、自分を支えてくれる親や家族もいない状況で、どうしても一人で頑張って、生き残らなきゃと思っていたのでしょう。それで、お互い簡単に仲良くなれなくて。信じあってお互い支え合うのでは無く、警戒する事が多くありました。経済的に厳しい人も少し居たからか盗難事件が多かったです…」と言いながら、昔の事を振り返る YJ さんに詳しくその後の話を聞いた。当時某地域にあった寮はとても古い建物で施設も不便だったそうだ。3 畳半ぐらいの 2 人室で一人当たり 4 万 5 千円から 5 万円ぐらいの家賃で、光熱費は個人負担であったそうだ。当時 18 歳であった YJ さんは寮で一番年下であるという理由で寮の人々から注目の対象であった。日本に留学をする韓国人は主に、韓国の大学を卒業し、男の場合は軍役を終えた人達が多かったという。

不便な住まい、そして、生活環境、まだ一度も話した事もない人からの冷たい

視線や盗難事件などを経験しながら、YJさんは留学したことに後悔を感じたそう。しかし、一人で部屋を探し生活することによってお母さんに心配をかけたくないと思い、他の所に移らずに寮生活を続けた。そうするうちに学生寮自体が埼玉県に引っ越して、埼玉から学校（新宿）まで通学を始めた。2,3年ほど埼玉から通学した時には色々辛い事が多かったそう。寮近くの最寄り駅から学校の最寄り駅まで電車では25分程度しかかからないが、寮から駅まで自転車で20分、電車の時刻により、一度電車を逃したら授業に1時間ほど遅れて到着する時もあった。それで、日頃の合間を見つけて、不動産の前で空室などの情報をチェックしたりしていた頃、姉が大学院を卒業し、学生寮の契約更新もそろそろだったので、学校が運営する住宅センターを訪ねた。「あまり期待せずに行ってみたんですが、とてもいい条件の所があったんですよ、家も広く、建てられたばかりで価格も相場よりも安かったです。大家さんに連絡して、その日の夜7時くらいに友人と二人で見に行きました。直接見てみて、その家にぜひ住んでみたいと思いました。そして、何故このように良い条件の部屋を安く貸してくれるのか気になったんです。後から大家さんに聞いたんですけども、医学部入試の専門学校を運営する方で、国際医療貢献に感心があり、家を建てる時に、建物の1階の面積の3分の1程度を留学生に貸そうとわざわざ、分けて造ろうとしたそうです。金儲けのために部屋を貸すのではなく、他に理由があったのです。そのように契約をして、3日後にすぐに引っ越しました。ここに住み始めて5年くらい経ちましたね」と言うYJさんを見て、これまでの日本生活のなか、住まいの問題に関して色々苦労したことが感じ取れた。YJさんのお母さんが部屋を借りるのに対して、反対する理由が別にあったそう。それは、YJさんが来日して8ヶ月目の時、お姉さんも日本に留学に来て、一緒に暮らそうと思い、家を調べた時らしい。

「家を借りる時に詐欺にあいました。不動産屋には、お姉ちゃんと私には決定権がないので、母が来日するときに決めたいという意味を伝えたにもかかわらず、すぐに決めないといけなしとしつこく言われました。日本に来て、私は7,8ヶ月しか経っておらず、お姉ちゃんも来て間もないので言葉が通じなかったです。それでもお金を早く払いなさいという意味ぐらいは分かっていました。何回も早く契約しなければならい、なぜかという、人気のある物件だから直ぐに他の人が契約してしまうので早く1か月分の家賃や紹介料を払って欲しいと、連絡が何回も来ました。よく分からないので3日後に母が来日するし、あと母は日本語も上手なので、その時、この話をしてくださいと言って帰りました。ところが、寮にまで何度も電話がきてすぐにお金を払いなさいというんです。」「その時は、日本の事情もよくわかっていなかったし、その不動産屋の人々が、私が住んでいた寮にまで来たと聞きました。学校から自宅の住所まで、不動産屋が知っているの、ますます怖くなりました。お金を払わないと何かされそうな気がしたので、引っ越しするには、払わなければならないお金だと思い、8万円程度を渡しました。しかし、保証人をお願いした日本の方が、何かおかしいと、日本ではこのように部屋を借りないと教えてもらい、代わりに解決してくれました」という。

幸いな事はYJさんが、日本の年齢で18歳なので契約が無効になり、お金は返って来た。しかし、このようなことがきっかけで、母を安心させるために、何年かはずっと引っ越しを断念していたのである。

「もちろん、日本にある全ての不動産がそうだとは思いませんが、母に心配をかけるので、学校を通して借りるのが一番良いかと思いました。結果的には、今の部屋を探せたので良いですが、もし、その時に引越しをしていたら、今の大家さんには出会えなかったと思います」と、住まいに関するエピソードを聞いた。

◇ 友達との交流 ◇

学部時代は、日本人との価値観の違いがあり、親しい友人はいなかったという。

大学院生になってからは、規模が比較的小さく、クラスで良く会う日本、中国、台湾の友達がいるそうだ。日本人の友達と韓国人や中国人の友達との違いを言ってくれた「最も簡単に言えば、新入生歓迎会のように一度の集まりをして酒を飲んだり食事しながら楽しく会話すると、その場では、本当に仲良くなったようで、これから親しくなれる思いきや、その後、再び会おうとすると日本の友達は、次、会うために連絡も沢山とらなければならないし、スケジュールを合わせることも大変で、結局は、会えなかったことがけっこうありました。一方、韓国や中国からの友達はそうのように会う話が出ると、その場で直ぐ約束をして、即興的に会って食事をしたり、お茶を飲んだりする時が多いです。日本人はあまりそうならないので大変だと思いました。会いたいと思ったときに会うことができないといいいましょか」。

しかし、彼女は最初、日本の生活に慣れ難く、人との関係にも積極的ではなかった事を後悔している。

「衣食住のうち、特に『住』が本当に重要ですね。あと状況ということもです。前に住んでいた寮が安定的でもなく、楽でもなかったもので、他のところにまで影響を与えたようです。今考えても何もないですが、その時は私の状況は、経済的にも心理的にもあまりにも混乱して大変だったんですよ。経済的に豊かで満足のいく生活と言うのではなく、ただ些細なことからストレスを受けたくありませんでした。学校に通ってただ勉強だけすれば良いのですが、それもその時は大変だったようです。私自身が大変だから、あえて学校の友達と親しくなりたいという気持ちではなく、すべて面倒だと思っていたようです。一言で言えば心の余裕がなかったんです。引越ししてからは、一人で暮らしているから、寮のように他の人の視線が気にならず、他の面でも心の余裕が出来たので、私からもう少し積極的に友達や相手に先に話をかけてみようかという気持ちになり、否定的に見えたものが肯定的に見えてきたのです。もちろん、他の要素もありますが、今住んでいる家に引っ越してから私の生活も心もとても楽になったということを感じます。結局、気持ちがどうなのかによって、良いことが悪く見えたり、悪いことも良く見えたりするのでしょうか」。

YJさんはいつもの友人たちに会えば新宿や新大久保に良く行くという。「家が代々木で、学校も新宿区にあるため、ほとんど新宿か新大久保で友達に会います。性格が少し男の子みたいなので周りには男友達が多く、韓国料理をたくさん食べに行きます。女友達に会えばパスタのようなものを食べに行ったりしますが、男友達は、そういうのは嫌みたいです。日本での生活が長くなって、知り合いのお店も多く、カムジャタン、海鮮ポッサム、鶏の丸焼きなど食べに、よくあちこち行きます（笑）」。

10年前の新大久保は今の新大久保の雰囲気とはまったく違ったと言う。「韓流ブームが出来てからは雰囲気もよくなって、発展もしたようです。周辺の日本人の友人たちが韓国料理を食べたいと言って、一緒に行ったりしますが、日本の人々は新大久保に対して、一般的に良いイメージをもってはいないようです。認識が大きく変わりましたが、まだイメージの改善のためにもっと、努力が必要だと思います。個人的には同じ韓国人同士がより助け合い、相互に補完できるように、例えば、サムキョプサルが人気あると言って新大久保のお店のほとんどが、サムキョプサルを売る必要はないでしょう？お互いに同じメニューを置いて競争するのではなく新大久保をディズニーランドのような一つのテーマパークにするのが、個人的な期待といえるでしょうか。より多様な韓国を味わえるようになれば、単なるブームで留まらず、日本のコリアタウンとしての地位をより良いイメージに作り上げられるのではないかと思います。経営学専攻だからこんなところまで思いますが、聞こえる話では新大久保で商売する方々の認識も変わっていくと、期待してみる価値はあると思います（笑）」。

◇ 将来に関して ◇

現在は、組織論、経営学の分野の中でも特に、組織アイデンティティという概念について研究をしているという。しかし、この概念は日本ではほとんど研究がされていない未開拓の分野でもある。そこでYJさんは、組織アイデンティティという概念を学問的に定着させたいという。その一つの方法として、研究者や教育者の道を考えている。両親のためにいつかは韓国に帰らなければならないという気持ちもあるが、就職後に両親を日本に迎えて一緒に暮らしていきたいという。

◇ 日本社会にお願いしたい事 ◇

「特別に日本社会に望むというよりも専門の方の話をしたいです。世界的に電子製品の市場を見たとき、今現在の状況は、韓国企業が、これまで優位を守っていた日本企業を超えた状況です。私が出会った日本の学者たちや日本の人々は、日本企業が再び韓国企業に勝つことができるかについてのみ関心があるようです。そして、常に市場シェアなどの数字では韓国企業が勝っているかもしれませんが、技術的な面や、他の面では、まだ日本企業が優れているといわれています。もちろん日本としてはそのように考えるのが当然です。それが事実であることもあって。しかし、そのように越えよう、勝たなければならないのではなく、共生関係、近所の人のように、アジア連合（AU）という観点から世界を眺めると、別の答えが出てこないでしょうか。日本だけでなく韓国人も韓国と日本だけでなく、より広い視野で世界を眺めてほしいと思っています。単なる机上の空論だといわれれば、それだけです」。

このアジア連合という視点に関心を持つようになったのは、大家さんの影響が大きいというYJさん。大家さんからは日本人に対するイメージの変化や、ポジティブマインド、物事の捉え方など、多くの影響を受けたという。

彼女にとって大家さんとの出会いは、かけがえのない貴重な出会いだった。そしてこの出会いから、「衣食住」でも、特に「住」の大切さを実感したのだろう。

スケジュール／스케줄

2009 年

- 11 月 準備
- 12 月 パイロット調査

2010 年

- 1 月 インタビュー開始
- 5 月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 9 月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 10 月 中間報告会・中間報告書発行

2011 年

- 5 月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 9 月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 10 月 最終報告会・最終報告書発行

2009 年

- 11 月 준비
- 12 月 예비조사

2010 年

- 1 月 인터뷰 개시
- 5 月 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 10 月 중간보고회, 중간보고서 발행

2011 年

- 5 月 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 9 月 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 10 月 최종보고회, 최종보고서 발행

プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버

渡辺 幸倫（わたなべ・ゆきのり／와타나베 유キノ리）相模女子大学学芸学部准教授／社会教育、言語教育

若園 雄志郎（わかぞの・ゆうしろ／와카조노 유시로）北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 博士研究員／多文化教育、少数民族の教育

川村 千鶴子（かわむら・ちずこ／카와무라 치즈코）大東文化大学環境創造学部教授／移民政策、多文化社会論

宣 元錫（そん・うおんそく／선원석）中央大学総合政策学部兼任講師／社会政策、労働問題、移民政策

藤田ラウンド 幸世（ふじたらうんど・さちよ／후지타라운도 사치요）国際基督教大学教育研究所研究員／社会言語学、バイリンガル教育

河合 優子（かわい・ゆうこ／카와이 유코）東海大学文学部准教授／異文化コミュニケーション、メディア論

李 坪鉉（い・ほひょん／이호현）早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師、和洋女子大学人文学部非常勤講師／社会教育、文化間移動者の文化変容

武田 里子（たけだ・さとこ／타케다 사토코）明星大学非常勤講師・放送大学東京文京学習センター非常勤講師／地域社会学、多文化社会論

堀内 康史（ほりうち・やすし／호리우치 야스시）大東文化大学環境創造学部非常勤講師／社会学

呉 世蓮（お・せよん／오세연）早稲田大学大学院教育学研究科／生涯教育、多文化教育の日韓比較

李 恵美（い・へみ／이혜미）筑波大学大学院人文社会科学研究科／国際地域研究

この研究に関するお問い合わせは：

연구에 관한 문의는：

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1
相模女子大学 10 号館 406 研究室 渡辺幸倫

watanabe-y@star.sagami-wu.ac.jp

プロジェクトのホームページ：

<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com>

発行日：2011 年 9 月 15 日

無断転載を禁止します

この研究に関するお問い合わせは：

연구에 관한 문의는：

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1

相模女子大学 10 号館 406 研究室 渡辺幸倫

watanabe-y@star.sagami-wu.ac.jp

プロジェクトのホームページ：

<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com>

発行日：2011 年 9 月 15 日

無断転載を禁止します